

70

NO.1
¥100

安保フサイへ・人間の渦巻を!!

週刊アンボ

出た!
安保を
私たちに
沖繩を
私たちに
佐藤訪米阻止



これが創刊号だ

何？

「週刊アンポ」とは、何なのでしょう。雑誌です。たしかに、雑誌です。しかし、たんに、雑誌ではありません。これは道具です。武器です。パン種です。パンそのものです。そして、力です。

何を？

何を、「週刊アンポ」、いや、その名の道具、武器、パン種、パン、そして、力はやろうとしているのでしょうか。

三つのことです。

「安保をつぶせ！」

「沖縄を私たちの手に！」

「日本を私たちの手に！」

この三つのことをなしとげるためには、日本中に大きな、さまざまな運動が起ることが必要です。不可欠です。ことばをかえて言いましょう。「人間の渦巻」をつくり出すことが必要です。不可欠です。「週刊アンポ」は、その「人間の渦巻」をつくり出すための道具です。武器です。パン種です。いや、パンそのものです。そして、「人間の渦巻」が日本中にまき起ったとき、

それは、力です。

安保——日米安保条約をつぶすための、沖縄を私たちの手にとり戻すための、日本を私たちの手のなかで、私たちのためのほんとうの日本にするための力です。

その力を、「アンポ」と片カナで呼びたい。「週刊アンポ」はその意味をこめて名づけられたのです。

何のために？

何のために、安保をつぶすのか。沖縄を私たちの手にとり戻すのか。私たちのための日本をほんとうの日本にするのか。答はさまざまです。多くの答があります。しかし、ここでは、もっともかんじんなことがらを、ただ一つだけ言っておきましょう。

日本中に「アンポ」の渦巻を！ 「人間の渦巻」を！

しょう。

それは、私たちすべてが人間をとり戻すためです。人間らしく生きるためです。本土にいる人間も沖縄にいる人間もみんなが——いや、アメリカ人もベトナム人も朝鮮人もソ連人もインド人もチエコスロバキア人もボリビア人も、みんなが人間として生きるためです。

それほど、安保条約の根、それがつくり出したものの根は深いのです。あるいは、それをつくり出したものの根は広いのです。

いつ？

それでは、いつ、この「人間の渦巻」をつくり出すのか。答は一つです。さまざまでも、多くありません。ただ一つです。すなわち、今、すぐ。

誰が？

あなたです。「週刊アンポ」を今手にして読んでいるあなたです。

どこで？

あなたのところで。あなたが今、暮している、まさにそのところで。

どんなふうにして？

さまざまなやり方です。「週刊アンポ」を核にして、パン種にして、道具にして、武器にして、あるいは、連絡の手段として、自分の意見、行動を伝える物として——そして、自分で自分の運動をかたちづくるのです。

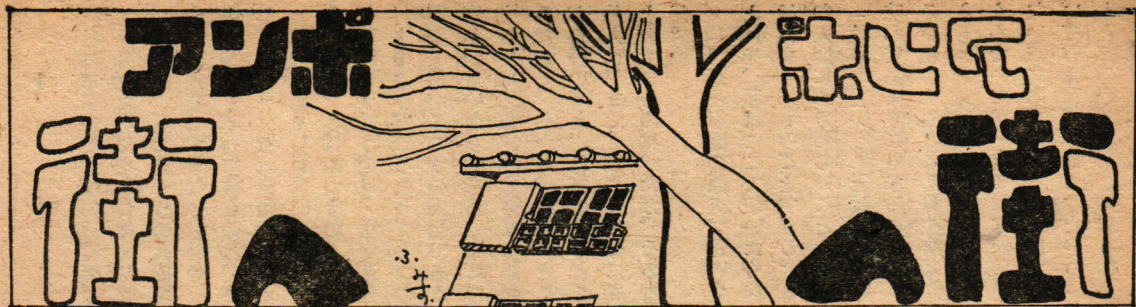
誰が「週刊アンポ」をつくるのか。

ふたたび、あなたです。今「週刊アンポ」を手にはしているあなた以外にはない。読み手も書き手をつくり手もスポンサーも、そして、運動をつくり出す人間も、すべてが、あなたです。

「週刊アンポ」の基金は、すべて、カンパによつてつくられました。いや、それはまだまだ十分ではありません。あなたが自分でスポンサーの役を負って出ないかぎり、「週刊アンポ」に自分でとりくまないかぎり、「週刊アンポ」は活動をつづけることはできない。お金のつづきかぎり、「週刊アンポ」は世に出て、力であることをつづけるでしょう。お金を出して下さい。何故なら、あなたが、「週刊アンポ」をつくるのだから。

そして、「週刊アンポ」はみんなで書く雑誌です。ひとにぎりの専門家だけが書く雑誌ではない。みんなが思い思いの意見、考え、行動の記録、行動の提案をおたがいにつけあう場なのです。書いて下さい。どしどし書いて送って下さい。何故なら、あなたが「週刊アンポ」をつくるのだから。

そして、もう一度言いましょう。「アンポの渦巻」をつくらう。日本中に「人間の渦巻」をみんなで作くらう。あなたがそれをやるのです。「週刊アンポ」を今手にしているあなたが。



このページは、反の安保行動を起しているあらゆる団体、グループ、そして、あなたのためのページです。

二週間ごとの行動日程、および反安保のための公判日程を載せてゆきます。

今回は、いわばそのモデルです。二号から、あなた自身の手でこのページをうめて下さい。

12月1日から15日までの行動日程、公判日程を週刊アンボまで知らせて下さい。ノ切は11月20日です。

11・17 ↓ 12・1

☆革マル 11月17日、羽田現地闘争

☆グループCAT 11月20日、27日、午後7時に下北沢で学習会（定例毎週木曜日） 11月22日、29日、午後3時、国分寺で学習会（毎週土曜日） 連絡先↓国分寺市本多2-18-4 井上淳子気付

☆公明党 17日より竹入委員長、矢野書記長らを中心とした佐藤訪米抗議の大連統講演会。公明党の沖縄基地総点検の結果にもとづく政府批判。大体の日程つぎのとおり。竹入委員長（17日新潟、18日東京、19日千葉、20日名古屋、21日東京、22日福島） 矢野書記長（17日神

奈川、18、20日東京、21、23日茨城）
☆佐世保ベ平連 11月23日、学習会（毎月第4日曜日）
連絡先↓佐世保市万津町1-2 本田将治気付
☆佐世保19日のデモの会 11月19日、午後6時、松浦公園に集まりデモ（毎月19日）
連絡先↓佐世保市稲荷町27 矢動丸広気付
☆新学同 11月23日、午後2時。関西新学同決起集会（大阪、会場は未定）
☆社会党 11月17日、時間未定 大田区民広場集合（予定）
その後デモ行進
☆中核 11月17日、羽田現地闘争
☆名古屋ベ平連 11月17日、22日、24日、29日、午後6時30分に事務所で集会（毎週火、土曜日） 連絡先↓名古屋市中区新栄町2-1-1 高木ビル 名古屋アンボ社気付
☆新潟ベ平連 11月22日、29日に古町十字路でカンパ活動。（毎週土曜日） 連絡先↓新潟市関屋本村1-149 中矢喜二郎気付
☆反帝学評 11月17日、羽田現地闘争
☆広島ベ平連 11月22日、午後2時30分に平和公園噴水東側に集まりデモ行進（毎月第4土

公判日程

11月18日（火）
午前10時 ☆ラグビー場2グループ（東大）ハ東京地裁・504法廷V ☆法経3グループ（東大）ハ東京地裁・506法廷V

11月19日（水）
午前10時 ☆安田2 安田19の併合グループ（東大）ハ東京地裁、法廷番号は不明、午後1時に変更になる可能性ありV
午後1時 ☆6・11（日大）ハ東京地裁・法廷番号は未定V
11月20日（木）
午前10時 ☆法研1、4の併合グループ（東大）ハ東京地裁703法廷V

11月24日（月）
午前10時 ☆本郷3丁目のグループ（東大）ハ東京地裁 加法廷V
11月25日（火）
午前10時 ☆安田14のグループ（東大）ハ東京地裁 503法廷V
11月26日（水）
午前10時 ☆安田99（東大）ハ東京地裁 法廷番号は未定、午後1時に変更になる可能性ありV
午後1時 ☆安田6、16の併合グループ（東大）ハ東京地裁、703法廷V

曜日） 連絡先↓広島市東千田町 広大わだつみ会気付
☆福岡十の日のデモの会 11月20日、30日、午後6時に市役所前に集まりデモ行進（毎月10日、30日）。 連絡先↓福岡市箱崎、九大工学部応用数理学教室 山田俊雄気付
☆平和のために市民の対話を進める会 月例会と市民対話のつどい（日程不明） 連絡先↓広島市牛田町 広島女学院大学
☆南大阪ベ平連 11月22日、29日、午後3時から6時まで阿倍野地下センターにて定例行動（毎週土曜日） 連絡先↓大阪市阿倍野区松崎町2-5-31 南大阪ベ平連
☆山口ベ平連 11月22日、午後2時に山口大学本部前に集まりデモ行進（毎日第4土曜日） 連絡先↓不明、連絡先を知らせてください！（以上五十音順）



私は革命家ではない。尖锐な意識と人なみ外れた勇氣をもつ偉大な革命の戰士ではない。私はふつうの人間である。ふつうの人間にすぎない。いや、すぎないと一歩へり下って言うのは、やはり、よしにしよう。それは謙虚に見えて、かえって、傲慢でしかない。もう一度、言いなおそう。私はふつうの人間である。

私がこう言うのは、私が自分の考え、行為のよりどころとしてもつのは、その事実、私がふつうの人間であるという事実しかないからである。私にだって、さまざまな知識、さまざまな思想のいともみはある。しかし、究極のところ、私が自分の考え、行為のよりどころとして他人に、また、誰より自分にさし出すことのできるのは、ただ、その事実だけだ。

「思想と行動の原点」というようなことばを、私はここで使いたくない。それはあまりにもみごとすぎる。もっと偉大な人間にふさわしいことばだ。第一、「原点」ということばは、ただ一点を意味してあまりにもするとすぎる。狭すぎる。私のよりどころは生ま身の人間だからもっと幅が広い。さまざまなものをふくんでいて、一点ではない。ひろがりのない点におさめすることはできない。強いて言えば、「原点」というよりは、根もとだろう。根もととはなるほど鋭さを欠

いている。しかし、ちょっとやそっとのことではゆるぎはしない広さをもっている。そんな感じだ。

生ま身の人間がふくむさまざまなものには、まず、からだがあるだろう。あるいは、からだの条件がある。たとえば、私は三七歳。中年肥りに肥っていて、顔もまるくふくらんでいて、一見して田舎の政治ボスの風貌で、決して、鮮烈なイデオロギーに生き、殉じる革命青年のた

何を、今、なすべきか

——外へひろがる「人間の渦巻」を——

小田 実

ぐいではないことは判る。昔、誰かが、狼生きろ、ブタは死ぬ、と言った。その分類にしたがうと、私は、さしづめ、ブタ族の一員だ。すくなくとも、かっこうから言えばそうで、それを私は否定しようと思わない。カッコイイ若者は、今、世の中にはあまたいる。そっちがカッコイイとすれば、私はカッコがまさにわるい。何をしても、また、何を考えても、私の行為、考えは、あんまり、カッコイ

を放っていて、今、思い出しても気持ちいいものではない。

しかし、それでいて、そのイメージは、崇高なまでの姿として、生ま身の私に迫って来て、私に根源的な思考を強い、私にさまざまな行為におもむかせる勇氣をあたえる。そして、後者の岸信介、賀屋興宣両氏の姿、言説をふくむカッコよさは、私にヘドを催させる。

中年肥りだから、からだが重い。そこへもってきて、過去四年半、「ベ平連」(「ベトナムに平和を!」市民連合)のことで動きまわったこともあって、少しガタが来ている。疲れて困る。デモ行進のなかでジグザグ行進でもしようものなら、私は息切れがする。すぐ、ゼンソクの咳が出る。それよりはしずかに歩くほうがむいてる。からだにも、性にもあっている。しずかに歩き、歩道の人々に呼びかけ、人々を隊列に招き、人々といっしょに歩く。それは、ジグザグ行進と同じように、必要なことだ。

私の足はのろくて、激烈な急流をかたちづくることにはむいていない。しかし、長く歩くことのできる足なら、私はもっているような気もする。一時の急流をかたちづくることより、私は、むしろ、深く、広く、海を動かすことに力を注ぐだろう。と言っても、ここでも、私は、どちらがよいとかわるいとか、効果的かどうかとか、そうしたことは言い出したくない。私は自分でできることをや

る。きみはきみで、できることをやれ。それだけだ。

私のからだのこと、からだの条件のことをもう少し述べてみよう。私はかなり背の高いほうだ。電車に乗って見まわしても、私より背の高い人はあまりいない。しかし、それでいて、私の背の高さは、世界の行く手をはっきりと見さだめ、人々に号令して、そちらへ行け、と命じるほどの高さでは決してない。佐藤栄作氏なら、そうした背の高さをもっていと錯覚できるかも知れない。あるいは、彼は日本社会というピラミッドのいただきにあつて、すべては見通しであるとそう錯覚して語っているのだろう。

そして、今また、逆のところで、逆のことを言っている人たちがいるかも知れない。こちらへ行けば、こちらへ自分の言う通りに動けば、日本の革命はなる、と那些人たちは論じているのだが、私の背の高さが許す眼の位置では、そこまでは見通せない。私の背の高さで見えるものは二つあって、たぶん、その二つがあまりにも大きいもので私の見通しを妨げているにちがいない。それに私は私なりにぶつかって行って、叩きつぶしてしまわないかがり、先の見通しはつかないのである。ここまで言えば、もうお判りのことだろうが、二つのうちの一つは、安保——日米相互安全保障条約。もう一つは、アメリカによる沖縄支配、いや、事実上の領有。二つは結びついて一つの壁

となつて、私のまえに立ちはだかる。

私はそこに登ればすべては見通しだという便利なピラミッドをもっていない。あるいは、この通りにやれば日本の革命はたちどころになるといふうな魔法のような原理も手だてももっていない。私はふつうの人間だから、どちらもない。けれども、そのふつうの人間である私の眼から見れば、そうした便利なピラミッドなどどこにもないのだ。ピラミッドがあつて、その頂上にのかつてすべてが見通しだ、日本の行く手はこれだ、と威丈高に叫んでいる佐藤氏の姿は、まさに、「裸の王様」のように見えて仕方がない。いや、「裸の王様」なら、私たちは無邪気に笑つていことができる。佐藤氏の場合はどうか。無邪気に笑ひとはしていることができるか。

日本の革命を見通す若者たちの場合、彼らにどのような魔法の原理と手だてがあろうとも、私の眼には、私というふつうの人間の眼には、それは、私自身をふくめたふつうの人間からかけ離れたところであるものではないもののように見える。ふつうの人間とともに歩むという具体的行為のなかでしかできないものであるように思える。

2

ふつうの人間である私には、一昨年十一月、私のまえにあらわれて、のち、スエーデンへ去つたアメリカの脱走兵リチ

ャード・ベイリーが書き残して行つた日記の一節がいまだに気にかかつてならない。ベイリーは北爆参加の航空母艦「イントレピッド」から脱走して来た四人の若者の一人だが、ベイリーが私の心をひきつけるのは、彼がふつうの人間であつたこと、彼が自分でそれを充分に意識しながら自分の行動をくみだてていたことにあるのだろう。日記の一節がそれをよく示している。

「十一月一日十時起床。例の文学青年が案内に来て、飯を食う。地下鉄に乗り、Nの家へ。共同声明を仕上げる。一人ひとりの声明も完成する。鶏を二羽食べる。新しい服をもらい、下着をかえる。脱走してから初めてだ。N家を離れたのは朝の七時。その晩、記者会見用の映画をとる。晩の十時から朝の六時まで。のちになつて、私は書いてい

る。『今から思えばなんでもないことのようにだが、私たち（彼らを助けた仲間という意味だ）は、やはり、緊張していたのだろう。それは、彼も同じだ。いや、もちろん、それ以上だったのだろう。つかまれば何年かの刑が待ち受けている。それでいて彼はまさに淡々と述べる。あたかも、自分の脱走の理由を強力に主張する

声明をつくることと、あるいは、それと同じ意味と重要性をもつ映画撮影と、『鶏を二羽食べる』こと、『下着をかえる』ことがすべて大事なことであるかのやうに——いや、ふつうの人間にとつて

は、そのすべてが大事なことで、それでいて、彼はそのすべてが大事なことのなかでなぜ脱走という行為を選びとつたのか。そのころ私も彼ら四人とともにいて、さきゆきのまったく判らない不安とこわさのなかにいて、それでいて、鶏を食べることも下着をかえることも重要で、そして、また、それでいて、不安とこわさのなかにわざわざ押し入って行くようなことをしていたのか。〔無題の発想〕それは、たぶん、問題が、彼というふつうの人間の根元、私というふつうの人間の根元に突きささることがらであつたからなのだろう。ベトナム戦争は、ベイリーにとって、大げさなことばをあえて使つて言えば（脱走という行為は、そのことばに値する行為だ、彼という人間を人間たらしめている究極の原理に突きささることがらだったのだと私は思う。そして、もう一つ言えば、ベトナム戦争、また、ベイリーの脱走という行為もまた、私という人間を人間たらしめている究極の原理に突きささることがらだったのかも知れない。

しかし、人間は究極の原理だけで生きているのではない。人間は同時に生身のからだをもつ。象徴的に言えば、『鶏を二羽食べる』、『下着をかえる』、その二つは、彼の脱走という行為と結びつき、からみあう。

ベイリーがふつうの人間でなかったなら、より正確に言えば、そうした事実を

自分ではっきりと認めていなかったとし
たなら、おそらくは、その二つのことが
らは重要でないことがらとして切り捨て
てしまつて日記には書かなかつただろう
と思う。彼は切り捨てなかつた。という
ことは、その日常的な二つのことがらを
ふくめて、彼は自分の脱走という重大な
行為を考へていたということだろう。日
常性という生身のからだをふくめて、
人間の究極の原理を考へていたというこ
とだろう。彼は日常性を決して否定しな
い。彼はそのなかで、そのなかでしか、
自分が生き得ないということを知ってい
る。どのような非日常的行為（脱走とい
う行為はまさにそうだ）のなかにも日常
性が確固として根をはっていること、ま
さにそのことにおいて人間が人間である
こと、どのようなたたかいかぎりをもつと、
その事実を根元にすえないかぎりたたか
いにくみたて得ないことをはっきりと見
ぬいていたように思う。

3

日常生活の根本は「生きる」というこ
とだろう。それは、ともすれば、「とに
かく生きる」、「他人様のことなんか知ら
へんで、わいは、とにかく生きるんや」
ということになり、他人の犠牲の上にの
りかかつて生きるということにもなる。
「生活がかかっているんやで、とにかく
く」、「人間、生きて行かなしょうないや
ないか。青臭いことは言わんとき。」こ

れは、ひとりひとりの人間にも言え、人
間の集合体である国家にも言える。もち
ろん、私たちの日本についても言えるの
である。

ペイリーが脱走を決意し、敢行したと
き（そのことを、彼は日記のなかで、
「丘を越える」と書き記している）、彼
はそうした日常生活の根本に人間として
の原理を突き入れたのだろう。「とにかく
生きる」ということばに対して、彼は
「人間として生きる」ということばをぶ
つけたにちがいない。彼は、ベトナム
での軍隊生活というものは少し我慢すれ
ば決して耐えられないものでなかつたとい
う意味のことを述べていたことがあつ
た。すくなくとも、「とにかく生きる」
という立場に立てば、決して我慢のでき
ないものでなかつたにちがいない。しか
し、「人間として生きる」立場に立てば
どうか。彼は丘を越えなければならな
いと感じ、越えた。

これは、一人の人間がデモ行進に参加
するときにも言えることだろう。「とに
かく生きる」立場に立てれば、たと
え、ベトナム戦争がどうあろうと、そこ
にどのように日本が加担し、あるいは、
自分の勤める会社がそれにどのようにか
かわりあいをもつていようと、少し我慢
すればそれでいいことなのだ。しか
し、もう一つの立場に立てば、それは、
どうなのか。多くの人が、ここで、たと
え、小規模であれ、丘を越え、今も越え

ようとしているのである。

安保条約と沖縄の問題についても、ま
さに同じことが言えるだろう。たとえ
ば、安保条約が「とにかく生きる」とい
うことに直接のしかかつて来る場合は、
日本人の総数から言えばむしろ少数の場
合だろう。それは「基地の町」の住人に
かぎられたことであつて、そこでは、た
しかに、アメリカの基地の存在が「とに
かく生きる」ことにさえあからさまにお
おいかがふさつて来る（たとえば、騒音、
電波制限、あるいは飛行機の墜落の危
険）。しかし、多くの日本人にとっては
そうではないだろう。「とにかくも生き
る」ことに徹するかぎり、それは我慢で
きないことではないのだ。しかし、「人
間として生きる」ことになればどうか。

それは、たとえば、「基地の町」の住
民の苦勞（彼らは、くり返して言うが、
「とにかく生きる」ことにさえ危険を感じ
ているのだ）、を自分の問題としてと
らえ、そのことを自分の生きるというこ
とのなかに包ガンすることだろう。ある
いは、日本のなかのアメリカの基地で準
備された（そして、日本製だとも言われ
る）ナパーム弾の火焰を身にあびて死ぬ
ベトナム人の死を自分の死として、彼の
苦痛を自分の苦痛としてとらえ、それを
自分の「生きる」ことのなかに突き入れ
ることだろう。そして、もう一つ言うな
ら、そうした非人間的な行為を強いられ
て行なうアメリカ兵（たとえば、彼が嬉々

としてベトナム人を殺リクしていても、
より大きなカラクリのなかでは、彼はそ
れを国家という強大なものの手で強制
されて行なっているのだ」のこともま
た、自分の問題として考えることではな
いのか。ひょっとしたら、いや、すでに
確実に、この文章を書いている私、この
文章を今読んでいるあなたの手も、彼の
その手にそえられている。いやおうなし
にそうされてしまつていて、それを強い
るのは、安保条約であり、その条約をさ
らに延長しようとする佐藤政府なのだ。

沖縄を象徴的に語つたのは、一枚の写
真だった。アメリカ兵に銃剣をつきつけ
られているストライキ中の沖縄の基地労働
者の写真——その写真はさまざまな事
実をあらわしていたにちがいない。ま
ず、沖縄とアメリカの関係をこれほど端
的に示していたものははかになかつただ
ろう。それは、一口に言つて、奴隷の
境涯に人々がおかれていたということ
だ。そして同時に、それは、そうした奴
隷の境涯をはね返す意志と力を入々か
もっていることをも示していたのだ。

しかし、同時にまた私たちは、その人
々が基地のなかで何をしているのかを考
えてみる必要があるにちがいない。その
うちのある者は、ベトナム爆撃のための
爆弾をB-52に積み込む作業に従事して
いるのかも知れない。とすると、ここで
悲惨な図式ができ上る。すなわち、彼ら
はアメリカの兵隊によって銃剣をつきつ

三一書房

滝沢克己

現代への哲学的思惟

根底的変革の時代に生きる

人間の「存在」を追求する！

万人の事としての哲学／人間存在
における必然と自由／経済学にお
ける「具体」と「抽象」／その他

四六判・780円

小田実編

三一新書
320円

べ平連

★あらゆる空間に反戦の渦を！
★闘う市民の思想と行動！

東京都千代田区神田駿河台2-9

けられることで（より根本的に言えば、アメリカの基地で働かざるを得ない状態に追い込まれることで）まぎれもなく被害者だが、まさにそうであることによつて、残虐な加害者である、すくなくともそれに手をかしているという図式ができ、上るにちがいない。こうした図式は、佐藤栄作氏の言う「核ぬき、本土なみ」という美しいことばで解消されることがあらうか。むしろ、解消されはしない。ただより大きく拡大したかたちで、より永続的な確固としたかたちで、定着されるだけのことだ。なるほど、ベトナム戦争はもうすぐ終るかも知れない。しかし、安保条約がかたちづくる体制——「安保体制」がつづくかぎり、それはそうした悲惨な図式を内包した体制で、いつまでも図式は存在しつづける。

この図式にただ一つ理屈をつけるとすれば、それは「とにかく生きる」という理屈だろう。佐藤栄作氏も、それにしたがう世のおえら方たちも、すべて、その理屈をうしろだてにして居なおっているにちがいない（これは、「大学管理法」をあのような無茶苦茶な過程で採決しても、「とにかく法律は法律だ」と強弁する考えのたて方にそのまま通じる）。そして、ひょっとしたら、彼らもまた、この理屈がどうにも盗人の理屈めいていて筋の通らないものであるかのように感じていて、それで、逆に、あんなふうにはキチガイじみた態度と政策で「人間として生きる」ことを求める人たちの動きを押しつぶそうとしているのかも知れない。

さらに考えを進めてみよう。「とにかく生きる」ことに固執し、それを金科玉条のようにかかげてただそのことだけに狂奔することは（それが現に佐藤栄作氏自身で行ない、私たちに押しつけようとしていることだが）、かえって現実的には「生きる」ことそれ自体を根こそぎ破壊しつくすことになるのではないか。端的な例をあげてみよう。「とにかく生きる」ためにB1152に爆弾を積み込む人

たちは、たえず、生命の危険にさらされているのだが、今もし、ほんとうにその爆弾が爆発したとしたら、そこに残されるのは、「とにかく生きる」ことどころか、「とにかく死んだ」という事実でしかない。そして、爆発に至るまでも、彼は神経をすりへらし、肉体を酷使し、「とにかく生きる」ためにまさに逆に生きることをそれ自体を犠牲にしている——私には、この図柄がそのまま佐藤栄作氏、私たちに押しつけている日本の現状、未来の図柄であるように見えてならない。佐藤栄作氏が「国をまもる」というとき、それはまさしくそうした非人間的な図柄をまもることではない。

私はふつうの人間だから、壮大な未来図を描いてそこに酔いしれることはできない。すでに述べたように、夢をもちながら、同時に現実的な計算も忘れないでいるつもりでいる。「人間として生きる」ことを考えながら、「とにかく生きる」という立場も、私は自分のからだのなか

に感じとっている。そうしたふつうの人間である私の眼から見れば、佐藤栄作氏の考え方はあまりにも現実離れのしたもので、「人間として生きる」ことでも「とにかく生きる」ことでもなくて、ただ、それは、「キチガイとして、悪魔として、とにかく生きる」ことであるようにも見える。たとえば、安保条約と沖縄の問題によって、どれほど、日本の外交が自由に動き得る状態を失っているかが、どうして彼の眼には見えないのだろう。自由に自分の意志で動き得る状態を失ない、アメリカの「産軍協同体」がめざすキチガイと悪魔の道をとることしか外交ばかりでなく日本の政治全体が許されないとしたら、それがどんなに不幸なことであるかは、ふつうの人間である私にはよく判る。そして、それは、ピラミッドの頂に立つと自分で考えている佐藤栄作氏にはさっぱり判らないことなにかがいない。日本を「とにかくまもる」ということが、日本を「とにかく滅ぼす」

ということにならないと誰が保証し得えよう。

4

「人間として生きる」とことと「とにかく生きる」ことの二つは、ときにはたがいに鋭く対立しながら、同時に深く結びついたものであるにちがいない。その二つは、複雑にからみあいながら、私のからのなかにある。いや、それは、人間すべての問題なのだろう。すくなくとも、私やベイリーのような、そして、世界中の大多数の人間のようなふつうの人間すべての問題なのではない。

ベイリーは脱走という行為によって、「人間として生きる」ことに踏み切ったと言えるだろう。彼は十分にそれを意識し、それゆえにこそ、「丘を越える」という決意にみちたことを使ったのにちがいない。

けれども、同時に彼は、「人間として生きる」ことに踏みきったあとでも、彼が生きなければならないこと、「とにかく生きる」なければならないことを本能的にせよ知っていたように思う。彼はそれを知っていて、そして、淡々と書きつける。「鶏を二羽食べる」、「下着をかえる」。

彼の脱走が世に伝えられたとき、彼は国家の原理に反逆した人間だというのが、なるほどアメリカという一つの国の国家の原理には反逆して脱走したかも知れない。

い、しかし、それは、スエーデンという他の国家の世話になっただけではないか、とすかさず、書いた人がいた。みごとに論理的なきめつけであったと私は思う。しかし、そのきめつけは人間のおいさを欠いていた。みごとに欠いていたように思う。

たぶん、その人の論理にしたがえば、ベイリーは脱走して即刻自殺すべきだったのだろう。この世の中に生きているかぎり、「とにかく」どこかの国の助けを借りて彼は生きなければならなかったのだから。英雄なら、彼は自殺して、論理を完結させ、その人を満足させたかも知れない。しかし、彼はふつうの人間で、したがって、「とにかく生きる」ことをからだのなかに「人間として生きる」とこととにもっていった。

ヌエの状態だ、と人は言うかも知れない。インチキがそこにはある、と純粹で潔癖な、ただそれだけが人間の生のすべてであるべきだと考えている人たちは言うかも知れない。私は、そうしたきめつけに対して、強い決意をこめて、そうだ、まさにそうなのだ、と答えたいと思う。そして、もう一つつけ加えて言うなら、ほんの瞬間的のことならいざ知らず、たとえば一つの運動が展開して行くほどの時間の持続的なひろがりのなかにあってなら、人間とはまさにそうしたヌエの状態の存在であり、インチキ、(あえて、このことをここで使う)を多分

にふくむ存在であると私は確認しておきたいと思う。どのような行動、運動も、こうした人間を素材としてがたちづくれるものである以上、私には、この確認がもっとも重要な確認であることのように見える。人間の行動、運動である以上、私たちはそこから出発して行くほかはない。いや、私はもっと積極的、肯定的にことがらをとらえたい。そして、そうとらえることが今とりわけ必要だと思う。一口に言うなら、それは、人間が「人間として生きる」とことと「とにかく生きる」ことの両者を体内にもつヌエの状態であることを認め、それに徹底することから運動をくみだてて行きたいと思う。「ベ平連」の運動は、かつて、たしかにそこから出発したものであった。

5

戦後このかた、平和運動の主流をなしてきたものは、「とにかく生きる」という態度だったのではないか。とにかく平和に生きさえすればよい、他の国のことはともかく自分の国が戦争にまき込まれては困る、とにかくあの昔の悲惨はいやだ——極端を承知で言えば、そうしたものではなかっただろうか。それは政治の領域で言えば、「とにかく」票を集めればよい、「とにかく」代議士の数をふやしたい、ということにも、「とにかく」デモ行進の参加者の数をふやそう、「日当動員」してでもふやそうという態度に

も通じていたにちがいない。この三、四年來、それに対立し、衝撃をあたえるかたちで人々のあいだに生まれて来たのは、「人間として生きる」という態度であったように思う。その態度は、さまざまなかたちをとりながら、学生たち、労働者たち、「ベ平連」のデモ行進にやってくる種々多様な、一般に「市民」と呼ばれる人たちの行動に共通の基盤としてありつづけて来たのだろう。そこから、たとえば、「とにかく(平和に)生きる」ということをよりどころとした「戦後民主主義」、「平和と民主主義」を否定しようとする動きが出て来たとしてもむしろ当然のことだったかも知れない。一個人のレベルで言えば、それは「とにかく生きる」ことに基礎をおいた日常性を否定し去る、あるいは、そこからみとられた自己を否定し去ることなのだろう。

私はその努力はきわめて重要であったと思う。それはまず既成の概念、運動、秩序に大きなゆり動かしをあたえたことで、新しい可能性を生み出して来たにちがいない。そうした反乱は不可避であり、また、必要なことでもあった。いや、それはまだまだ今日から未来にかけて不可避であり、必要なことでもあるのだろう。

ただ、そこにいくつかの重要な認識が欠けていたように思う。それを欠いていたがゆえに、運動、あるいは反乱がともすればひとりよがりの狭い集団のものと

る。それは、たしかに、「戦後民主主義」、「平和と民主主義」路線の基盤であった。しかし、同時に、私たちがどのようにに新しい民主主義の構想をもち、どのようににみごとな「反戦と変革」の展望をもとうとも、その認識を欠いた構想、展望は容易にもっとも非人間的なもの、本来それらがめざすべきものとまったく正反対なものに墮するおそれをもつと、私は強く主張したい。

現在の状況を見ていて私が危ぐするのは、「既成左翼」が「とにかく」票を集めればよい、「とにかく」デモ行進の参加者の数が多ければよい、の考えに傾き、人々が「とにかく」（自分だけでも平和に）生ければよい、の態度をとる一方で、「人間として生きる」ことから出発したはずの新しい人々の動きが、「とにかく」過激であればよい、あるいは、「とにかく」純粹でありさえすればよい、という方向にともすれば傾こうとしていることだろう。前者は人間蔑視のスターリニズムの方向に通じ、後者はひとりよがりの宗教的行者への道だが（ときとして、それは、三島由紀夫氏とその「純粹性」において一致するという奇怪な結果にもなる）、今、必要なことは、そうしたともすれば分極化しようとする状況のなかから、渦巻状のヌエの状況をつくり出すことだと私は思う。権力は分極化をよろこび、それを助長しようとするが、さまざまな努力を重ねているのだが、私た

ちは、それを、手をこまねいて、黙って見ていていいのか。

その渦巻が、「安保フンサイへ・人間の渦巻を」のだが、これは、「安保フンサイ」という目的に対しては求心的な渦巻だが、運動の形状としては、外へ大きくひろがって行く遠心的な渦巻なのだ。自分だけのひとりよがりの集団に求心して行く渦巻ではなく、外へひろがり、ふつうの人間をそこにとり込んで行く渦巻――率直に言って、現在の運動にはさまざまな分裂がある。七〇年にむかかつて、おそらく私たちは、一つのみごとと統一体をつくって七〇年にはいり込んで行くわけには行かないだろう。同じスタート・ラインに立って、いっしょに走りだすというのではない。私は、この情勢をなげき悲しみはしない。それを逆に、積極的にとらえて行きたいと思う。どうしてか。それだけ数多く、多種多様な渦巻がつくり出されるからだ。統一体はみごとだ。しかし、ときとして、あまりにみごとにすぎて動きがとれない。さまざまな渦巻のかたち、動きがあつていい。渦巻どうしがたがいに非難をおつけあい、ときには一つが他を押しつぶそうとするようなことはもうよしにしてしまう。いまはもうそうしたときではない。どのように小さな渦巻も、あるいは、どのように一見おだやかな動きしか示さなない渦巻も、大きな渦・激しい渦と等しい価値と力をもつ。

これは、自分たちだけが、価値と力のある行動をしている、他の人々はすべてナンセンスだときめつける一部の若者たちにむけたことばだ。同時に、私は同じことばを、若者たちを一方的に非難する人たちにも言いたいと思う。実際、過激な若者たちの行動にはついていけない、あれはまずいと考えている人たちは、世に多くいるだろう。しかし、そう考える人たちと、安保をつぶすこと、沖繩を私たちの手にとり戻すことを、自分の問題としてとらえるなら、今すぐにでも、自分がよしとする行動を始める必要がある。若者たちの行動を一方的に非難することも、「心情三派」的に無責任に礼賛することも、あるいは、「きもちはわかるが……」ともの判りよく受けとるのもうよしにしよう。それよりは、自分の渦巻をつくる。その中で、たとえば「戦後民主主義」という名で呼ばれるもののがたしかに持っていた「人間として生きる」ことを、「とにかく生きる」日常生活の中で、どのように実現するかを自らの実例で示そう。若者たちもそこから大きなものを受けとる必要がある。

「ゲリラは魚、市民は海」ということばがある。現実はずでにそれを越えている。いまは、海そのものが動くことが必要なのだろう。「ゲリラ」ということばをつかうなら、海そのものがゲリラになる——安保と沖繩の問題は、それほど広く、また深いのである。

私はやるから

君もやれ



全員逮捕デモを!

10月21日政府・自民党及びマスコミの息の合った徹底的PR作戦によって私たち新左翼は暴力集団(あの夜、ベ平連のデモには数千人の女性・中年及び高年令者が含まれていた!)として規定され、止揚されたゲバルトによって首都制圧をめざした急進派左翼も、僅かに新宿の一角を数刻占拠したのみで史上最強の機動隊集団により蹴ちらされてしまった。

翌日の各紙は、10・21を乗り切った政府・自民党は11月の佐藤訪米に自信を持ったと伝えている。挫けてはならない!現在の状況下での武力闘争を否定する私たち(労働者・市民・学生を問わずベ平連の内外で行動する反戦グループと表現できる)の次にとるべき行動は何か?

非暴力直接行動の範囲で試みるべき戦術として私は全員逮捕デモ(又は坐りこみ)を提案したい。具体的には、ある特定の

日を決め清水谷公園に集合し、そこから国会までデモ行進し、更に可能ならば首相官邸前に坐りこみを行なうのである。

私たちのデモコースは都公安委員会からまちがいなく不許可となるだろうから、それを無視して清水谷公園から国会にデモをする間に機動隊の規制を受けるだろう。しかし最後の一人が逮捕され終わるまで、私たちはいわゆる「暴力」を用いず整然とデモ行進を続けるのである。

その結果、国家権力こそ偽装された暴力装置であるという私たちからの告発をマスコミなどによって(しかもマスコミ上層部の意に反して)正しく世論に訴える可能性が期待できるし、更に都公安条例という悪法の粉碎、無視及び全員逮捕という非日常的行動によって私たち新左翼個人個人の反戦の決意を一般市民に示すことができる。

私は一人でもデモを行なう予定だが、この行動は人数が多ければ多いほどその効果は二次曲線的に増大すると思われるので同志を求めたい。

線的に増大すると思われるので同志を求めたい。

百人で行動すれば全員逮捕するのになんととも百人の機動隊員は必要となるし、もしも10・21の夜の如く一万数千人が集まり、最後の一人が逮捕されるまでデモを行なうならば、無抵抗で逮捕されるだけで全員が捕われる前に全機動隊の動きをまひさせることができ、非暴力的に国会首都を反戦を求める市民の手によって奪還できることになる。

仮に第一波行動が小人数で期待されるほどの効果があらなかったならば、翌日から波状攻撃(即ちベ平連を主力とする新左翼の総力を集中し、残った有志が何人かずつでも連日清水谷公園を出発する)を行なうのである。

無抵抗で逮捕され、しかも秘密権を使わないのだから、三日間の休暇(即ち留置期間)をとれば誰でも参加できる行動である。現在の私たちに残された有効な反安保行動として前記のデモを提案する。

(東京都・医師・吉崎秀一) 二伸 この私の非暴力行動に賛同してくださる方は、どうかアンボ社へ(東京都新宿区神楽坂六一四四) 気付、吉崎秀一までご連絡ください。

編集の手伝いを

私は雑誌の編集をやっている者で、定例集会には出ておりますが、あまり出来ることはありません。但し、雑誌の割り付け・校正・グラビアのレイアウト・カラーの校正ぐらいなら少し出れます。もし、お手伝い出来ることがありましたら申しつけ下さい。

(東京都・会社員・渡辺照敬)

エーちゃんの

バラード(二)

1 ニクソンの国へ

栄ちゃんが رفتら
栄ちゃんはきつと
承知するだろう
沖繩の核付き自由使用を
憲法違反もやってくる
人のことだもの

2 栄ちゃんとニクソンが

密談したら
ニクソンはきつと
こういだろう
核は隠せばわかりまへん
あんさんとわいとの
ヒミツにしとこと

3

あんさんが平和を
愛する人なら
こんなことを
ゆるしていいのかわ
アメ帝のしりうまに
のっていはる

はじしらずの

イエローヤンキーを

(京都市・日和今人)

くちコミで仲間を

小生の会社は、革新運動或いは反戦運動に対するしめつけが厳しく、安保のことさえ、ほとんど話題にならない現状です。寮も然り。従って地道に口コミ・ミニコミによって徐々に仲間を集めたいと思います。それにはまず、会社の目、寮の目をこまかくすることから始めるのが良策——全くギャン的な情けないことですが——と考えます。それで小生としては、しばらくは本来の持ち場以外で主として活動せざるをえないと考えています。

(京都市・会社員・野田公彦)

なにかしなければ……

わかりません。我が家は、父、兄、二人が自衛隊関係です。僕自身も自衛隊を必ずしも否定しているわけではありません。むしろ、反安保の立場で自衛隊を肯定しているのかもしれない。いずれにしても、安保反対だけは叫ぶつもりです。しかし父兄に迷惑がかかるかもしれないという迷惑があるのです。何かしなければいけないことは、わかるのですが。

(福岡市・浪人・島内道彦)

アンボを職場に

職場で、職場新聞(日刊紙)

を、編集していますが、既成のやり方に不満を持っています。

この「週刊アンボ」で何かを学び、仲間伝え、闘いを果すものにした。小生、6・15にも大会には参加したので、デモには入りにくく(一人で行ったため)参加しなかったことが残念です。

(兵庫県西宮市・会社員・島田利雄)

反安保の流れを!

現在、具体的に何ができるか判りません。しかし矛盾を追求する為に流れに身を投じ、その流れを作っていきたい。さしあたってまわりの人間に呼びかけ、週刊アンボのもとに結集する人間を一人でも多くなるよう努力します。

(東京都大田区・学生・石田正明)

まず仲間から

何か、やらなくてはと焦りながらも、現教組、とくに私の学校では、ベ平連に理解は乏しいようです。一人から始めなくてはと思いつながらやはり、仲間がいなかったために何事にも消極的になりがちです。そんなわけで、

教職というわくを考慮していたければ、何でもやります。

(大阪市・教師・安岡博志)

週刊アンボにひとこと

週刊アンボは、安保反対の人のみを対象にしているように感じられますが、まず第一に無関心な人をその渦に引き入れることが必要ではないでしょうか。それ故、最初はベトナム反戦だけをかかげていたベ平連が、反安保そして反体制反権力運動にまで進まねばならなかった理由を、わかりきった事でも、やさしく説明したものを開巻第一ページにもってくるのがよいと思います。そして次に予想される様々な質問(例えば、安保がなくなれば日本は大丈夫か、何故ラジカルなデモも必要になるか、等)に対する回答であってもよいからとにかく反安保が必要なのだと思わせることができる。そしてこれは紙面が許せば、毎号載せるべきでしょう。そのあとで行動への呼びかけ、小田さんのアピール等を続けたらよいと考えます。

(大阪府・浪人・松浦博志)

スケジュールをせひ!

私にできることは、私の大学内において一般学生に、この「週

刊アンボ」を読むことをすすめる、組織作り、そして運動にもっていくことです。また休み等に日本のあらゆる地域へ出かけていき、反戦ソングを中心に旅行をしてみたい!

記事への要望は、政党(労働組合)やその他の文化団体そして全学連諸派の安保に対しての基本方針、戦術等を載せて頂きたい。

(名古屋市・学生・山田久保)

自衛隊ベ平連・ゴー!

きびしい状況の中で闘っている市民の皆さんへ。体制側ベ平連発足のお知らせをします。(部隊、名前等の公表は絶対に避けて、この手紙も用済み次第処分を。当局の介入は必至と思われまうので)

入隊以来一年半、上司は講演で、また訓練で、敵をわれわれの頭の中にたたきこもうとしてきました。しかし、もとより「国防の志士たらん」などと気張って入隊したわけではないわれわれに、そんなことがすぐに浸透するわけはありません。(右も左もキライな良い子だった)。われわれもそのうちに状況にメザメ始めて、ベトナム・沖縄・安保等の本質を知るようになり、その時から「敵」に属してしまったのです。現在、敵

総数十一名。「敵」に関する本も満足に読むことができません。なにしろ多くのスナオーな良い子との同居。全員が集まるということとはまずムリ、一カ月も会えないこともあります。だからデートを断わってでも、会うのが楽しみ(?)。

こんなところに世話になっていくことは屈辱としか、言いようがありません。イロイロと家庭のジジョウがありまして。あさはかだったとは思いますが、入隊勧誘に來たオッサンが「技術が習得できて、カネがタマル」といったから入隊したんだ。もちろん一生勤めようとは思っていなかったが。ところが「思想まで与えてやる」ってんだ。よいいなことをするな!! 自分の頭の中は、自分でかきまわすヨ。

機関誌も旗もなく、徹夜の論争もしない——他のベ平連の垂流など、ひとつとしてないきわめて、主体的な運動の進めかただ。クチコミを唯一の武器にして、今日もノンポリを追いまわしている。恵庭事件の頃のオルグの例もあることだし、セイゼイガンバロー!

休みの日は高校時代の友人に会ったりしていろいろな資料を見ています。脱走兵通信に脱走兵ホイットモアの言葉があっ

た——戦争にいくには勇気がいるが「ノー」と言うにはもっと勇気がある、男にしかない勇気が。たとえ訓練で銃を持たされても、オレの心は峻拒している。(N)

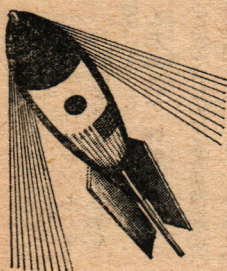
非妥協的な闘いへ

ブルジョア権力の弾圧には非妥協的に闘って下さい。

安保粉砕の意志を細胞分裂させることならいくらでもやろうと思っっています。具体的には「週刊アンボ」の一般化を通じて「安保」の緻密な実態分析などしてほしい。投稿を多くのせて、各地の闘いに相互規定性をもたせるよう努力してほしい。

(東京都・学生・鎌田晴之)

このページは、アイデアの倉庫です。あらたな行動のアイデアを保存し、いろいろな人びとに、行動の提案をする——そのために使ってください。なるべく短かくお願いします。



WE GOT THE

反戦パンフ

にひろがる反戦・反軍行動

……“We got the brass”を読んだか？ アジア版が出たんだぜ。……横田で、座間で、府中で、はたまた東富士や岩国、さらには沖縄で。およそ米軍基地のあるところ、米軍兵士の間でこういう会話がかわされている。

“We got the brass”を回収せよ！ 配布者を探し出せ！ MPは駆けまわり、CIAはうろつきまわる。

“We got the brass”とは何か、全世界の米軍の間でひそかに配布される反戦米兵の国際組織「セカンド・フロント・インターナショナル」（国際第二戦線）の機関誌。そのアジア版が日本を根拠地として創刊され、いまや各地で続出する軍隊内の兵士の反乱の組織者としての役割りを、いよいよ日本で開始したのだ。在日米軍は今やその内部から崩壊のきざしがみえてきた！



一冊のパンフレットがいま……

覚え書

十月十四日付

公安・計画・作戦部長より、各内務将校へ

一、以下の情報は「大泉市民の集い」によるキャンプ・ドレイクに向けての宣伝放送によってわれわれが入手したものである。その放送は、アメリカ人と思われる二人の人物がいかにして非戦闘員の資格をうるかについて米軍兵士に説明したテープをかけていた。また、番組の中でアメリカ国内での「モラトリウム・デー」の目的について述べられ、日本に駐留する米軍兵士もその抗議行動に参加するように主張されていた。

二、十月十二日、「大泉市民の集い」はキャンプ・ドレイクにおいて「ウィ・ゴット・ザ・ブラス」を配布した。この左翼的、反米軍的パンフレットは十月十日に初めて現われており、そのパンフレットを準備した人物は、番組のテープをふきこんだ人物と同じである可能性がある。

以上の書類は、アンボ社が某所でひそかに手に入れたものである。

米軍がそんなに神経をとがらせている「ウィ・ゴット・ザ・ブラス」とはどんなものなのか。

「ウィ・ゴット・ザ・ブラス」“We

got the brass”——在日米兵の間でひそかに読まれはじめた、この英文の反戦地下新聞は、日本における米脱走兵援助の地下組織「ジャテック」の日本人グループと、在日の米人や米軍人有志の協力で九月下旬創刊された。十月初旬から各地の反戦グループの手で全国の米軍基地周辺に配られ、すでに五、六千部がなんらかの形で米兵士の手に渡っているはずである。また沖縄にも数千部が発送済みである。

正体見たり

十四ページ建てのこの小冊子は、正確にいうと「ウィ・ゴット・ザ・ブラス、アジア版第一号」で、オリジナル版はヨーロッパに駐留する米兵あてにフランス国内で発行されている。「ウィ・ゴット・ザ・ブラス」の「ザ・ブラス」は軍隊の士官を指し、全体の意味は「上官の正体見たり」とでもなるうか。また「俺たちには胆っ玉があるぞ」の意にも通ずる。オリジナル版、アジア版とも「国際第二戦線機関紙」と称している。裏表紙の「連絡先」にはベ平連の名があるが、別にベ平連が発行者というわけではない。アジア版創刊のいきさつを、ジャテックのある活動家はこう説明する。

在日米軍を震撼させる

反戦放送・地下英字誌・脱走・反乱……日本全土の基地

MEMORANDUM
FROM: Director of Security, Plans, and
TO : SAC, Dep CG for Sves
SUBJECT: GIZUMI Citizen Council For
in Vietnam

1. Monitoring of the 1600-hr, 16 Oct
"broadcast" at Camp Drake revealed
program content was similar to prev.

a. A tape which was allegedly
member of the Black Panthers, was p
the US of imperialism and racism.

b. A tape, made by a member of
believed to be the American Deserte
Stockholm, Sweden, instructed soldi

10月14日付米軍内務務校宛の覚え書

「アジア版作製の過程で在日米軍の中に早くも協力者がでてきたことの意義は大きい。つまり日本でも『フリタ』だけでなく軍隊内の抵抗組織『リタ』が生まれたとみていいんじゃないか。またすでに米本土やベトナム戦線、そして沖縄で発生している米軍内

「これを出している『国際第二戦線』っていうのは現在スウェーデン、フランスなど、ヨーロッパ各地にいる脱走米兵のグループがつくっている政治組織です。つまりすでに脱走した連中が軍隊にいるもとの仲間たちに脱走と軍隊内での反乱をよびかけるために出しているんですよ。そしてこれに応じて欧州にいる米軍の中にはすでに軍隊内での抵抗組織『レジスタンス・インサイド・ザ・アーミー』略して『リタ』(RITA)が組織され、活動している。さらに『リタ』を援助するヨーロッパ人の組織として『フリタ』(FRITA)というものできていて、三者相互に連絡をとりあっている。在欧米軍内での反軍活動を進めているわけ。われわれがあちらの『ウィ・ゴット・ザ・プラス』を手に入れた時、日本でもぜひやらねばならぬと思った。しかし

日本では脱走米兵の亡命を許されていないから『第二戦線』はないでしょう。それで、これまででもっぱら脱走兵援助に従事してきた『ジャチック』としては、脱走兵も大事だが在日米軍の中に反戦・反軍の大衆的運動をつくることもいまの時

デモ隊はGIのともだちだ

点ではひじょうに重要ではないかということになり、われわれが結局、ヨーロッパの『フリタ』の役目をひきうけて、『第二戦線』機関紙のアジア版をつくることになったわけです」

での兵士の反乱が、本土の米軍の中で起こる日も近いと思いますよ」とジャチックの活動家は自信ありげである。

ここで、われわれが知りたいと思うのは「ウィ・ゴット・ザ・プラス」の在日米軍内での反響と兵士たちの反応である。ジャチックの活動家がいうように、在日米軍の中でも兵士たちの「反乱」が起りつつあるのか。

応答あらわる

十五日のモラトリウム・デー。「大衆市民の集い」による朝霞反戦放送の番組が終わって、引きあげる途中、放送グループは、彼らを待ちかまえていた二人の黒人兵に会った。ジャンパーにズボンという平服の二人は、ベトナム戦に従軍した工兵で、ほとんど回復した傷病兵だという。

「放送」は真実を語っている。「ウィ・ゴット・ザ・プラス」はたいへんいい。今後おれたちはこの新聞を購読したい。できれば、おれたちの考えをこの新

聞てのせてほしい」と彼らはいった。

「放送局」にとっては願ってもないことであった。地味な反戦活動の最初の大きな成果だ。

「ところでベトナム前線での米兵の抵抗はどうだい？」グループの清水知久日本女子大助教がきく。

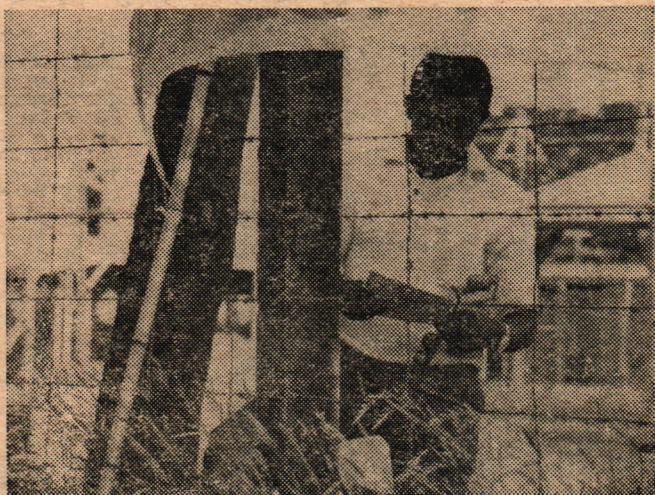
「抵抗は強い。だが組織的運動は困難だ。はでにやるとロンビン刑務所におちこまれてリンチを受けるんだ。しかし黒人兵はみな、沖縄のコザの「反乱」のことも、米本土のフォート・ディクスの運動のことも知っている」

別れぎわに清水助教が、十月十九日の朝霞基地撤去市民集会の計画を話す
と、二人は日本の市民への連帯のメッセージを書くことを約束した。

殺すのが平和のため

東京の南西方の基地で、X Xベ平連が「ウィ・ゴット・ザ・ブラス」を配った時のことだ。朝霞よりもっと積極的な反応があった。三人の兵士が「助けてもらいたいことがある」と寄ってきた。びっくりしたグループは別の場所で会うことを約束した。接触した三人はまだ軍籍にあるので名前や年齢は公表できないが、とにかくひじょうに若い兵士たちだけいっておこう。

彼らを迎えたグループは、いささか緊張した。「あとをつけれはしなかったか？」しかし、三人の米兵は、平然とし



朝霞キャンプで「ウィ・ゴット・ザ・ブラス」を読む米軍兵士

FOR PEACE」(平和のために殺す)にするつもりだという。彼らの上官は、いつもこう演説する。

「ベトナムの平和のために殺せ!」「だから、ほくらはその新聞を出す」。三人は、やや激しい調子でそういう切った。

X Xベ平連は他のグループと協力して、あらゆる援助を惜しまないことを約束した。「キル・フォー・ピース」は十一月のモラトリウム・デーまでに出そうと話がまとまっている。米軍兵士への働きかけは、これからひとつの新しい段階へ入ることになる。

在日米軍の中に胎動しはじめた反戦の新しい波はこれだけではない。それは極東米空軍司令部のある府中基地にも波及している。いや、時期からいうと、むしろ動きは最も早かった。実はアジア版「ウィ・ゴット・ザ・ブラス」を作るに

憲兵にさかネジをくわす

「キャンプ・ザマ」に勤務し、最近除隊したA君(23)はいった。「ウィ・ゴット・ザ・ブラス」ができたというので約四百部キャンプへ持ち帰ってまいた。上

あたったの米軍内の協力者たちは、在日米空軍の中枢にあたるこの府中基地勤務の兵士だったのである。ジャテックの某氏がいったことはほんとうだったのだ。軍隊内の反戦組織「リタ」は在日米軍の中にもすでに生まれつつあるのだ。

「府中基地」での活動家の一人、B君(24)に会う。C州出身の将校で事務部門で働いている。大学の学部を終ったところで徴兵されてすでに二年たち、近く満期除隊の予定だ。B君は軍人の中でも「良心的戦闘拒否者」の地位をもっている非戦闘員である。この地位を獲得することはひじょうにむずかしいが、徴兵される前から平和主義者だったB君は宗教上の理由をたてにがんばり、なんとか非戦闘員の資格をとって事務員として働いているのだ。

「ある反戦派の在日米人を通じて「ウィ・ゴット・ザ・ブラス」のアジア版を出す計画を知ったんだ。平和主義者として前から軍隊内で反戦運動ができればいい、と思っていたのでさっそく協力した」とB君はいう。アジア版第一号には彼の描いた反戦マンガも載っている。

官からの強い圧迫も予想されたので、はじめは兵士クラブや図書館にある本や雑誌の間にはさんで歩いたんだ。ところが案の定、憲兵にみつかった。その

時、運悪く友人と歩いてたんだ。二人ともつかまって、かなりしつこい尋問を受けたんだ。身柄を拘束されなかったから逮捕とはいえないが、つぎの日に二人はまたよび出されて調べられたんだ」

A君の友だちのほうは、軍の法務部に勤務している関係で法律はくわしく「なぜこの文書を持っているのが違法なのか」と取り調べに官にさかネジをくわせ、

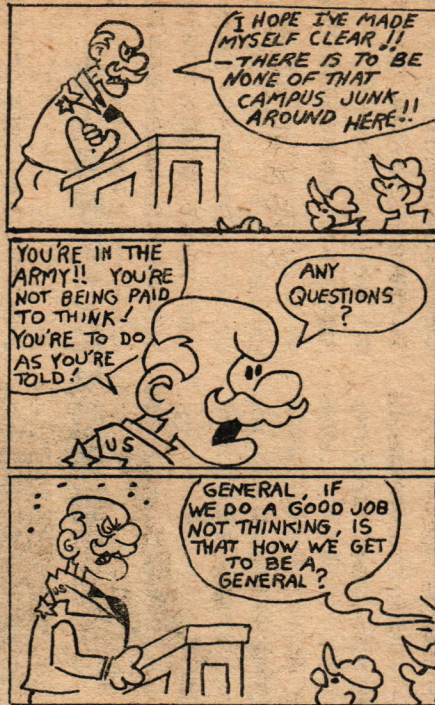
軍の法務官も「ウィ・ゴット・ザ・ブラス」自体は違法ではない、と説明しなればならなかった、とA君はいう。

「そんなわけで、新聞をばくが直接手渡すことができたのはわずか数人にすぎない。だからキャンプ内での反響をいちがいにはいえないが、あとでMPが『ウィ・ゴット・ザ・ブラス』を回収しにきたとき、二人の兵士が、これは自分のものだと断固として渡さなかったのをみ

た。つまり、キャンプの中に反戦感情は潜在的な力としてはっきりあるのだから安心だが、その法務部の友人はにらまれてしまっ、ひじょうに困難になる。彼は私と違って非戦闘員でない正規兵だから、懲罰的にベトナムへやられることだってありうるからね。徴兵拒否や脱走より、軍の中に反戦組織をつくるほうがより効果的だとは思いますが、軍内部での運動はともかくきびしいよ」

「沖繩は狭くてとても逃げきれないから、なんとか日本本土に脱走したいと思っていたんですね、この男は。そしたらこの兵士と接触したジャチックのある活動家はいう。

「沖繩は狭くてとても逃げきれないから、なんとか日本本土に脱走したいと思っていたんですね、この男は。そしたらこの兵士と接触したジャチックのある活動家はいう。



- 1 ワタシノイッタコトハ ワカッタジャロ
——大学ノダラシナサハ軍隊デハ フリ落
トスندا!!
- 2 オ前タチハ軍隊ニイルンダゾ!
モノヲ考エルタメニ給料ヲモラッテイルン
ジャナイ、イワレタ通りニスルタメニ給
料ヲモラッテイルノダ、質問ハ?
- 3 將軍 何モ考エズニ立派ナ仕事ヲスレバ
イインデスネ ソレガ將軍ニナルタメノ方
法ナデスネ (“We Got the brASS” か
ら)

除隊したら大
学へ戻り、同時
に反戦運動も統
きびしいよ」

「沖繩は狭くてとても逃げきれないから、なんとか日本本土に脱走したいと思っていたんですね、この男は。そしたらこの兵士と接触したジャチックのある活動家はいう。

新たな起爆剤としての衝撃の写真集

叛逆の記録

安保・沖繩・大学

三留理男報告

これは当今流行の傍聴者写真集ではない。執拗すぎ、はらわたがよじれ嘔吐してくる。まさに参加し闘うカメラマンが血と怒りに燃えたとて記録しつづけた十年間十五万枚のネガを精選。詳細全学連闘争年表30頁付 A5判総グラビア200頁 編集装幀

粟津潔 11月17日発売 ¥750

藤島宇内著 11月20日刊 ¥580

日米安保体制

危機の構造

70年闘争のラジカルな変革の書

脱走兵の思想

国家と軍隊への反逆

小田実・鶴見俊輔編著

国家と軍隊に反逆し、権力から脱出して反戦思想を肉体化する脱走兵運動は、国家を超えて拡がり、深くすすまれている。JATCの反戦米軍脱走兵支援日本委員会IIの全容を明らかにし、反戦の意味を問いなおす 好評発売中 ¥580

日本反戦詩集

自筆・手刷り詩集を含む無慮一万点から精選 発売中 ¥580

岡本潤・関根弘編

日本民衆詩集

自由民権歌・演歌・反戦フォーク一万点を発掘 350編を精選

木島始ほか編

世界反戦詩集

初の集大成 近刊 ¥580

東京・西神田・石合ビル 振替95663 太平出版社

安保ファンサイへ・人間の渦巻を、

ちょうど海兵隊の部隊が本土に行くという話をきいて出発まぎわにこの連中の中にまぎれこんで乗船してしまっただそ
うですよ。脱走兵だから上官やMPにみつ
つかればすぐつかまるが、同僚は知って
知らん顔をしていたらしいんですね。点
呼の時は身をかくし、食事の時には余っ
た制服を着て堂々と食堂に入りにしてい
たというんです。そんな調子で本土に
着き、東富士のキャンプまでいっしょに
行き、そこでまたしばらく暮らしたうえ、

軍内外呼応した反戦運動

アメリカ軍の内部における兵士たちの
反戦行動や、反乱は、ここ一、二年、
急速に広がってきた。原因はもちろんベ
トナム戦争である。ベトナム戦争は非道
徳的な戦争であるとする考えが、アメリ
カ市民の間ばかりでなく兵士たちの間に
も強くなってきたからだ。その点、だれ
かれの差別なく兵士にしたてる徴兵とい
う制度は、軍隊内にも国論の分裂を容易
にもちこんでしまう。ベトナム戦争に反
対する青年たちも、その一部には徴兵を
拒否して国外に逃亡したり刑務所に入る
ものも出るが、大部分は徴兵されて米軍
の一部を構成することになる。

ことに最近では反戦運動に従事してい
た学生はむしろ進んで徴兵を受け、軍隊
内で「運動」をつくることをねらいだし
た。外部の反戦団体の、米兵士に対する

そこからまたぬけ出したというんです。
彼はいま追われる立場だからその後の行
動については秘密ですが、ともかく脱走
兵が部隊の中をうろうろし、食堂でめし
まで食ってもだれもとがめないほど米軍
内の規律がゆるんできていることは確か
なようです。こんな空気が米軍内にあ
る限り、われわれの反戦・反軍の働きか
けは効果をもつだろうし、このままだけ
ばアメリカの軍隊は内部から崩壊してい
くんではないかという気がしますね」

働きかけもひじょうに活発になった。米
本土にある基地の周辺では、現在、十種類
あまりの反戦地下新聞が発行され、公然
とベトナム戦争や軍隊組織を批判し、さ
らに体制を攻撃している。そしてそれを
軍隊内における反戦派兵士が仲間に配り、
また軍隊内の「運動」に関する情報を集
めて地下新聞づくりに協力している。

いっぽう、そうした意識的な反戦派兵
士の働きかけに呼応して、一般兵士の中
で上官の命令を拒否したりベトナム戦争
を批判したりする「不同意」の動きが高
まってきた。ことにベトナム戦に投入さ
れ、その戦争の悲惨さと非道徳性を実際
に体験させられた兵士たちの間では、そ
の動きがいっそう顕著なようだ。

また米国内における黒人解放運動の発
展とブラック・パワー思想の浸透を反映

して、黒人兵士は軍隊内部における人種
差別主義に抗議し、白人上官に反抗を始
めている。そしてこれはとうぜん軍内部
での反戦運動と結びついていく。地下新
聞の一つ「シェイクダウソ」紙による
と、六七年から六八年までの一年間に五
万三三七人の米兵が脱走し、また一五
万五五三七人の兵士がAWOL（無断で
部隊を離れること）をしていたことを兵
役委員会が発表したと伝えている。一般
に報じられた数字では、昨年一年間の脱
走兵として米軍当局が公式に認めた者は
三万九二九三人。これだけでも二・五個
師団にあたる。

いっぽう脱走するのではなくて、軍隊
内で反戦運動を行なっている、活動家
兵士の数には正確にはつかめていない
が、米軍全兵士の約一％（三万人余）とみ
られている。そしてその周囲には、ベトナ
ム反戦と反軍感情をもつかなりの白人、
黒人兵士の層が存在しているわけだ。

戦闘中の兵士が喪章を

もちろん、軍隊内部での反戦・反軍運
動はひじょうに困難な条件にとりまかれ
ている。米本土の各基地では多くの反戦
派兵士が軍法会議にかけられている。こ
とに戦闘行動が行なわれているベトナム
前線の部隊での組織的な反戦・反軍活動
はほぼ不可能にも等しい。しかしながら
兵士たちは銃弾のとびかう前線において
も、陰に陽に反抗を続けている。

十月十五日の米本土でのモラトリアム
・デーの反戦行動に際して、ベトナム前
線の一部米軍部隊では兵士たちが黒い腕
章をつけて哨戒行動に出動した。兵士た
ちのベトナム戦への無言の抗議を象徴的
に示したこの写真は、各紙に紹介されて
米国内の反戦派を勇気づけ、米政府や軍
部にショックを与えた。

戦闘中の兵士自身が彼らの戦争に反対
していることをはっきり意志表示したと
いうことは、米軍にとっては大問題であ
る。従来からのベトナム駐留軍内での反
戦・厭戦ムードに加えて、米軍の一部撤
兵がはじまっている今日、前線の米軍の
士気はいっそうがた落ちだ。

「いま死んでは元も子もない……」。
ベトナムにおける米軍の敗北と撤兵がも
はや時間の問題になっている時、前線の
兵士がすっかりやる気をなくしているの
はむしろとうぜんといえるだろう。反乱と
正確によべるような大規模かつ暴動的な
兵士の行動はまだ起こっていないように
みえる。しかし軍隊内での反戦・反軍運
動の進展と、各地であいつく兵士たちの
反抗、抗命事件で、米軍はいまや史上最
大の危機に立たされているのである。

ここで世界中で起こっている米軍内
のさまざまな造反事件について詳しくみ
てみよう。

ベトナム戦争の長期化と米国内での反
戦運動の高まりを反映して、米軍の兵士
の間にしだいに厭戦気分が広がってい

たのは六七年ごろから。しかしそれははっきり軍隊内部における兵士の抵抗闘争として現われてきた最初の事件は、昨年八月テキサス州「フォート・フッド」で起こった黒人兵士たちの「ストライキ」であった。

八月二十三日、フォート・フッドに駐留する第一、第二装甲師団にシカゴへの

兄弟の鎮圧には出動しない

「われわれはシカゴであろうとどこであろうと、兄弟である黒人の抵抗運動の鎮圧にはいっさい参加するつもりはない」と声明を発した。反乱兵士の中核はベトナム帰りだった。その夜、反乱兵士たちは基地内で静かな抗議デモを行ないMPに暴力的に鎮圧された。

憲兵隊は四十三人を逮捕し、そのうち首謀者とみられる八人の兵士を、上官の命令に従わなかったことを理由に正式の軍法会議にかけ、残り二十四人を臨時軍法会議にかけた。軍はこの四十三人を六一八ずつの小グループに分割して巧みに反乱兵士の分断をはかったが、兵士たちの団結は固く、またこの事件が明るみにでて民間の弁護士や平和団体が「フォートフッドの43人」を救おうという運動を起こし、軍事裁判は軍の思わく通り進まなかった。結局、判決は一番重いもので六カ月の懲役、無罪となるものもかなりでた。

出動命令が下った。シカゴではちょうど民主党大統領候補指名大会が開かれており、それに向けて組織された反戦デモと予想される黒人の都市反乱を鎮圧するために警察、州兵では足りず、正規軍まで動員されたのだ。ところが部隊の黒人兵士二百人がとっせんこのシカゴ出動を拒否した。

「陸軍は動揺をはじめている。将校たちにとって、いまのGIはもう昔のGIとはちがって手ごわい相手なのだという

ことを認識させられたのだ」と、この事件を報じた米国内の反戦地下新聞「ベトナムGI」は主張している。この四十三人の中の一人で、無罪判決をうけたあと除隊した黒人兵、ガイ・スミス君（ベトナム戦にも従軍）は、SDSの機関紙「ニューレフト・ノート」のインタビューに答えて、次のようにいっている。

プレシディオの27人

「故郷の差別におさらばできると思っ

て入隊した。ところが軍隊ではもっとひどい差別があるじゃないか。そこでわれわれの態度は硬化し、この組織（軍隊）

と闘ってやろうという気になる。暴動にはそういう背景があるんだ」

「ベトナムについていえば彼らの団結は固い。闘いの大義名分をもっている。いっぽうGIの多くはやむをえずベトナムにきているんだ」

「われわれの反抗は基地の多くの兵士の目を開かせた。多くのものが以前より軍隊内の人種差別を意識するようになった。奴ら（軍当局者た

ち）は反抗して営倉に入ったものを骨ぬきにしようとするが、そのためかえってみんなは少しずつ強くなっていく。軍というのは今日ではより多くの革命家を製造しているんだよ。ある意味では私もそこで革命家に作られたんだ」

ついでよく知られる事件は、六八年十月にサンフランシスコの陸軍兵営「プレシディオ」で起こった兵士の反乱である。サンフランシスコはもとも反戦勢力の強い土地柄だ。プレシディオの兵士たちも反戦運動の影響から隔離されることはできない。六八年秋には、外出した私服の兵士たちが参加してGIの反戦デモが組織された。

これに比例して、兵士たちのAWOL（無許可外出）が急増した。大部分のものはMPに逮捕されたり遅れて戻ってきたりして処罪をうけたため、六八年十月第二週には百五十七人もの兵士が営倉にぶちこまれるという事態になった。

この営倉は古くて狭く、ぶちこまれた兵士たちの生活は悲惨だった。おまけに営倉の責任者にサディスティックな軍曹が就任して収容されている兵士に厳しく当たった。そんな中で射殺事件が発生した。かねてから精神に異常をきたしているといわれていた囚人兵リチャード・バンチが、仕事場へ向かう隊列から離れたところを警備兵に背後から射殺されたのである。囚人兵の怒りは爆発し、多くの囚人兵が仕事に就くのを拒否して基地内に坐り



10月15日ベトナム前線を喪章をつけ行進する米兵（WWP）

こみをはじめた。軍は二十七人の囚人兵を上官反抗の理由で逮捕したが、これも反戦地下新聞などを通じて外部に報告されたため、反戦派市民による「プレシディオの27人」を支援する運動が組織された。

ことし六月七日の軍事法廷で判決が下り、うち十四人は上官反抗罪を言い渡された。上官反抗罪は場合によっては死刑も適用されるのだが、刑期はそれぞれ三―十五カ月の懲役と不名誉除隊―意外に軽い判決だった。フォート・フード事件の場合もそうだが反乱兵士への判決が比較的軽かったのは、軍当局が世論の強い反軍感情に押されたことにもよるが、それ以上に軍内部の兵士たちの動揺を恐れたからという見方が支配的のようだ。また「フォート・ジャクソン」を中心に出されている反戦地下新聞「ショート・タイムズ」紙によると、ことしの一月二十一日に「ベトナム戦争に反対するG I同盟」の第一回会合が、将校たちの妨害をはねのけてキャンプ内で強行されたという。

このように「正当性に欠ける、不道德な」ベトナム戦争に対する不同意をきっかけに広がった米軍兵士の抵抗運動は、いまや兵士たちの軍隊内における言論の自由と人間性の回復を要求する反軍運動の強いうねりをもたらしたようだ。

ベトナム前線で起こった米軍兵士の反抗で有名なのは、「ニューズ・ウィーク」にも報じられたさる八月二十四日の「ソ

ンチャン溪谷」事件だ。北ベトナム軍拠点への出撃を命令された第百九十六軽歩

金網をはさんだ連帯

「兵士諸君！ 本日、アメリカ本土では百万人以上のアメリカ市民が、ベトナム反戦を叫んで行進を開始している。諸君らも団結して反戦のために立ち上がれ！ 沈黙を断ち切り、基地内での言論の自由を確保せよ！」

少しきこえない発音の英語が、埼玉県・朝霞の米軍基地「キャンプ・ドレイク」に鳴りひびく。十月十五日。アメリカで空前の盛り上がりをもてたベトナム・モラトリウム・デー（ベトナム反戦デー）に呼応して、日本の反戦市民グループ「大泉市民の集い」が行なった「基地よ出て行け放送局」、通称「朝霞反戦放送局」の反戦放送である。

放送―といっても、キャンプの外から金網越しに携帯マイクで呼びかけるのだ。教師、学生、牧師、青年労働者。集まった有志がかわるがわるマイクを持ってアナウンス役をつとめる。よびかけ、反戦運動関係のニュース、天気予報。そしてテープに用意した反戦フォーク・ソングや、来日したアメリカのブラック・パンサーやSDSの活動家にとくにふきこんでもらったという兵士への反戦と戦闘拒否をすすめるメッセージなどを、ひっきりなしに流していく。

兵旅団第三大隊アルファ中隊の兵士たちは、出動命令を拒否して動かなかった。

金網をはさんだ連帯

金網越しに、米兵がなんんか兵舎から顔を出すの見える。この基地は主として野戦病院に使われており、金網から五十メートルほど離れたところに並んでいるカマボコ型の兵舎は病棟。収容されているのはベトナム戦で負傷し、回復を待っている傷病兵ばかりだ。

兵士たちが各棟の入り口から二人、三人と外へ出てきた。ガウンを着て、ベッドから起き出してきたばかりの様子の人もあるし、元氣そうな私服姿で、退院を待ちまわっているのは看護兵らしい。彼らは、放送局が反戦フォークを流すあたりからのってきた。手拍子をとる米兵がいる。放送局の市民が指でV字のピース・サインをおくると、同じサインをかえす兵士もいる。

二、三人の兵士が病棟から金網のほうへ近づこうと歩き出した時、ブオーッと車のホーンがけたたましくならされた。いつの間にかMPのパトカーが一台、キャンプ内側に止まって、放送局と兵士たちの反応を監視していたのだ。MPが手で兵士たちにひっこむよう指示する。兵士たちは肩をすくめて後もどる。この三日間、放送局が十月の放

送を開始した十月十二日には、こんなに警戒が厳重ではなかった。多くの傷病兵がサクまで近づいてきて、金網越しにこの反戦市民グループと語り合い、市民たちは英文の反戦ビラを彼らに手渡している。そしてその時にはこんな会話があった。

帰ったら革命だ

ある黒人兵「ベトナム戦線に出て一ヵ月半したら負傷したんだ。運がよかったよ。あと八日で除隊になる」
清水助教「それで、帰ったらどうするつもり？」

黒人兵「革命を始めるさ。おれの出身地は南部だ。もちろん運動は停滞している。まずおれたちは黒人の誇りを高める文化的な革命からはじめたい。それから政治革命へだ。おれの考えでは、ブラック・パンサーのやり方は少しせっかちすぎるような気がするが。ところで日本の革命的運動の現状はどうだい」

清水助教「十月十日にベトナム戦争に反対し、日本とアメリカの安保体制に反対する人びとが十万人も東京都内をデモ行進したんだ……」

こんな会話からわかるように、この「放送局」の活動は、「基地よ出てゆけ」というその名称にもかかわらず、従来の米軍基地撤去闘争につきものだった「ヤンキー・ゴースホーム」的反米主義の雰囲気はない。もちろん「大泉市民の集

い」の運動が、その地域にある米軍基地撤去という趣旨で始まり、いまでもそれが根底にあることはいうまでもない。

世話人の一人、和田春樹東大助教授はいう。「私たちは市民レベルの反戦の運動体として、私たちの身近にある米軍基地（東京・大泉地区と埼玉県朝霞のキャン

プ・ドレイクは隣接している）を運動の対象に昨年の夏から始めたわけです。基地はめいわくだから出ていけという基地住民の論理だけでなく、基地にいる米軍兵士に反戦をよびかけるべきだと考えた。それも脱走をよびかけるより、軍隊の内側で彼らが反戦・反軍運動を組織できると、病棟の外で日光浴をしていた傷病兵がMPの中へ入れられてしまう。それで彼らの療養の機会を奪っていいのだから、とはじめのうちは考えもしたわけ

です。ところがわれわれのよびかけに對して兵士の間にだんだん反応がでてきた。いまのように「番組」をつくって組織だった「放送」をやったのはことしの六月と八月、そしてこんどの十月の八日間です。六、八月にくらべれば米軍内の反戦気分を反映してか、今回はわれわれ

司令部の強弁にもかかわらず

十二日は結局、四、五十人の米兵が金網の近くまで寄ってきて「放送局」の人びとと話し合い、反戦ビラを受けとった。「たしかに米軍の中はゆらいできているという印象を受けた」と和田助教授はいう。この時、「放送局」は兵士たちに金網越しに新しい英文の反戦パンフレット、「ウィ・ゴット・ザ・プラス」を二十五部手渡した。うちの三部は、ちょうど現われたMPが兵士の手から奪い取ってしまった。そして十五日のベトナム・モラトリウム・デーでは、憲兵隊の監視が厳しくて兵士たちが金網まで近づけず、

の「放送」に対する兵士たちの反応が目みえて好意的になってきてますね。もちろん中には「お前ら地獄へ行け」などと悪態をつくものもいるが、とくに黒人兵士の反応が敏感なようです」

「放送局」はついに金網越しには「ウィ・ゴット・ザ・プラス」を兵士たちに配ることができなかった。「放送局」グループの活動をカメラに収めようとした傷病兵の一人は、MPに連れ去られた。しかしMPたちは兵士たちが放送に耳をかたむけているのにはそれほどきびしくはとめなかったところを見ると、憲兵隊がもっとも神経をとがらせたのは十二日にはじめて米軍当局の手に渡った「ウィ・ゴット・ザ・プラス」だったらしい。そこで冒頭の覚え書にもうなずけるのである。

その「覚え書」には「『大泉市民の集い』の宣伝を米軍兵士が支持しているという証拠はなにもなく、また米国内のベトナム・モラトリウム委員会の抗議行動に兵士たちの支持が集まったという証拠もみえない。その現場に立ちあっていた軍情報部員は、なんらかの傷病兵が「放送」に耳をかたむけていたのを目撃したが、彼らはただ面白半分聞いていたものと判断した」と述べられている。

たしかに十月十五日、日本の米軍基地内外で在日米兵の目立った反戦運動はなかった。しかしそのことをもって在日米軍司令部が安心していいかどうか疑問である。

（編集部）

AMPO

A Report from Japanese New Left

ワシントンへ紙のミサイルを！

1人の日本人から1人のアメリカ人へ、1人のアメリカ人から3人のアメリカ人へ、3人のアメリカ人からn人のアメリカ人へ

日本の反安保斗争とアメリカの反戦運動をむすぶ

英文版AMPO（月刊）

週刊アンポと同時に創刊

発売中！

＜購 読 料＞

海外：
・1部 1ドル
・半年 6ドル
(エア・メール送料込)

国内：
・一般 1部300円
・学生・市民・労働者 1部100円
・6ヶ月予約購読600円
(送料：2部まで25円、3部以上は実費)

週刊アンポ社
英文AMPO編集部

Going to meet the Man

大江健三郎
中村宏・絵



秘書官が、英語でいうなら、こうなんですと、ボールドウインの小説のタイトルをまねていった時、あの男に会いに行く、という小説はどんな内容かと、つい訊ねてしまったのが悪かったのだ。老人は小説家から転進した政治家を、汚らしい役まわりで活用することとに自信を持っていたが、不眠の夜をすごす話だという小説の筋書きをちょっと聞いて、そしていま、明日、あの男に会いに行くのだと、暗闇に、自慢の大きい眼を、かっと見開いていると、癌の心配がぶりかえしてきて、なかなか眠れなくなってしまったのだった。

あの男は、商社の法律顧問かなにかで東京に來たとき、銀座のバーの女たちを、ホテルにつれかえって大騒ぎをしたと、公安のトップが報告しているのだが、交渉のあいまに、それをほめかす、ちょっとした冗談をいって見たら、あの男とうちとけることができるのじゃないだろうか？しかし、そんなことはプレシデンシャル・マターじゃないと、あの男が怒鳴りはじめたら、威信をたもてるだろうか？あの男は、実際、粗暴な意地悪なところがあるのじゃないだろうか？

そのうち、やっと眠りはじめて老人は、ひとつの夢を見た。ホワイ・ハウスの芝生の上を二人きりで歩きはじめるやいなや、あの男は、東京で楽しんだ話をもちだして、クスクス笑いをもらしながら、オイ、オマエノ女房ノ尻ヲ叩カセロ、オマエハ、イツモ女房ヲ毆ルトイウジャナイカ、といってきかないの

だ。老人は心底、腹をたてて、交渉は中止する、おれはだんことしておまえの国と対決してやる、と叫ぶと、そのまま特別チャーターのジェット機で東京に帰ってきた。そして安保放棄、沖縄即時全面返還の主張をくりだして、あの男の国との決戦を呼びかけたのに外務省も国会も党も、本気にしてくれないのである。直接行動の激をとばしてもみたが、やっとかれの怒りに呼応して實際行動をおこしてくれたのは、学生たちと反戦青年委員会の労働者たちと、ベ平連の市民たちで、しかし老人がああ男に会いに行くまえに、全面的に攻撃をかけておいた後遺症状は残っていて強力ではなく、それを押しつぶす機動隊ときたら、これは傲りにおごった怪物のごとくである。自衛隊さえ出動してくる始末だ。

そこで老人は、機動隊と自衛隊とに、過剰警護だ、暴力行為だと、自肅を求める声明を出したが、その特別声明は、まともに受けとめられず、そうしたあいだにもデモ隊は潰滅の危機にひんしている。老人は絶望にかられて、すべての公安関係者を誅首しようとし、もう俳優に習った発声法もものかわ涙声で、

——指揮権を発動せよ、と叫び、自分の声で夢からさめた。老人が、あの善良でなんでもいうことを聞いた、小説家あがりの法務大臣が、すでに死んで久しいことを思っ、夢の続きとはいえ、涙を流したのは、それがはじめてだった。

新安保体制下の日本

われわれはなぜ佐藤訪米に反対するか



鶴見良行

佐藤・ニクソン会談が開かれる。日本はますます大きく、国民の生活は豊かに、だが本当か。日本はすすんで敵国をつくり、対人民戦争が準備される。

間の常識ではないか。

だがはたしてそうか。

ばならない。

たとえば次のような文章がある。

「七〇年の選択は第一義的には日米安保条約または安全保障問題に関するものであって、内政一般を含めた国内体制全般の再検討期または変革の時期というようにまで拡大解釈すべきものではあるまい」。これは、朝日新聞社の「安全保障問題調査会」が編集した朝日市民教室「日本の安全保障」の一冊「七〇年安保の新展開」の冒頭からの引用である。

「冷静かつ客観的な事実の認識と現実的な議論を望む」という安保問題調査会が大マスコミ内につづいて組織され、防衛現実主義者といわれる一群の学者が現われたこともまた、実は、いま日本に起こりつつある広範な変化の一端をなしているのだが、ここでそれを充分に論じる紙

数はない。

こうした立場にたてば、佐藤訪米も、またその内容である安保存続や沖縄返還も、たとえば、反戦デモに出かける市民がまったく何の法律的根拠もないままに完全武装の機動隊に身体検査を強要されたり、財界首脳が公然と憲法九条の廃棄や東南アジアへの武器輸出を唱えていたりする国内の現実とは、ほとんどかわりのないことになる。そうではあるまい。すべては、眼に見えないゆるやかな糸で編みあわされ、ひとつの仕組みを構成しているのだ。この仕組みを「新安保体制」と呼ぶことにしよう。いま議論しなければならぬのは、「安保条約」ではなく「新安保体制」である、というのが私たちの主張である。

アスバック反対デモに参加した高校生が退学になったり（静岡県掛川西高）、沖縄研究会という自主サークルを組織しようとした高校生が、「戦後の沖縄は、観光と風土以外の研究をしてはならない」という理由で同じく退学になったのも（神奈川県江南高校）、すべてこの新安保体制の一部である。国費三十四億円を投じて行なわれた国会要塞化も、官庁、放送局の要塞化も、この安保体制である。運動にとって、六〇年安保と七〇年安保の大きな違いは、この新安保体制が、すでにこの社会に構造的に組み込まれ始めており、佐藤・ニクソン会談による最終的確認を待っている状況にあることだ。

佐藤首相がいよいよワシントンへ出てゆく。沖縄返還と来年六月で改定期を迎える日米安保条約の自動延長について、ニクソン大統領と交渉することが、かれの旅行の目的である

□…… 条約ではなく体制を

「沖縄を返してもらおう。本土復帰は、沖縄県民自身の永い間の念願であるし、この頃では、本土の国民も、やっと沖縄県民の苦しみや念願が理解できるようになってきた。返還は一刻も早い方がよい。佐藤首相は変な妥協をせず、堂々と返還を主張すればよい。われわれ国民はかれを監視し、注文をつけてゆこう。」こういったところが佐藤首相の訪米についての世

……□…… 七〇年安保は新しい安保

かりに議論を新安保体制にまで拡大することなく、権力の側の主張するように狭義の安全保障論にかぎってみても、事実をまっすぐに見つめ自分の頭で考えさえすれば、実は私たちは、この新安保体制にゆきつかざるをえないのだ。沖縄返還の問題から始めよう。

沖縄の返還とは、沖縄に安保条約が適用されることだ。このことから、沖縄の返還交渉は、条文の改正を伴わないで、しかも、その実質の意味を変更する交渉へと発展していった。単純化して言えば、沖縄の返還の条件として安保条約の実質的改定がはかられたことになる。それは次のような形をとった。アメリカ軍隊の「配置の重要な変更」「装備の重要な変更」「日本から行なわれる戦闘作戦行動」には「事前協議」が必要だった。それはアメリカを一方の当事者とする極東の戦争に日本は無用に巻き込まれたくないという六〇年当時の国民の批判に政府が答えて、いわゆる「歯止め」として設けられたはずのものだった。第六条の実施に関する交換公文がこの事前協議を規定している。

事前協議が歯止めの役を果たすのは、協議の結果、日本がそれについてノーというかイエスというかがあらかじめ判っていないからである。ところが、米軍が沖縄の基地の効用に固執した結果、こ

れまでの交渉においては、沖縄の米軍基地について、前記の三つの場合が具体的に想定され、日本はそれぞれの想定状況に今からノーというかイエスというかの内諾を与えることになった。具体的に言えば、朝鮮半島もしくは台湾海峡で戦火が勃発したときには、日本政府は米軍の沖縄からの発進に事前協議上のノーをいわないという内諾を与えていることがすでに明らかになっている。沖縄への核の持ち込みの問題及び返還期日の一九七二年にベトナム戦争が続いていたときに、沖縄からの米軍の発進がゆるされるか否かが、日米間の争点として残されている。核の問題も、強硬なアメリカ側の主張に日本側が折れて、核の有事駐留、持ち込みの線で解決される可能性が強く、そうなれば、日本の非核三原則もなしくずしに崩れるだろう。

事前協議上のノーをいわないという内諾を日本政府は与えたのだから、事前協議そのものがこれら二つの場合には、空文化してしまつたことになる。それは安保条約の意味が変質しただけでなく、佐藤政権の唱える「本土なみ」がもっとも悪質なうそであることを意味している。もしも前記の内諾が、沖縄だけからの米軍の発進について与えられたものであるならばそれは本土と沖縄の差別を招来するし、また逆に、沖縄をふくむ日本全土に適用されたのであれば、それは、本土の沖縄化をもたらす。おそらくは後述す

ような推論から本土の沖縄化の可能性の方がはるかに大きいであろう。いずれにしても、佐藤・ニクソン会談で決められる沖縄返還は「本土なみ」であることではないのだ。こうした欺瞞を犯しながら、佐藤政権がアメリカとの合意のもとに完成を急いでいる新安保体制がいかなるものであるかは、返還以後の状況についての日米交渉の内容が明らかにしている。

……□…… 本土と沖縄の新しい差別

沖縄返還交渉が実質的に大詰めに入つたこの十月になってあわただしく論じられた問題のひとつに「沖縄防衛」がある。最初、日本の防衛当局は、返還後の沖縄の防衛について、自衛隊による米軍からの「肩代り論」を唱えていた。ところがそれから半月もたたないうちに防衛庁が最終的沖縄防衛計画として発表したものは、主として災害派遣、基地警備、治安維持を目的に陸上自衛隊一個連隊の派遣を主軸とする線に後退していた。おそらく米軍が自衛隊の防衛能力や後方支援能力を信頼しなかったことも一因であろうが、それよりも、自衛隊への基地の割愛が現状の基地の効用を損うことを恐れてのことであつたにちがいない。

だがそれにしても、いま沖縄防衛が論じられるのはなぜか。返還以後の沖縄の防衛はあくまで「本土なみ」でなければならぬし、「わが国の平和と独立を守り、国の安全を保つ」という自衛隊法が適

用されるはずである。つまりそれは本土以上であつても以下であつてもならないはずだ。にもかかわらず、アメリカ政府との交渉の過程で、二転三転しながら論じられているのは、それが沖縄の人民の生命や財産の保全ではなく、沖縄米軍基地の防衛を意味しているからである。沖縄の人民は、まちがっても、自分たちを守ってくれる議論がされているなどと考えないようにしよう。

端的にいうと、沖縄＝米軍基地という等式は成立する。だが、本土＝米軍基地という等式は成立しにくい。米軍基地を軸として考えるかぎり、沖縄と本土とは同列にはおきえないのである。それを「本土なみ」と称して、同等であるかのようなうそをつくことから、沖縄と本土の人民の間に二重の差別の意識が発生する。第一に、沖縄人民は、本土の人民よりも直接的に、みずからの生活を犠牲にしても、米軍基地に協力しなければならぬ立場におかれる。にもかかわらず、「本土なみ」という欺瞞のために、本土側の人民は、沖縄人民の立場が「本土なみ」にひきあげられたと錯覚する。こうした差別は、すべて権力の利益のために権力によってつくり出されたものである。沖縄と本土が本当に一体化するためには、両地域からの米軍基地撤去が最低限の条件として満足されなければ実現しないだろう。この条件が満たされる状態は、安保条約が破棄された状態である。

対人民戦争が準備される

沖繩防衛論が明らかにしているように沖繩返還の議論の大部分は、米軍の立場からのものだった。戦闘集団であり占領集団である軍隊の立場から異国の人民を見下せば、それは、敵に見えるか味方に見えるかであろう。味方といっても、たかだか基地の存続のために利用できる苦力以上のものではないのだが。沖繩の本土復帰運動がその限界を打破って基地撤廃運動、安保反対運動さらには沖繩解放運動へと高まりつつある今日、米軍ならびにその戦術面をひきつぐ日軍は、沖繩人民を潜在的に味方であるよりも敵として考える可能性が大きいだろう。

本年六月五日に行なわれた沖繩全軍労の二十四時間全面ストのさい社大党の安里委員長をふくむ日本人数名が着剣した米兵により傷つけられた事件は、沖繩人民から米軍基地を防衛するという「沖繩防衛論」の視点をはっきりと示している。

沖繩人民から米軍基地を防衛するという「沖繩防衛論」のしめす方向は、まさに沖繩返還のとりきめそのものによって返還以後は日軍によって肩代りされてゆくだろう。なぜなら、現地人との紛争対策は、日軍の担当する戦術上の問題であり、第二に、現地人権力を通じて現地人を支配することが外国軍隊による植民地支配の鉄則であるからだ。沖繩防衛論と

は、人民を敵とし、人民を疎外する反人民的な概念である。

だが、こうした対人民防衛、対人民戦争の政策は、はたして、沖繩だけに特殊に孤立して採用されているのかどうか。沖繩全軍労のストがすぐれてベトナム反戦の視点をふくんでいたことを考えあわせると、沖繩県民からの米軍基地防衛は、ベトナム人民からのダナン基地防衛につらなっているにちがいないし、安里社大党委員長につきつけられた銃剣は、遠くベトナム人民解放軍戦士ののどもとに擬されていたのであつたらう。

韓国もまたその例外ではない。本年二月に東京で開かれた第二回日韓国会議員懇談会で韓国側代表らは「沖繩返還は単に日本の国内問題として済ませない」と発言し、それにたいして賀屋興宣氏は(1)安保条約により、米軍が在日基地を根拠地として韓国の防衛に当たることが絶対に必要、(2)沖繩返還後の米軍基地も当然、韓国を含む極東の防衛に有効に働く、と答えている。その一カ月後には、米本土から韓国への大空輸作戦「フォーカス・レチナ」が、沖繩経由で実施された。

さらに五月訪韓したチュー・南ベトナム大統領と朴大統領との会談では、「沖繩米軍基地の戦略価値の保持についても共同で対処し、韓国、南ベトナム、台湾をふくむ新しい安保体制を構想する」ことが確認されている。これは、韓国に学生運動の高まりなどから一種の内戦状態が

発生したときには、朴政権は、沖繩の在日米軍の出動を要請し、在琉日軍は、後方部隊として、これを支援し沖繩人民の反戦デモから基地を守る活動をすることを意味している。

たしかに、集団安全保障という名による軍事的国際化は、この十年間に格段と進行してしまった。とすれば、日本本土だけが、米軍を頂点とする国際的軍事網の対人民戦争、対人民防衛から逃れていられるはずはない。たしかに新安保条約と不可分に結びついた自衛隊の第四次防衛力整備計画やその前段階としての長期防衛戦略は、「間接侵略に対処する」という形で、対人民防衛がひとつの重大な方針になっている。

間接侵略の論理

現に今年の九月、防衛庁が発表した「国防白書」の原案は次のように事態を予想している。

「非常事態の様相

わが国に生起すると予想される非常事態は、いかなるものであろうか。第一は先に述べた冷戦的諸工作であり、次は間接侵略であり、第三は外部からの武力攻撃である。

間接侵略の特徴は、直接侵略の場合と異り、外部からの教唆、せんだい、支援等の働きかけが最初国民に気づかれないうちに、行われ、そしてそのような教唆、せんだい、支援をうけやすくしている条件が

国内にあることである。」

河本義信氏は、今年になって防衛庁がまとめた長期統合戦略見積りの中間報告に盛られた考え方の大筋は次のようなものであるとして紹介している。「自衛隊の防衛の主目標を、国内の軍事基地および政治・経済の中枢におく。」(「世界」69年11月号)

米軍基地が自衛隊基地におきかえられただけで、沖繩を貫徹していた対人民防衛戦略は、本土にも採用されているのである。権力がその存在の最終的基盤である暴力装置を人民にたいして向けるといふ姿勢が本土にも見られる。それは、本土の沖繩化ということだろう。

だが、日本政府が民主主義を基本的原理として成立している以上、それは、どのような名目によっても、人民一般を直接に敵呼ばわりすることはできない。何らかの方法で権力にとって有害な人民と無害な人民を区別し、しかも、前者をそれとして後者に印象づける論理的操作を必要とする。それこそ、間接侵略論である。前述の国防白書の原案は、間接侵略について次のように述べている。「間接侵略は……、国内において内部崩壊等の諸工作を行い、次いで内乱、騒ぎようを引きし、次第にこれを拡大して大規模のものとし、一部武力攻撃を併用する事態も発生する。」おそらくこれが内部敵である有害な人民の定義にあたるだろう。間接侵略者は、日本にたいして外部か

ら脅威を加える特定の国家の手先として出現する。国防白書原案の間接侵略の記述は、「極東における軍事情勢」を分析した章の次のような文章と対応している。「中共および北鮮が依然として強硬な対外姿勢を堅持し、対外諸工作を一層積極化することが予想されることなどから、極東地域における緊張は相当期間にわたって持続するものと判断される。」

いまのアメリカ人の心に住みついてしまった「共産主義にたいする恐怖感」や「中国脅威論」は日本人には希薄である。だから営々として再軍備の充実に務めてきた防衛庁といえども、仮想敵の造出には慎重であった。おそらく、日本政府が中共だけを名指しで、「脅威」として認定したのは、今回の国防白書原案が最初の文書であろう。ちなみにソ連については、その兵力の分析はあるが、これを脅威として認定してはいない。

すでに多くの防衛論議で日米の軍人や戦略家が指摘しているように、中共、ソ連による日本への直接侵略の可能性はそれほど大きくはない。現に沖縄防衛論においてさえ、米軍当局は、米軍が完全に引揚げ、「真空」にならないかぎり、沖縄への直接侵略はありえないと判断した。にもかかわらず、権力が第一の可能性と考える対人民防衛を正当化するためには国外の仮想敵国による脅威が必要だった。国内敵は国外敵によって正当化されるのである。このようにして、新安保体制の

完成のためには、まったくの架空から、内部の敵と外部の敵が、ほとんど同時に造成されようとする。

これは危険きわまりないことだ。なぜならここには、二重の悪循環が発生し、日本はとめどない軍拡競争へのめりこんでゆくだろうから。一方においては、観念上の国内敵と国外敵とは相互に刺激しあって、国民の恐怖感は徐々に昇進する。おそらく、自由主義国で国民総生産世界第二位、マイホームの幸福といったことが、こうした観念的恐怖の再生産の実質的裏づけをするだろう。金持ちは戸締りを厳重にするのだ。たとえば新安保体制の完成に向かって、自衛隊の治安出動訓練が大はばに増強されたことは、いまや誰はばかることなくPRされることとなったが、それは実際に自衛隊員の士気を昂揚したり、対ゲリラ作戦の技術を向上させたりするのに必要なためばかりでなく国民の観念の上で、外国の脅威を印象づけるのに役立つからである。

第二に、日本の防衛努力は相手方の対応をひきおこし、実質的な軍拡競争の悪循環が始まる。軍備の拡充は、いかなる場合も、心理的かつ物質的に一国内部だけで進行し完成することはない。この悪循環に一步足をふみ入れたとき、架空の敵は、まさに現実の敵となる。間接侵略を基調とする新安保体制のもとで、私たちは本当に特定の外国を恐れるようになるのである。

……

人民は無敵大だ

日本の防衛当局は、四次防をふくむ長期戦略の見通しにおいて、海上防衛などの直接侵略に備える可能性をまったく捨て去ってはいない。むしろ新安保体制では、日本がアメリカの肩代りをして、最初はエコノミック・アニマルとして後にはさらに積極的に軍事力としてアジアへ進出してゆかざるをえないから、海上防衛力の増強は今後も推進されるだろう。

だが国内における権力と人民の関係においては、新安保体制が間接侵略論を基調とする以上は、教育とマスコミによる世論の統制と洗脳が権力のもっとも有力な武器となってくるだろう。有害な人民にたいしては警察と自衛隊の直接の暴力が遠慮なくふるわれ、無害な人民には、それが有害な人民へと転化してゆかないための世論と教育の統制が進行する。マイホームに安住しようとしないう人間には洗脳が牢獄かが強制されるのである。新宿駅西口広場における東京フォーク・ゲリラ運動の推移は、権力による無害な人民と有害な人民との峻別という姿勢を、もっとも端的にあらわしている。

世論の統制は、自民党政治家の個人的人間関係にたよった夜の蝶の大動員といったチャチな手段から始まって、権力に買われた近藤日出造氏の「安保がわかる」一部五〇円が、国民協会、全国市長会、ふる屋組合、パン屋組合、キャバレー業界

を通じて全国に八〇万部バラまかれるといった中期作戦、石坂泰三氏を会長とする「放送番組センター」が財界から年間五億三千万円を集めて、テレビ番組の作成にのり出した本格的長期作戦にいたるまで、あらゆる手がうたれつつある。

こうした過程で、見落してならないのは、国民の基本的な人権、市民的自由への抑圧が徐々に進行していつていくことだ。たしかに、マイホームにとどまるかぎりそこには相対的な自由と安定が残されているかに見える。しかし、デモにさえ行かなければ、石さえ投げなければ、ということにはならない。なぜなら、権力にとって、絶対に無害な人民は存在しないのだから。市民的自由の抑圧は、徐々にマイホームの内部までをも侵すにちがいない。

ここに描き出したような新安保体制のもろもろの過程は、佐藤とニクソンの会談によって最終的に確認される。それは国民の生活のすべての分野を支配するようなものであるだろう。

私たちひとりひとりの人間が、みずから人間性の解放と独立を求めるためにはどうすればよいか。私たちに与えられた武器はたったひとつしかない。人民は不特定多数であり、原理的に有害な人民と無害な人民を区別する方法はないということだ。広く人民とともにすべての運動の進展はそれにつきる。

高校学園祭の本質をフク

その主人公たちの主張と 全国高校学園祭の実態アンケート

(編集部)

高校問題。いまや大学問題以上に大きな問題となりつつある。だがその報道はヘルメット、バリケード、封鎖、さらには火炎ビンと、現象面だけが追われ、その背後にある問題点や、高校生の考え方、主張はほとんど問題にされない。

「紛争」がおこるとマスコミにはのろが、その「紛争」がなぜおこったのか、高校生がなぜ激しい形の闘争に訴えざるをえなかったのか、その原因や経過は闇に葬られる。

たとえば文部省のモデル高校とされている神奈川県立平塚江南高校の場合をみてみよう。「紛争」は今年の三月、文化祭の内容をめぐるおこった。

戦後の沖繩は御法度

——各研究会は四月に入って、校長との対談（通告）を行ない、その場で沖繩研究会は「戦前の沖繩は発表してよいが戦後の沖繩はいけない、B52の写真は貼ってはいけない」という通告を受け、また安保研究会は「安保問題を研究することとそれ自体いけない」という通告を受けた。学校側はその後各研究会のメンバーの個人攻撃を始めた。

——攻撃は家庭への直接電話、名目を変えての父兄の呼び出しと多彩(?)をきわめ、研究会のメンバー（総員二十三名）は半数以下に減ってゆく。第二回目の校長対談（通告）がその後行なわれた際、「沖縄については観光と風土なら良

い。安保研は認めない」といった発言が出るにいたって今回の問題は爆発し……（以上「ベ平連ニュース」9月号）

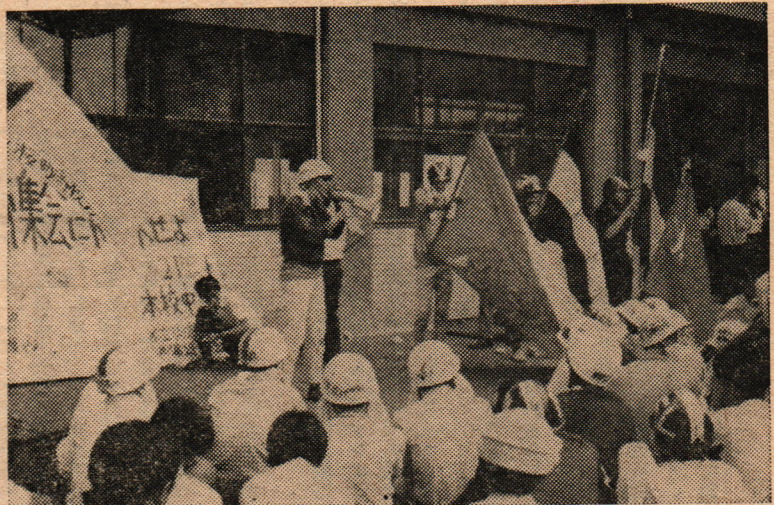
こうして江南高の闘争は始まってゆく。戦後の沖繩を観光と風土とだけで研究させようとする文部省モデル指定校。常識ある高校生がそれに反発するのはまったく当然でありこうしたことが許されている高校のあり方自体に問題の焦点がさらに向けられてゆくのもまた当然といえよう。

いや、最近、新聞ダネとなっている「紛争校」とは、抑圧に対して抗議する余地が与えられているところだ、という見方もできよう。「紛争」のおこっていない高校のほとんどは、問題意識の萌芽すらも巧妙に摘みとられているともいえるのだ。

闘争の契機としての学園祭

今号では、こうした高校問題の激発の契機となる学園祭、文化祭に焦点を合わせた。さきの江南高校の例のように、学園祭における高校生の研究発表や主張に対する制限、圧迫さらには強圧が、高校生たちの強い抵抗や反撃の契機をつくり出しているからであり、それを通じても

都立駒場高交の学園祭（九月二十一日）



今の高校がもっている問題点の一端を明らかにしようからである。

文部省のモデル校に対し、高校生はどんな文化祭、どんな学校を理想として追求しているか、この秋、学園祭をもった高校の中から、その主人公である高校生自身にそれを語ってもらおう。また別掲のアンケートは、高校生がそれぞれの学園祭をどうみるかを明らかにしている。

マヌーバーとしての自主管理

都立大附属高校闘争委員会

われわれの高校の文化祭＝記念祭は、今までもその運営方法、内容等で他校の文化祭等とはかなり違ったものだった。というのは、各校の文化祭で去年あたりから問題になってきた文化祭の生徒による自主管理が、完全とは言えないまでもある程度行なわれてきていたからだ。（違った見方をすれば、学校当局がそういうことを保障してくれていたとも言える）



- ① 学園祭は何年に一度あるか。
- ② 生徒によって構成される「実行委員会」の役割および権限について。
- ③ クラブ、クラスなどの企画を最終的に承認する権限は生徒側にあるか学校側にあるか。
- ④ 今年の学園祭の講演について。
- ⑤ 今年のクラブ、クラスなどの企画に、安保、沖繩、大学問題などがあったか、あったとすればその内容は、その他、書きたいことを。
- ⑥ このアンケートは、全国の高校の中から二百余校を編集部が無差別に抽出

る。例えば、展示、劇の題材、内容については全く自由であったし、教師は学校管理者という立場からの干渉は行なわなかった。また、予算、会計等の事務的な準備、仕事、全体の行事（歌声、ファイヤー等）は、生徒の選挙によって選ばれた記念祭執行委員長とその執行部、あるいは展示、劇等を行なうクラス、サークル等の代表者によって構成される代表者

し、十月中旬に送ったものである。宛先は、各校の学園祭実行委、新聞部、生徒会、サークル等である。返信のあったのは締切期日までに十六校、うち記入のなかった二校を除く十四校の解答を以下原文のまま紹介する。

編集部

▼県立福島高 ①三年に一度。②すべて最終的には学校側に権限があり、また原案作成にしても学校側がつくり、生徒がそれを承認する形である。実行委員会とは名ばかりで学校の御用機関にすぎない。③学校側にある。④なし

⑤去年、我校では文化祭が行なわれたが、安保・沖繩等の問題もととりあげる際には検閲があり、自由な活動はみら

会議に任されていた。代表者会議によって、記念祭三日間の生徒の下校時刻等が決定されそれらについて全生徒を代表した執行部が教師と折衝を行なっていた。展示の内容としては、かなりの部分で安保、沖繩問題等、政治的社会的問題がとりあげられてきた。だからすべてが生徒の自主管理とは言えないにしても、われわれの記念祭は昨年まではある程度の自主管理が、保障されていたのだ。つまり進歩的な教師は生徒を信頼して記念祭の運営をまかせ、生徒の自主性を尊重して行くこととされ、また、生徒にとっては自由と自治ということで、生徒＝高校生

れなかった。⑥高校生の政治活動などを政府＝自民党は一方的に禁止にする方向をうちだしたが、現在の教育の反動化・ファッショ化に対抗する意味においても高校生は連帯して闘うことが必要であり、その方向において週刊アンボ等において呼びかけてほしい。

▼茨城県立第一高 ①毎年。②学園祭におけるすべての行事の総括および運営。③生徒と先生との協議。④なし。

⑤安保問題について、その実情や役割また賛成論反対論などを討議、またテーマ館では「平和とは何か」という題のもとに自衛隊、ベトナム、催涙ガスなどの諸問題について発表。⑥わが生徒会は自主、責任協同の校訓のもとに

のまさに人間的な権利という部分で評価し、かつ正当なこととし政治的、社会的な部分の問題をも考え、行動していくということであった。

「民主的」の意味するもの

これは一見正しく、教師も生徒もこの学校自身も実に民主的、進歩的なようにみられるのではあるが、そこからごく自然に発生してくること、それが問題なのであった。すなわちある程度の自主管理を保障するという、ゆるま湯の状況がそれなのである。

つまり、記念祭を行なっていく過程の中で、自主管理がある程度できる、自由に題材を選んで研究できるということとで安心し、満足してしまうのである。この危険性は、満足感の中で多くの一般生徒を無力化し、発展性をなくさせる、たとえば文化祭闘争はもとより、政治的スローガンをかけあげる闘争が一切黙殺されていくようになる恐れがあるのである。

学校当局がある程度の自主管理を認めるということは、実は汚ないマヌーバーなのである。つまり、生徒に学校当局がある程度の自由を認めておけば、生徒の中にいくらか有力な指導者があらわれて完全自主管理要求や、教師の管理者的立場を糾弾しようとするようになって、生徒はついてゆかないだろうという思惑があるのである。このやりかたは、記念祭の自主管理という問題だけではなく、われわれの高校においては多くの面にみられた

極めて自主的に活動している。近年とみに生徒の評議会の質も向上し、国会などをしのぐ運営を行なっていると自負している。

▼都立武蔵丘高 ①毎年。②実行委がすべて運営しその自主性は保障されている。③生徒側にある。④なし。⑤政治経済部「安保と日本経済」(条文解説、安保下の日本、沖縄の実態)新聞班「学生運動」(東大を中心とする学生運動の原因)安保研「青年の力で安保を破棄しよう」(具体的な破棄の展望)。⑥今のベ平連は何だ! 赤ん坊の無知な集団ではないか! 君らのしていることが結局国家権力に真の民主勢力の統一戦線を弾圧せしめる口実をつくり、日本革命の展望に大きな損失をもたらしているということがわからないのか、ギマン的な今のベ平連なんかやめちまえ! 君! 民青同盟に加盟し共に学び、共に闘おうではないか!

▼都立小石川高 ①毎年。②ほぼ全面的に実権を握っている。発表団体の場所の設定(学校と交渉)、予算、プログラム製作。③生徒側にあるが学校も干渉してくるので対決することがある。④柏崎千枝子氏を予定したが全關連の方で実現できなかった。⑤社会科学研究会、安保70、部落研、差別。⑥学園祭そのもの、天下の小石川生のオツムの低さを暴露する他なく、その意識の低さと体制奉仕的発想+ホモ・ル

・ダンス(遊び人)化に充滿したものである。高安共闘結成のため小石川高F.L.と全關連が学内デモのあと清水谷にむかったのが一つの政治行動であった。直後、ベ平連ができる。

▼都立第一商高 ①毎年。②生徒で行なわれているようだが事実上は教師のものになり、一商の文化祭は有名だから今年も行なうという状態。生徒会そのものが学校側そのもの。③生徒側にあるが一部で決める。④東大助教某氏が講演。学校側が決めたもの。⑤時事研が自分の問題としてとらえた企画、ほかの一つのクラスが新聞の切りぬきと同じで意見のない企画を発表。⑥ほかではベ平連の定例デモで実業高校をあつめ「実共闘」というものをつくらせて反産学協同をうち出している。

▼私立千代田女学園 ①毎年。②実行委員はプログラムの制作、後夜祭などの準備やジュース売店などの整理もする。実行委員会が出た案はクラス代表委員を通じてクラス全員の意見をきかなければならない。先生方の力がわりに強く働く。③学校側にある。

▼愛知県立旭丘高 ①毎年。②中央委員会(執行部と各常任委員長で構成)におされてほとんど下うけ機関、そしてこの中央委も顧問団という教師集団に抑圧されています。③学校当局にある。④東大、日大全共闘を予定したが学校側に拒否された。⑤中央委が沖縄

・大学問題に関する講演会を開いた。

▼大阪府立高津高 ①毎年。②形式面は全て実行委による。クラス、クラブその他の発表するものの内容には一切関知しない。学校側との交渉もやるが最近では記念祭そのものが慣習化されている。③生徒側にある。④有志主催で井上清氏の講演。⑤アンケート少しと、圧殺の森、など二、三の映画があった。⑥今年本校では自治会執行部が成立しておらずその他いろいろな問題で記念祭の準備期間が短かったので内容は非常にくだらなかった。

▼福岡県立筑紫中央高 ①二年一回。

②生徒の力は無に等しく学校側の弾圧が大きいため何もできぬ。③学校側にある。④圧力が強く企画自体できない。⑤時事研が70年安保問題についてやったが、これも学校の圧力で盛り上がらなかった。九大から持って来た垂れ幕を下げたが20分ぐらいいおろされた。とにかく、単なる商業主義的展覧会。

④福岡地区高校反戦の更に充実した闘争と組織化をのぞむ。

▼福岡県立筑紫高 ①毎年。②大部分の運営および処理を管理。別段学校側の束縛は受けていない。③生徒側にある。④松本七郎氏の講演。⑤社研が沖縄の基地問題を取り扱い、新聞部が学生運動を概略的に取り扱った。

▼福岡県立嘉穂高 ①毎年。②文化委員が一切のことを決める。③学校側。

のである。

しかし、今年は、記念祭直前にわれわれ附關委で現体制内の学校存在そのものを問題にして「バリ封」を行なったことによって、学校存在そのものの中での行事として行なわれようとした記念祭の性格が鮮明に浮き彫りになったのであった。

自主管理にさらに造反

今年の記念祭においては、まず記念祭執行部は徹底した自由参加を提起した。つまり多数決によって参加形態を決める「クラス参加」というものを一切排除し、学年、クラス、クラブを越えて、各個人が自発的な記念祭に対する参加形態を考え出し、一致したものでどうし結合していく形にしたいと提起したのである。それによって執行部がトータルな管理をするというのではなく、そのサークル、グループが記念祭において、自分たちの研究行動等を管理するということが同時に提起されたのであった。つまり自主管理といたしながら、執行部の管理のもと安心して記念祭を行なってきたサークル自身が実にその名通りの自主管理を提起したのであった。

これと並行し、附属高闘争委員会のメンバーは現在の高校のあり方、教師の立場の持つ欺瞞性に大きな疑問を投げかけバリケードストライキに入った。そしてそういった闘争を通じた記念祭の本質をも問われてきたのである。それで、記念

④なし。⑤新聞部が安保をあつかった内容は④調印時の背景⑥闘争史⑦基地公害(沖繩も含む)⑧各党の意見。

▼私立大分舞鶴高 ①毎年。②実行委員会の権限うんぬんというようなプログラムは最初から組まれません。政治活動についてはほとんどのものが無関

祭実行委員長は「究極的にいって記念祭はやはり学校行事となっているのでありそういった認識の下でこれまで定例行事である生徒大会で学校当局や自治会によって委員長に選ばれたこと自体が徹底的な自己批判にあたります」とし、委員長を辞任したのである。それと同時に彼は新しく一人の人間として先進的に記念祭を創り上げていく試みを行なおうとしたのだ。

学園祭は誰のものか

都立駒場高へ平連

ぼくらは高校にはいってから今年で学園祭を二回経験したわけである。この紙面をかりてその総括とこれからの展望を行ない、学園祭の本質的な価値をぼくら自身で確認してみたい。まず、総括の上で明確に言えることは、「何の目的で学園祭を行なうのか?」「学園祭とは何なのか?」「誰のための学園祭なのか?」という根本的な自分自身への問いかけが

心なのです。③学校側にある。④大分大学某教授が講演したが内容は学校側が独断で決定。⑤なし。⑥「彼らの考え方はわかるが、やり方には賛成できない」という理解ある(?)一般論が教師、学生の一致した意見です。要するに逃げ口上だ。

しかし、記念祭は結果的には準備不足などが重なり、展示を中止したり、延期を要求するサークルが続出した。が、ともかく記念祭は挙行された。しかし、内容的に二、三年の参加が少なくて一年生が圧倒的に多く、さらには内容も喫茶店とか金魚すくいなどが多く、三年生の一部には記念祭を秋祭りにせよとの声まで出る始末であった。実際に今年の記念祭はついに秋祭り化してしまった。

声を大にして行なわれずに、今考えればまったくナンセンスなことであるけれども、主体性のない学園祭が続いてきたことである。つまり、この十何年来学校の行事スケジュールのひとつとして存在しやうて楽しい、見て楽しい、学園祭が終われば空虚感だけしか残らず、他には何も無いという単なるお祭りでしかあり得なかったことだ。そして、もっと集約的

▼私立九州学院(熊本)①二年に一度。②ビラを学生に配ろうとするとき、内容を学校側に知らせなければならぬ。実行委員会の役割りは現状において運営権のみ。③学校当局にある。④なし。⑤一般的にいう全学連を系列図にし、その思想と行動を調べた。

に言えばそれは学校生活の日常性の象徴としてしか現われてこなかったことだ。それゆえに、「クラスの親睦」ということばなどでごまかしてしまふ。なにも学園祭を「クラスの親睦」のための最頂点におくことはないし、そういった限られた位置におかせる現在の高校教育機構にも問題がある。事実、今年出されたわが校の学園祭の目的と呼べるものであった「クラスの親睦」も、前述した通りの確固たる目的ではなかったために、漠然とした義務感と、お祭りごとなら何でも結構という気持ちとでやうと活動を始め、小器用に形だけは整えたが、結局一部の人間の親睦になってしまったのである。

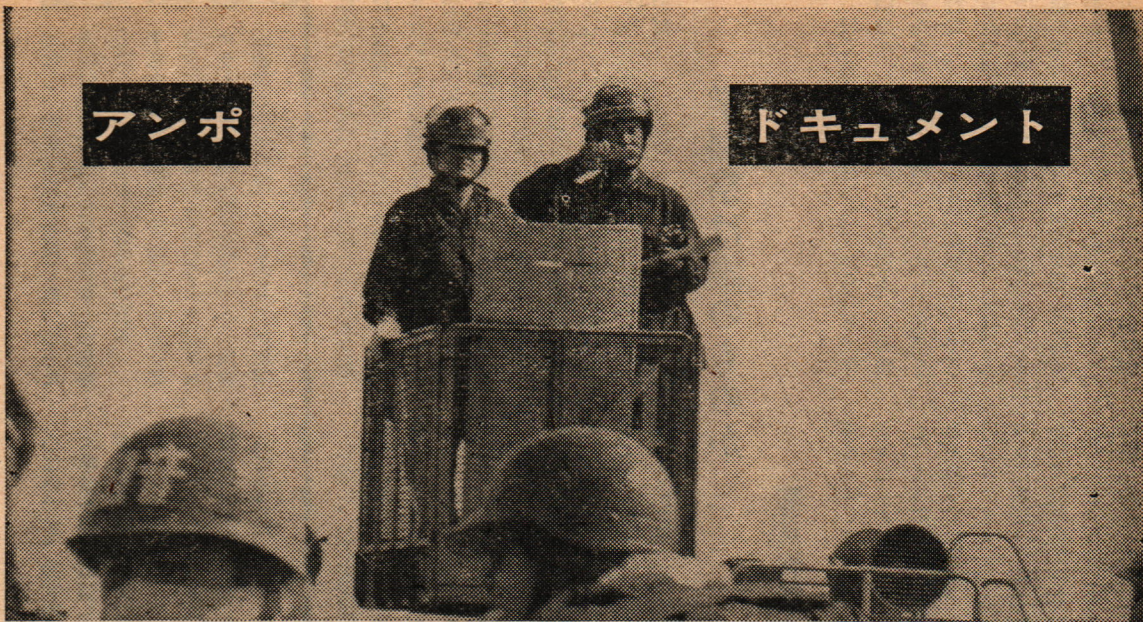
また、学園祭が日常性の象徴であることの大きな理由には、校内で行なわれる学園祭が自分の学校以外の社会とは何の関連もない、ということがある。青山高校のように自分の学校に問題が起らない限りは、ベトナム戦争が起っていないも、自衛隊が治安訓練を行なっていないも、学園祭は行なわれるのである。はたして

このように高校を社会から切り離し、一時の平和気分につかっているだけでいいのだろうか? 大学の受験制度の中にあつて、その気分転換のためのひとつの享楽でしかないものとして学園祭を形骸化してしまつていいはずは絶対でない。そこでぼくらは今年の九月二十一日の日曜日、「考える学園祭」として問題提起の形で、ベトナム反戦、沖縄闘争勝利、安保紛争、を問題事項に取り上げ、外部からはフォーク・ゲリラを招いて学園祭の中庭において集会を持った。既成の学園祭に対する告発というだけでこの集会を持ったわけではないのだが、結果として決してこの集会は満足しえるものではなかった。政治的な目的も、同じ日に同じ場所で開催を聞いた全共闘準備委員会(その目的は青山高校連帯集会であった)と同様に充分に果たされたとは言えなかった。なぜならば、残念なこと一般生徒の意識の高揚がその段階まで達していなかったからである。

さて、最後には展望として、これからの学園祭というものを考えていかなければならない。今まであげてきた問題点を克服するものは究極的には各自の主体性である。大学はマンモス化されて個々の学生の立場が反映されないのに対し、高校こそはそれが十分発揮される場所であるという事実があり、それにぼくら自身の自発性をプラスして、行動を起こしていかなければならない。

アンポ

ドキュメント



写真Aは、十月十日の統一集会の前の日から当日にかけて、会場になるはずの代々木公園の周辺の住宅、喫茶店、パン屋などに原宿警察署長の名前でバラまかれたもの。

一枚のビラの意味するもの

こういう種類の暴力学生に注意せよというようなビラは多くまかれていた。こういう戦術は今年のアスパック闘争をきっかけとして大胆に始められてきたものだ。デモや集会に参加する人と、それ以外の人とを、オドカシによって暴力的に区別していかうという方法である。デモや集会を、特別に危険で、なにやらウサンクサク、あやしげで、暴力団と変わらない、いやそれ以上悪いものと印象づけて、いわゆる一般の人を、それに近づけさせないようにするものろみだ。そうすれば、集会やデモは管理しやすくなり、政府にとっては無害なものに、いやひょっとすると、それは政府にとって有利なものにさえなるのではないか。こういうビラをまき、同時に広報車がラウドスピーカーでがなり立て、マスコミが暴力学生キャンペーンと、「佐藤首相がアメリカから沖繩を取り返してくる」と触れまわれば、それがもうまくいったなら、

お願

● 十月十日、正午ごろから代々木公園周辺に数戸の暴力学生や反戦青年会等が集まり集会デモを行なう。当日はこまめに悪化を察知し、必要に応じて火災警報機を鳴らす。またデモ活動の進行状況や被害状況を随時把握し、必要に応じて消防や警察に連絡する。

● 当日の路上駐車は控えて下さい。

● 混雑している場所には近づかないで下さい。

● 最悪の場合、警察はガスや水銃活動を行なう場合がありますので、雨戸等の戸締りをして下さい。

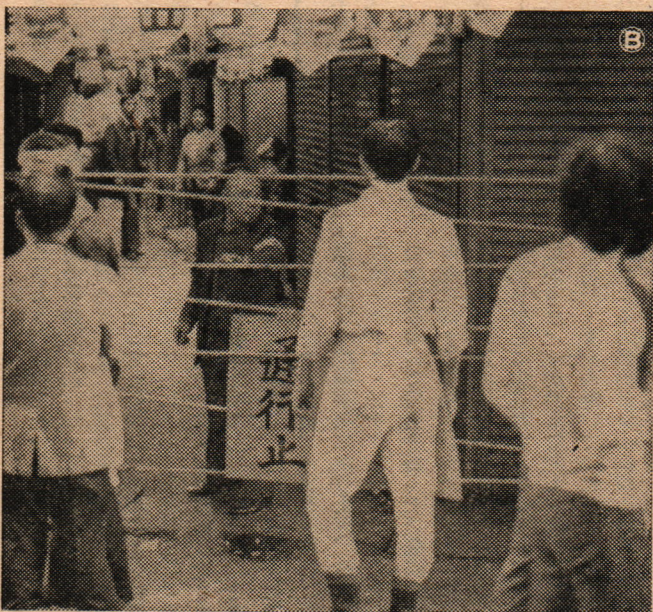
● 警察官が負傷したとき、または暴行した警察官が殴られたりケガをした場合は、一〇番などによる連絡をお願いします。

● 暴行や脅迫などの行為は厳禁です。この様な行動は、この付近を通行する方が迷惑です。また、この付近を通行する方が迷惑です。

昭和四十四年十月

原宿警察署長

原宿警察署長



定晴に金堀に御覽り下す

[illegible]

その依り、暴力でも必ず
警察に、取締りてもら
わう

神用 神用
防 防
犯 犯
協 協
力 力
會 會

「警戒の目をのかれるため皆様の店を謀議、連絡あるいは闘争用物品の置場などに使うおそれがありますので、暴力学生による過激な学園紛争や集会デモから町の人々の安全と社会の秩序を守るため、もし、お客さん等の中に前記のような目的に店を利用している者がいると判断された場合には、すみやかに人員、服装、携帯品の有無・種類、立ち去った場合はその方向、時間などお知らせ下さるようお願いいたします。（一一〇番で結構です）」

上野警察署と東上野四丁目本町会の名前でまかれた「集団の暴力からの被害防止についてのお願い」の中には、「町会長さ

Ⓛ



んならびに役員の方に連絡体制を作っていたかどうかを聞いたんですけど、町会からの状況連絡により暴力学生などに侵入されたり、投石でガラスなどこわされないように、危険物の片づけなどの防災準備をして下さい」という文章がある。

つまり町内会のレベルで、自警団のようなものが、組織されつつあるのだ（写真B・E・F）。そろいの戦闘帽をかぶり（ある時はヘルメット。D）、

新宿三光町のそばでは機動隊に追われて逃げている人や、けがをした人を警官につき出すというようなこともあったのだ。それは、関東大震災の時や太平洋戦争の時の自警団、となり組の復活のような無気味な印象を与える。あきらかにこれは上からのファシズムに呼応した町内会ファシズムの復活である。

こういう体制ができ上りつつあるということは、日本が再び警察国家へ、恐怖政治へ、ファシズムへ向かいつつあるということだ。

「いったい機動隊は、そういう全体の動きの中で、実際に何をやっているのか。」

機動隊の暴力

アスパック闘争。伊東駅で逮捕した学生の首をしめる機動隊

別刻 警部配取活動状況 (NO) 1

① 200 馬 7 割 へ 60

② 03 部隊前哨 30名 35 へ 63
220 名 の マ イ ク ト ン 演 説 中

③ 08 郵便局署長 職員 70 名 合 席 中 情 報 状 況
始 れ

④ 18 部隊降参
右 派 / 小 隊 3 小 隊 以 上 で 陣 営 可
野 郎 有 車 持 行

⑤ 20 部隊前哨 / 小 隊 降参

⑥ 23 部隊前哨 ⑦ 到着

工務院大
約 90%

郵 局

[illegible]

警視第三機動隊
第二中隊
伝令用



員(写真G)

10・21の新宿で意識的に女子学生のセーターをハギ取り逮捕する機動隊員(写真H)。

お茶の水駅付近で学生のデモ隊に向かいガス弾を乱射する機動隊(写真I)。

伊東駅で逃げている学生の背中に、ジュラルミンのたてを水平に投げる機動隊員。(写真J)ジュラルミンは、こういうように使われると、大変な凶器になる。機動隊の暴力は、体制の中でいまや完全に保証されつつあるのだ。こういうような機動隊の暴力は、どのように組織され、動かされるのか。

現認報告書

たとえば、写真K・L・M・

N・O・Pは、六月二十八日の新宿郵便局郵便番号自動読み取り機搬入阻止闘争の時の機動隊による現認報告書である。

この日、西口地下広場の反戦フォーク集会に集まった人々は集会が終わった後、新宿郵便局へ抗議に向かった。その無防備な人々の中に機動隊は、ガス弾を次々に打ち込み、地下広場に逃げた人々に向かって、至近距離でガス弾を打ち、多数の人人を傷つけ、逮捕していった。

NO() 警備記録 新宿郵便局

1955() へ平達、東海銀行前において、4名が郵隊に襲撃、17年ル22の2222に2224中。

51() フント小口、新宿道上に113。

59 21隊前、郵便局交差路。

200/ 同所より前、安井路、角管2-28リ-エカ。

09 21隊前、すび31止り。

04 角管2-32 K.K. イトキ新宿営業所、各小隊会派。

イトキ、角管2-32。

郵便局。

時刻 警備部隊活動状況 (NO)

1941 角管2-82 料理店「今住」前、到着。

50 小隊、合流。

46 1小隊前、(王找隊長命)工学院大正門の襲撃。

47 工学院大正門前、到着。

50 撤収完了。

51() 解身会中のへ平達集会后、お茶の水駅に入、フント小口、新宿前でデモ中。

53() 地下広場のへ平達と思われるその郵便局方向に向かう、人1見、300名位。

なにかその後 どうなったか

第1回

「広場」とフォーク・ゲリラ

五月・六月、マスコミのライトをあびていたころ、新宿西口広場の東京フォーク・ゲリラは生き生きとしていた。もち論、マスコミのライトを、あびていたからというわけではない。広場を自分達が創り出しているのだという自信と喜びがあった。そこには反戦フォークの歌集やさまざまなガリ版ジャーナルが新しいコミュニケーションの空間が創り出されつつあった。

同時に、第二、第三の「広場」から「通路」へが、くり返し起こっている。たとえば「ここは通路です。許可のない集会や演説は禁止します……」（大阪、梅田地下、あべの）「駅前広場の管理権は国鉄にある……」（鹿児島、西駅前）「公園は通路である……」（名古屋、テレビ塔下）

しかし、各地のフォーク・ゲリラは、さまざまな形で抵抗している。大阪では「我々は闘うぞ、最後まで闘うぞー」のシュプレヒコール絶叫型の抵抗。目ぬき通りを、フォークを歌いながらいったり来たりする、いわば盛り場の流し型の抵抗をするのは、仙台、香当台公園のグループ。鹿児島では、広場を創り出すために駅長に話し合いを求め続け、逃げる駅長に抗議して走り込みまでした。

り出した東京フォーク・ゲリラはどうしているのだろうか。起訴されている小黒弘君は、こう語る。「ぼくたちは、西口広場以降、渋谷ハチ公前広場、新宿歌舞伎町と転々とし、どこにいても、機動隊に弾圧され、いまでは新宿中央公園で毎週土曜日にやっています。西口でやっていたところにくらべれば、五、六十人のチヨボイ集会ですがね。それでも私服や機動隊がウロウロしていますよ。高校や大学の文化祭に乗り込んでいったっていますよ。十二月十一日からの「広場」裁判には、みなさんぜひきてください。広場とは何か、を明らかにしながら、我々の行動の正当性を明らかにしてゆきたいと思っています。以前よりフォークの参加者は減りましたが、その人達は、運動から脱落したのではなく、さまざまな闘争に散っていったのだと思います。数をどんなに集めても、そこから自発的に行動をはじめ

人間が生まれないかぎり、それこそ壮大なゼロではないでしょう。自発的に行動をはじめ人間が生まれてくるまで、街へでつづけるつもりです。」

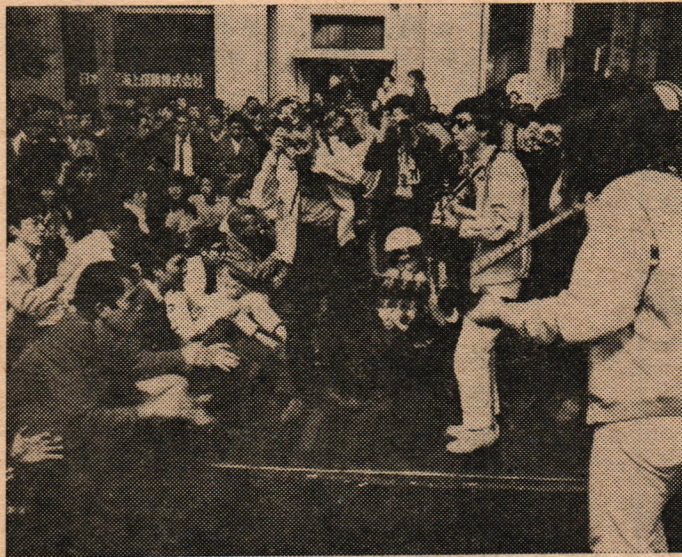
すぐにでも行動できる。あなたが、のすばやい、行動の実践が「広場」を「反戦運動」を創り出してゆくのだ。

東京フォーク・ゲリラ事務所
東京都世田谷区玉川等々力
三三七四 青灯舎内
TEL(〇三) 702-1847 四

◇「反戦フォーク」の歌集をお求めになる方は、百三十円以上のカンパ（送料含む）をそえて、東京フォーク・ゲリラの事務所までお申し込みください。

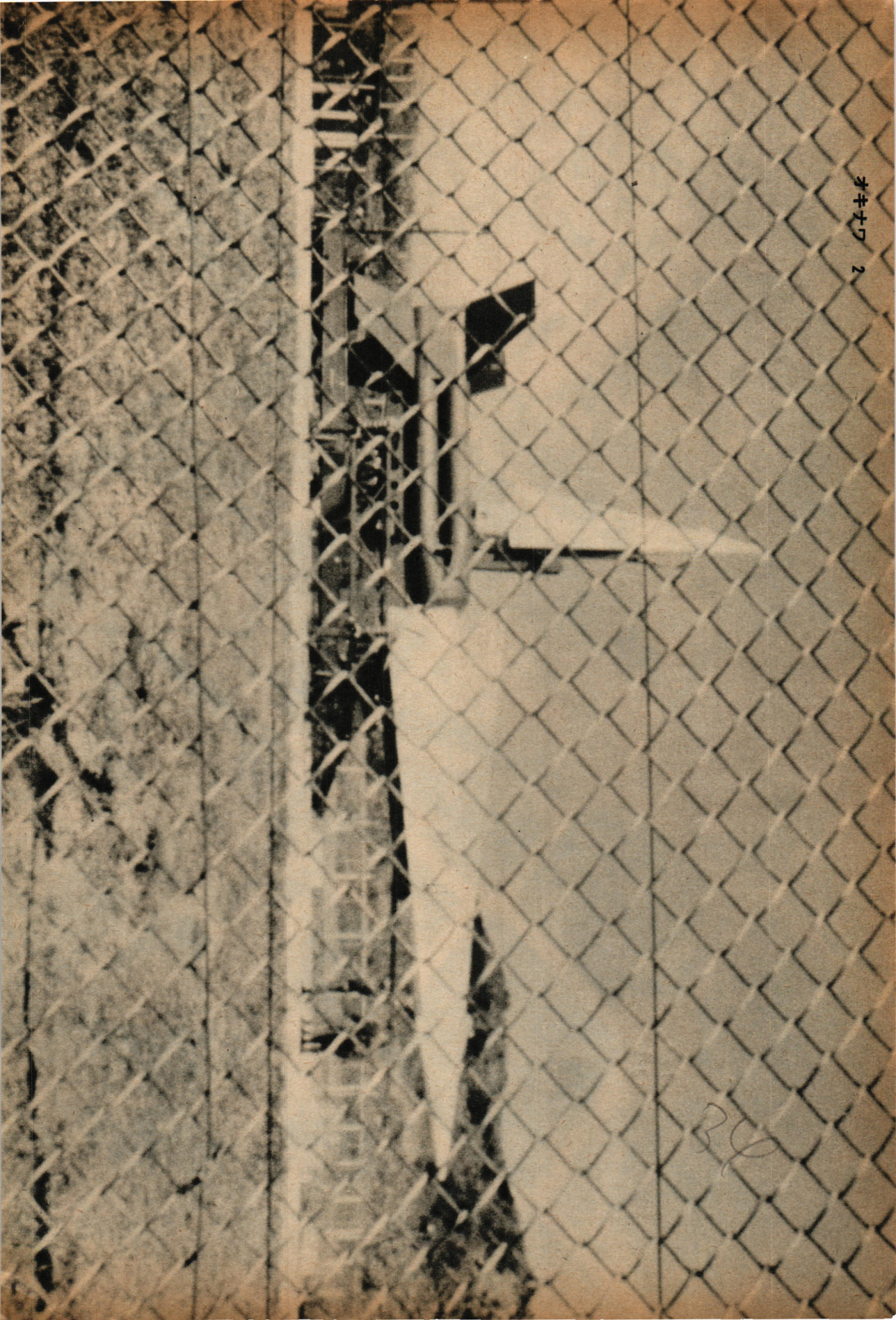
しかし今、東京・大阪のフォーク・ゲリラが、反戦フォーク・キャラバン等で全国各地にまいた種は、芽をだしつつある。札幌の大通り公園、新潟の県民会館前広場、高松の瓦町駅前広場、そして飛騨高山や、会津、福岡、大牟田、熊本、栃木、鹿

ところまで、「西口広場」を創

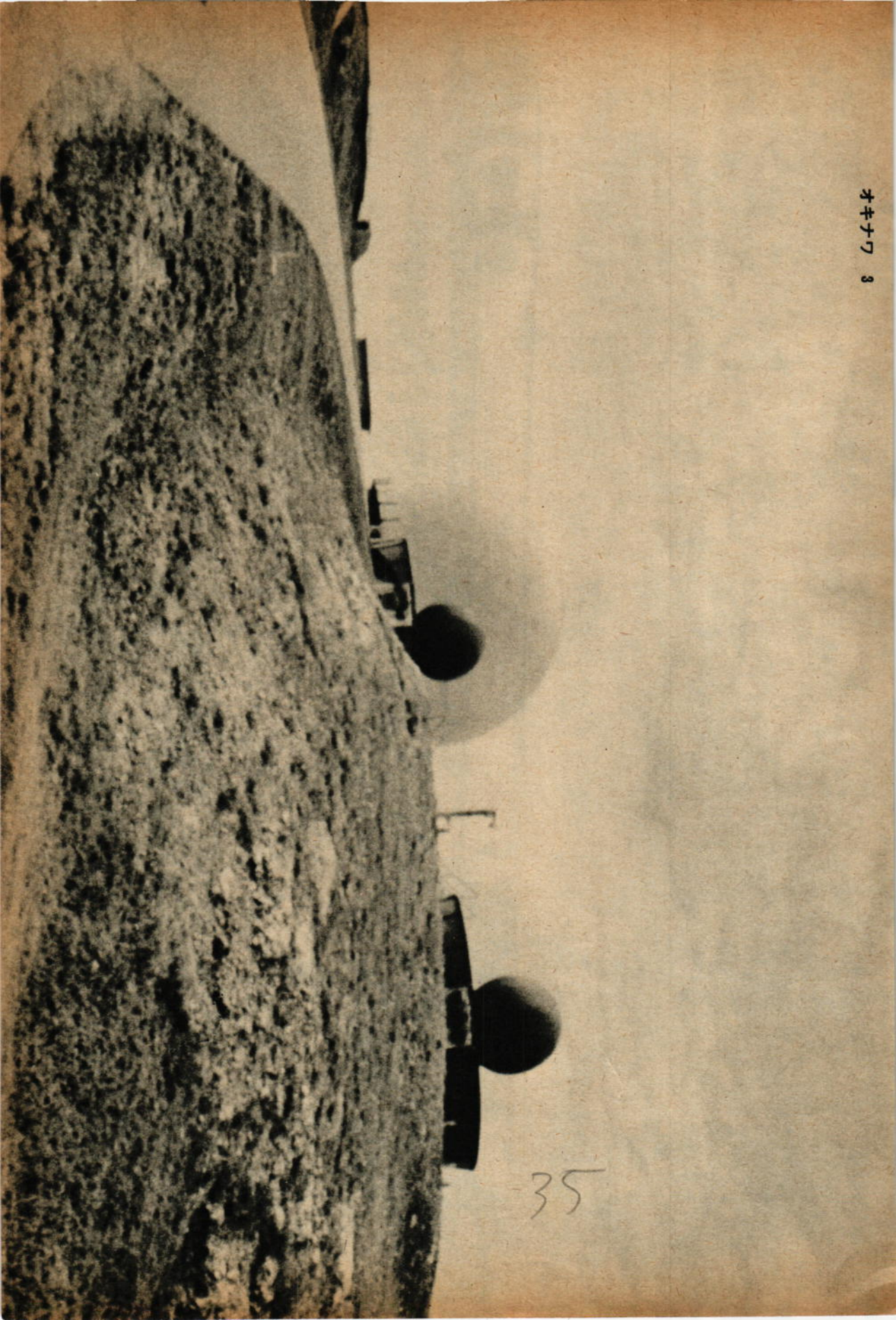


10.21 夜新宿のフォーク・ゲリラ

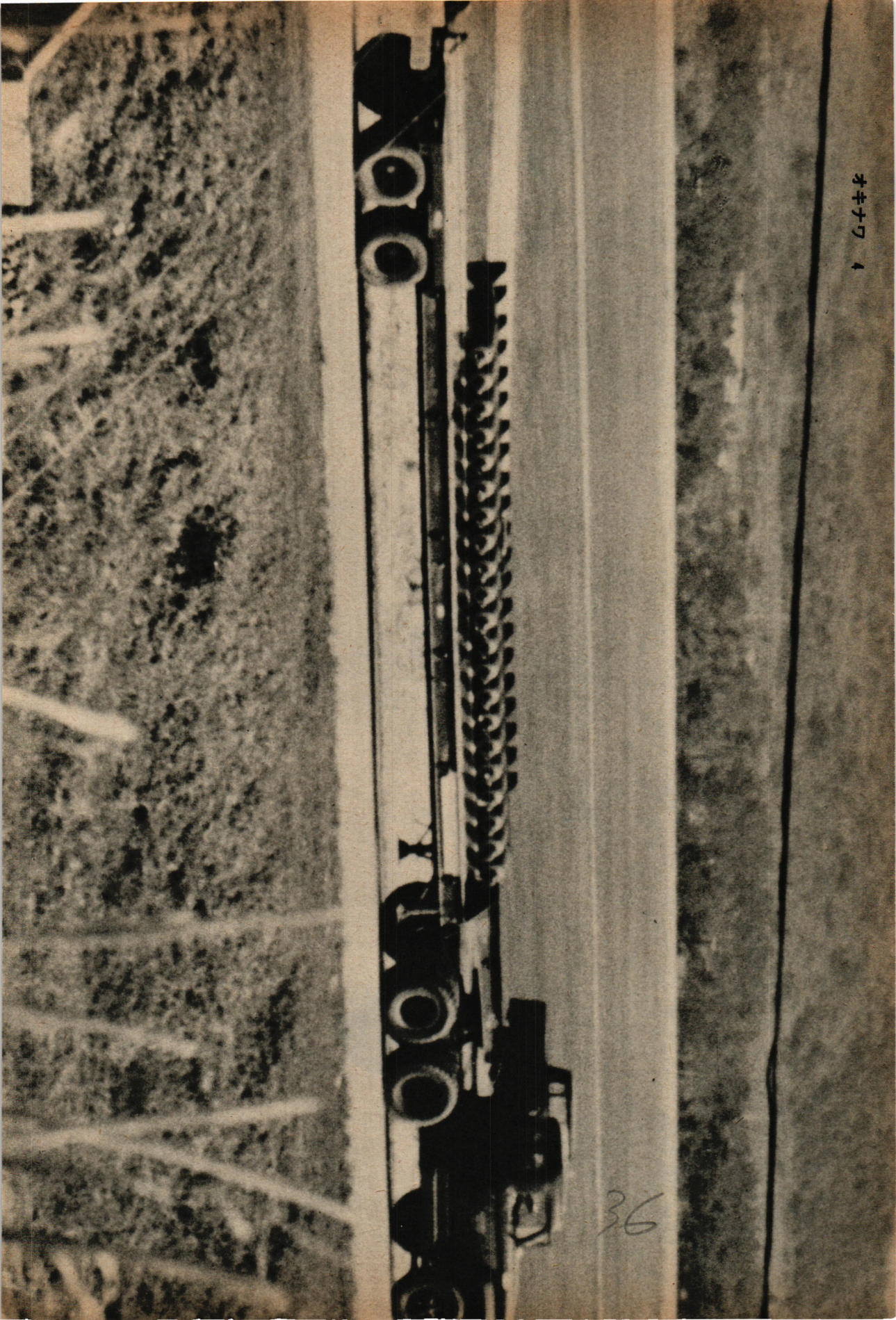


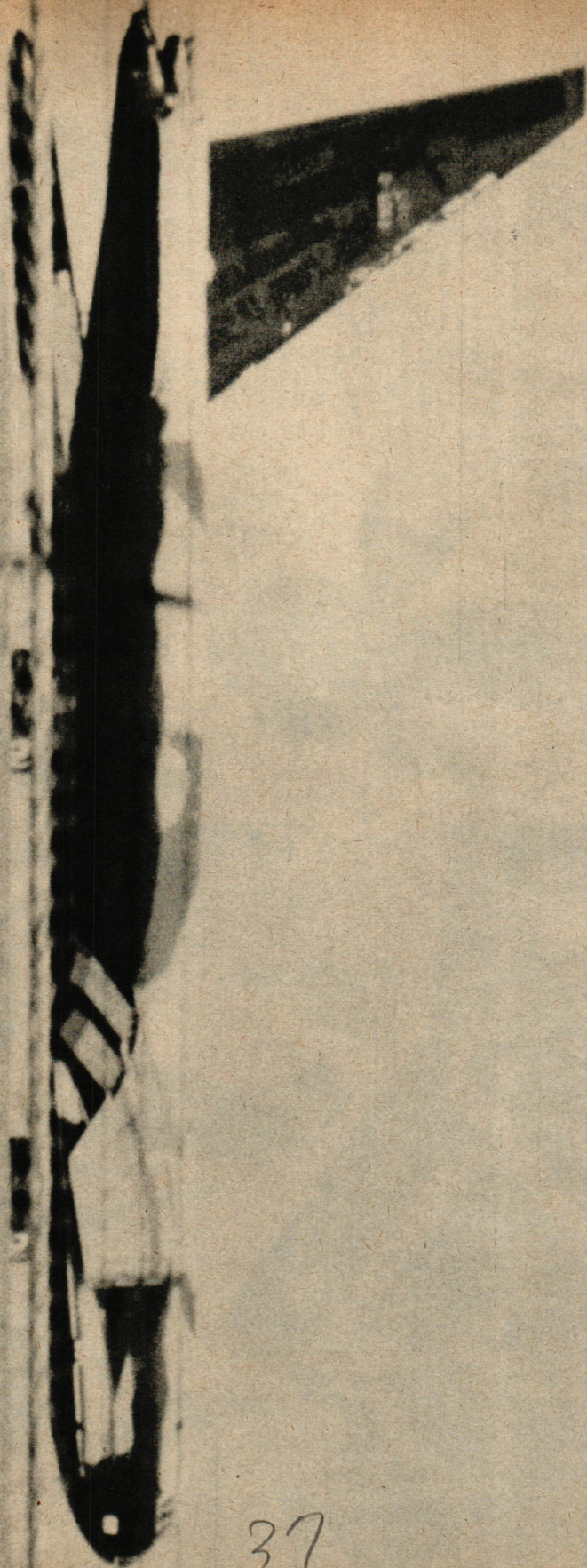


30



35





WE GOT THE

オキナワ 6

Journal of the Second Front International

ASIAN EDITION No1

FALL 69

FREE To GIs

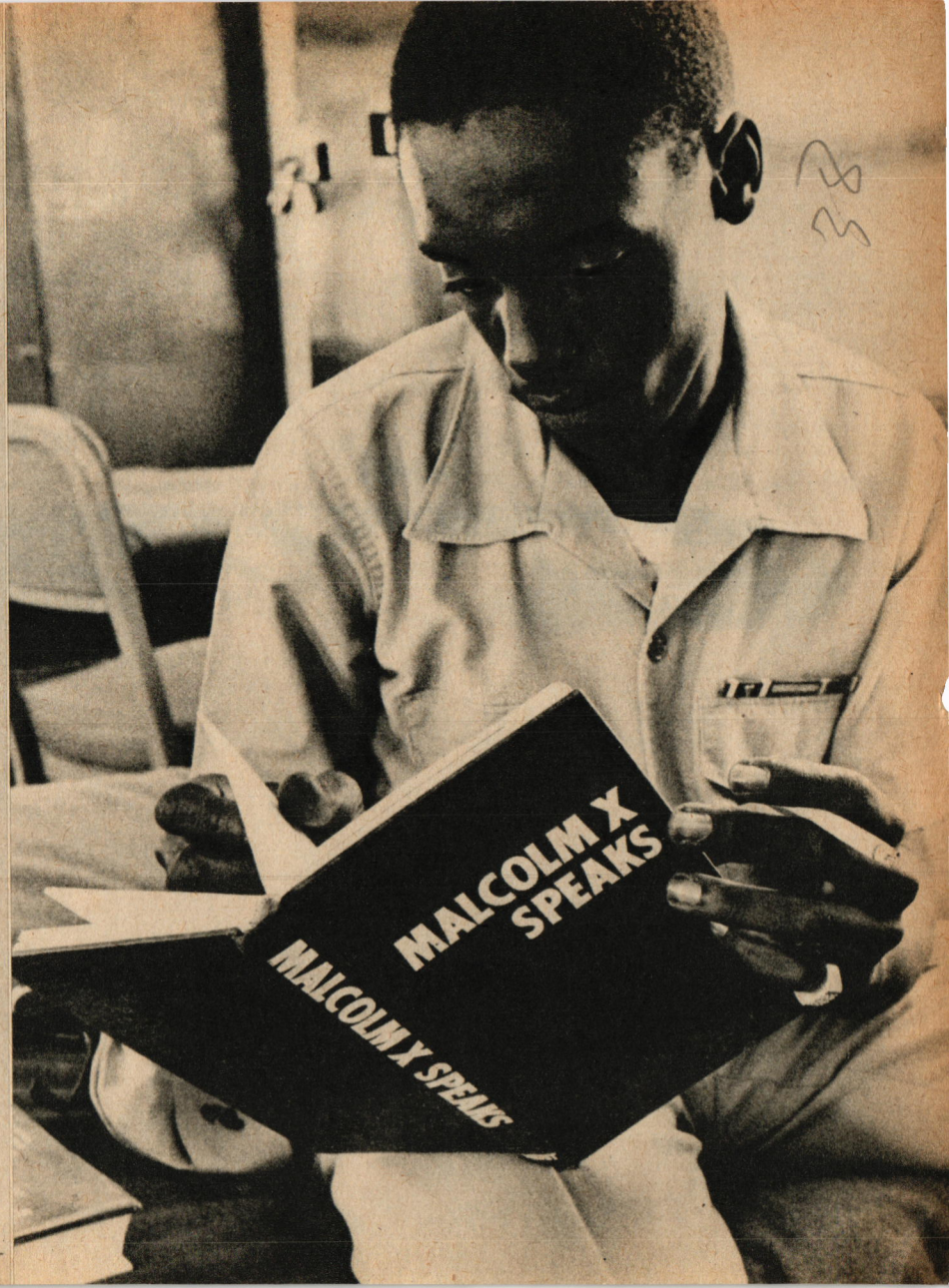
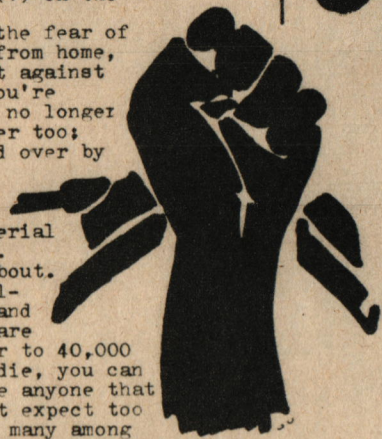
BRASS

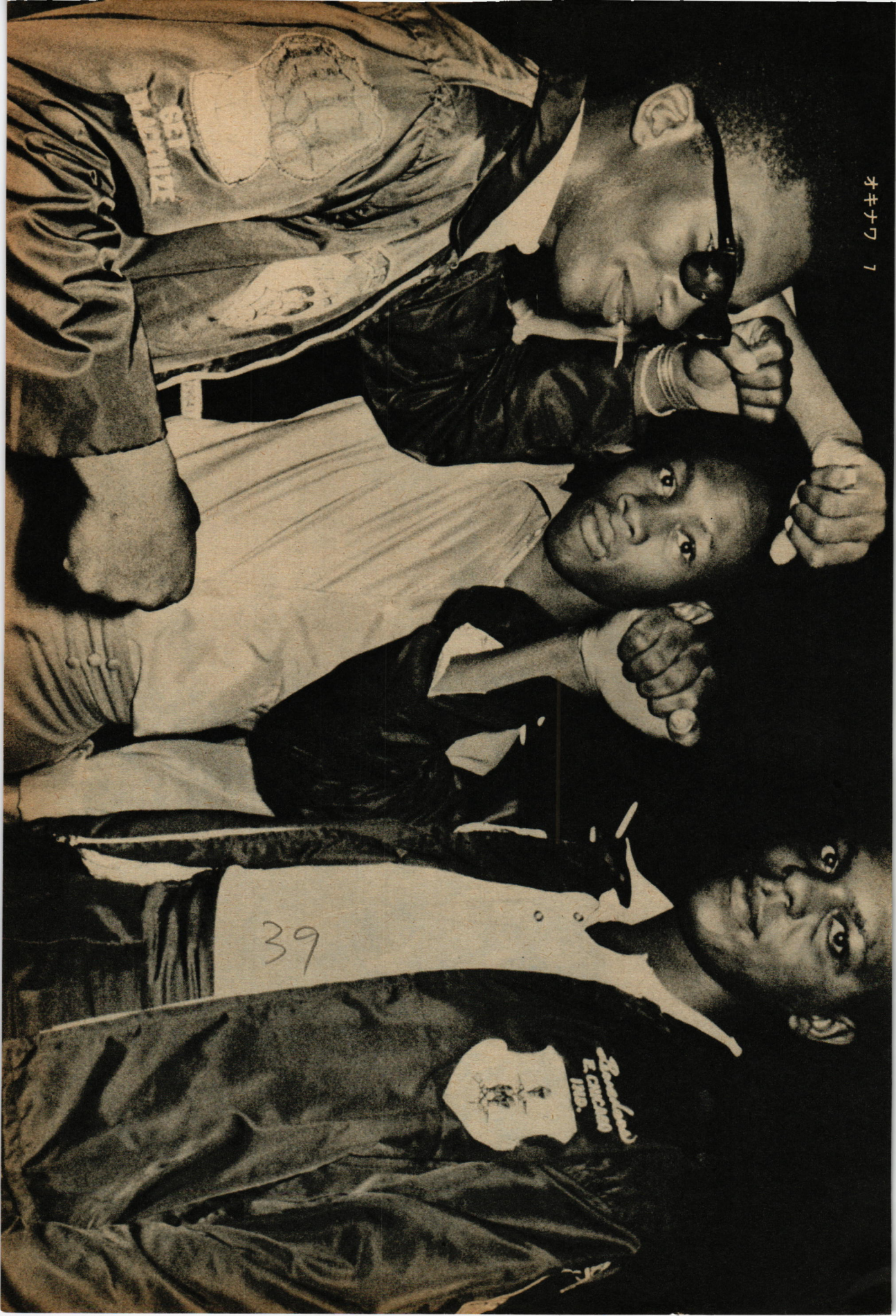
THIS IS THE FIRST ISSUE OF WE GOT THE BRASS -- PUT OUT BY G.I.'S, DESERTERS, AND RESISTERS IN EUROPE, UNITED BY OUR OPPOSITION TO THE MINDLESS WAR IN VIETNAM AND THE PAWN OF THAT WAR, THE U.S. ARMY. We are also united with the large number of G.I.'s in the States who have begun to say ETA: G.I.'s at every base are now uniting, finding out that the only way to fight the bullshit is to get together. This is their paper too -- the paper of the Presidio 27, the G.I.'s United Against the War at Fort Jackson, the Fort Hood 43, the American Deserters' Committees in Sweden, France, and Canada. And the G.I.'s in Japan who got sick and tired of occupying a country that hated their presence and deserted. And the countless men in Vietnam who died for something they didn't understand, and the many others who have seen that the war is not their war but the war of a handful of fat cats back home, and have acted by taking a permanent R&R in Japan (en route to Sweden).

WHAT UNITES US IS SIMPLE -- the unwillingness to kill and be killed in a war that makes others rich, that our parents pay for, and that neither the Vietnamese or the majority of the American people want. And the daily oppression of life in the army, taking orders from stupid lifers, learning the robot discipline that gets us prepared for life (?) on the outside.

BUT WHAT DIVIDES US IS STRONG TOO -- the fear of the stockade, the isolation, being so far from home, and the feeling that it's impossible to act against a monster the size of the U.S. army when you're alone. But that's no longer true. We are no longer alone. That is why this paper is your paper too: it is the paper of everyone who gets fucked over by the army and begins to fight back. What we can do is break down the army's news blackout of G.I.'s fighting back - in this issue we have concentrated on printing material from G.I. underground papers in the States. What you can do is give us more to write about.

ONE OTHER THING -- the brass keeps telling you that the people stateside who demand "End the war! Bring the troops home NOW!" are your enemy. If you believe that the answer to 40,000 guys dying in vain is to have 40,000 more die, you can probably dig their jive. We can't convince anyone that he's being fucked over (that's why we don't expect too many lifers to dig WE GOT THE BRASS). But many among us have been stationed in Nam, Korea, Japan. And we know that most guys are hip to the unending stream of lies from Washington and its owners, the corporations. Everyone knows the Paris talks are bullshit - yet guys get slaughtered "liberating" Hamburger Hill while Lodge and crew live it up in Paris. No more lies about victory, now just die to help the U.S. save face. We have said no to their bullshit - and begun to take control of our own lives. Join us!





標識には「注意していないと死ぬぞ」とある。
ちょうど一年前の11月19日、B52の爆発事故がおこった。そのとき、基地司令官は、報道陣に「ちょっとした交通事故のようなものだ」と言った。



全ページをあなたがつくる!!

■あなたが編集者です 安保をつぶす意志のある人すべてにこの雑誌は開放されています。安保・沖繩・朝鮮人問題・高校教育問題、あるいは権力の腐敗について、あなたの手持ちの情報のすべてを送ってください。

■あなたが書き手です 報道記事、人物紹介（各地で運動しているマジメでユカイな人物、毎号一頁、写真入り）、新日本案内（デモで日本をまわろうという、デモ情報と観光案内）、高校生のページ（毎号一頁以上）、デモ・ふあっしょん（デモには、いったいどんな服装が適当であるか、というオモシロイコラム）、それに、小説、ノン・フィクションを、毎号掲載します。また、フォーク・ソングの歌詞を毎号募り、いずみ・たく氏が作曲して裏表紙に発表し、全国に反安保フォークの渦をつくりまわす。あなたがライターになって原稿を送ってください。

■あなたがカメラマンです（「眼には眼を」参照）

■あなたがイラストレーターです

「週刊アンポ」の表紙はもとより、各本文のカット、マンガ（劇画を含む）、イラストなど、あなたが作ってください。栗津潔、横尾忠則の両氏に表紙、イラストについての協力をお願いしています。

■そして、あなたが運動のつくり手です あなたのところの運動の模様、行動のスケジュールの結果などを送ってください。「反安保・街へ」の欄に掲載し、この欄を全国の反安保運動のセンターにしたいと思っています。また、あなたが作ったビラ、パンフレットなどの資料を編集部まで送ってください。「週刊アンポ」の編集に役立たせてください。お願いします。

原稿のおくり先
東京都新宿区神楽坂六・四四、石井ビル、アンポ社あて。

（原稿には、かならず住所、氏名へふりがな、年齢、職業をお書きください。誌上匿名可。原稿は返却しませんのでコピーをとっておいってください）

創刊記念ケン賞大募集!!

あなたは、今、上の文章を読みました（まだなら、まず、上を読んで下さい）。あなたがたんに読者でないことはすでにおわかりのはずです。あなたが書かないかぎり、『週刊アンポ』は出ません。つづれます。それはあきら

かだ。

では、書いて下さい。創刊、いや、私たちの「人間の渦巻」の出版を記念して、特に小説、評論、記録（つまり「フィクション」と「ノン・フィクション」）のケン賞募集をします。小説は、原稿用紙四百字づつ二十枚以内。評論・記録は、三十枚以内。しめきりは、十二月

十日。

審査する人々は、大江健三郎、野間宏、高橋和巳、開高健、いいだもも、小松左京、久野収、真継伸彦、鶴見俊輔、小田実。これらの人々が集まり、みんなで原稿を読み、当選作を五編選びます。当選作は順次掲載しますが、選過程の討論

を誌上に発表する予定。

さて、ケン賞というからには、「賞品」がなくてはならない。『週刊アンポ』は誰が何を書いても、原稿料はみごとにゼロ。しかし、これは、創刊記念のケン賞だ。そこで、当選作の書き手五人に、十二月中の休日に（日時は追って決めます）東京都内、周辺のアメリカ軍の基地めぐりに招待することにした。自動車に乗って、あるいは歩いて、一日、基地の町の実態を自分の眼で見よう。見たあとで、ルポルタージュを書いていただく。これが賞品だ（東京までは来ていただくたい。宿泊は民宿。つまり、「人間の渦巻」のなかの誰かの家に泊まる。参加できない人には、残念だが、『週刊アンポ』を発行されているかぎり送る）。

ケン賞がすんだあと、書いてください。あなたが書かないかぎり、『週刊アンポ』は出ない。つぶれる。それはたしかだ。

小説・ノンフィクション募集

いかに死ぬべきか

松田 道雄

心臓移植についてのジャーナリズムの論議のなかに、私はしばしば引きだされた。新聞記者の諸君にしてみると、私は電話さえかければいつでも呼びだせる人間として便利であったのだろう。しかし、私のほうで呼びだしに応じたのには、ひとつの理由があった。

私はひとりの人間の死を、どこまでもその人間の私事としてまもりたかったのだ。

人間は、まったく理不尽に生をあたえられる。その生をどう生きるかについて自由意志をみとめられないとしたら、生は牢獄のようなものだ。

死ぬということは、目がさめたらとじこめられていた牢獄から、自分を解放することだ。そこからいつとびだすかは、理由なくして閉じこめられたものの自由でなくてはならぬ。どう生きるかということは、どう死ぬかということとを当然ふくむ。

「徳川禁令考」という江戸時代の法令や

判決令を集めた本があるが、これをひっくりかえしてみても、自殺しぞこなった罰する規定はない。もっとも相對死といつて情死をやるつもりで、一方が生きていると、生き残ったものは三日間さらしものになった上、非人の手下にさせられる罰則はある。

だが、首くくり仕損じたるものとか、身投げして水死せざりしものとかを罰した例はない。百姓町人が縊死したり、投身自殺したりする自由はあったと思わねばならぬ。

不自由なのは武士だ。切腹といつて、世界的に有名な武士の自殺はけつて自由でない。だいいち武士は腹を切つて、誰かに介錯をしたらう方法以外の死に方をゆるされてない。首をくくったり、葉をのんだりして死ぬことは、武士として恥ずべき死に方だ。切腹に一定のマナーがあり、介錯人が必要とすることは、切腹が私事でありえないということだ。

武士はその全生命をその主君に委譲してしまっているのだ。主君から禄をもらって終身雇用のサラリーマンになっている武士は、人間として完全に不自由なのだ。

主君の意志とちがった切腹をすると、家は断絶させられ、家族は食えなくなってしまう。戦力として自分を主君に売ってしまった武士は、泰平の時代には、いかに死ぬかが武士の生き方であった。この武士の生き方の不自由さを、ひとつの美しさとしてえがいたのは、森鷗外であった。

「興津弥五右衛門の遺書」で鷗外は、弥五右衛門の殉死を、弥五右衛門とその主君との人間関係の美しさとして読者になつとくさせた。主君の命令で長崎まで香にたく木を買いにいった弥五右衛門は、きわめて高価な香木をみつけた。同道した相役の横田清兵衛は、香木は武家にとって所詮あそびだから、最高級品でなくもうすこしやすいのを買うべきだと主張

した。そこで口論になり、あげくの果て弥五右衛門は清兵衛を切ってしまう。名香をたずさえて帰国した弥五右衛門は主君の戦力である武士を一人なくしたことをわびるつもりで切腹のゆるしを乞うた。主君は命令をよくもったのは武士としてりっぱだと、切腹をゆるさなかった。だからその主君が死んだとき、はじめて弥五右衛門は、遺書をのこして殉死する。

長崎からかえった弥五右衛門に主君のいったことは、きわめて意味がふかい。

「すべて功利の念を以て物を見候わば、世の中に尊き物はなくなるべし」主人と家来とをむすぶ倫理を功利の観点からみるべきでないというのだ。

鷗外は支配の倫理が功利を超越していることをしめすために、つづいてもうひとつ武士の切腹のタイミングをあつかった「阿部一族」をかいた。

先君の死にさいして殉死のゆるしをえ

切腹と心臓移植

られなかったので切腹しなかった阿部弥一右衛門が、あいつはなぜ死なぬのかという周囲の目にたえかねて切腹する。ところが新しい主君はこのタイミングのややおくれた弥一右衛門の死を他の殉死者と差別待遇する。弥一右衛門の長子は、差別を面目ないとして剃髪する。新君はそれを自分にたいする面あてと解して、絞首刑にする。のこった一族は、自分たちも安穩ではいられまいと感じ、阿部の邸にたてこもってしまう。これを反乱とみた主君は討手をだして全滅させる。さぐりあいはかりの陰湿な人間関係が主君と家来とのあいだにある。オープンな功利を求める近代的人間には耐えがたい。しかし一切の功利をはなれて、諦観、忠誠、勇氣、無欲という徳目だけをとりあげれば、彼らの死の方には美がある。

いして、自分の使命感をどんなにふかく感じていたかをしめすものだ。これらの作品は、武士の生き方、したがって死に方の美しさを古典的なものに仕上げている。ただ生きるために生きるということのくだらなさを、それは昂然と見下している。なにか有用なことのために生きるということは、この「死の美学」のまえには色あせてみえる。たった今でも死んでいいのなら死んでみせる。死のボタンを押してくれる主君に一切をゆだねきった諦観者の静かさ、鵬外はそれをえがいて成功している。明治天皇が七月になくなり、九月十三日に乃木大将が殉死した。興津弥五右衛門の遺書」は九月十八日に脱稿された。つづいて「阿部一族」が執筆される。鵬外は明治の体制が武士によってきずかれたことをもう一度確認したのだ。乃木大将の殉死を是認しただけでなく、大正になっても、日本の人民を統率していくであろう指導層に、武士的な生き方

忘れてはならぬことを警告したのだ。鵬外は「阿部一族」をかねてから三年してこんどは庶民の死を「高瀬舟」でとりあげる。極貧の織工の兄弟の弟が難治の病気にあって自殺する。自殺が一度には成功せず、苦しんでいるのを、兄が手だすけして死なせる。兄は目撃者の誤認で殺人犯として遠島になるが、ふつうの重罪犯人とちがって、遊山船にでもいったような顔をして、高瀬舟で送られていく。安楽死はゆるされるかという問題にふれているのだが、作品は極貧の重病者の自殺の失敗を成功させてやるのが、どうして悪でありえようという読後感をあたえる。

死は本人がえらぶべきことでなく、運命とか主君とかの大きい外からの力が決定すべきことだとかいうかんがえが、「興津弥五右衛門の遺書」から「高瀬舟」までつらぬいている。「興津弥五右衛門の遺書」や「阿部一族」や「高瀬舟」は、その美学の成功によって、多くの日本の支配層の心のなかに生きている。庶民の死は、本人の自由によるのでなく、支配者が決定するという思想である。それは、明治政府の思想だ。庶民は明治になるまでは、死ぬ自由だけはあった。もうどうせだめだから好きな酒をのましてくれ」と老父がいえば、倅は老父の自由意志を尊重して酒をのませた。ところが、明治になって事態はかわった。庶民にまで武士の生き方が強制されることになった。男は丈夫であればみんな兵隊にならなければならぬことになった。自分のからだは自分で自由に処分できない。それは戦力として大事にしなければならぬ。「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ」なければならぬ。百姓町人も武士とおなじに武器をとってたたかうようにきめられたということ。と、自由に死ねなくなったということだ。支配層は戦力を大事にしたから、「衛生思想」をひろめた。予防注射もするようになった。それが昭和になると「国民体力検査」というのをやって、弱い青年を

丈夫にする青年鍛練道場までつくった。

日中戦争からあとは、自殺は犯罪であった。応召をおそれて自殺した青年の死体は、ちょうど徳川時代の相対死をした人間のようにさらしものになった。死は私事であることをゆるめられなくなったのだ。

私が「心臓移植」のいまのやり方に同意できないのは、私事である死をまたまた「公」の場所にひきずりだしそうな気配を感じるからだ。

死を私事たらしめたいのは、めいめい自分の好きなような仕方です。グッドバイしたいからである。家族と静かに、何気なく別れた人もあるだろう。また、多少芝居がかった、遺言などしたい人もあるだろう。また、まったく誰にもあいたくない人もあるだろう。

死の決定にいたるまでは生である。生であるなら、それは生きる当人の自由である。意識がなくなってもまだ死ぬ時期においては、臨終は家族の私事だ。はでに泣きたい家族は泣いてもいいし、医者をとっつかまえて、矢つぎばやに注射をさせてもいい。

とにかく、死の前後の主役は本人が、意識のなくなったときは家族である。ここには第三者の介入をゆるさない。

ところが、「心臓移植」となると、第三者の介入がある。心臓外科を得意としている病院にたまたまかっつきこまれた重体の青年の場合、その心臓が、すでに入

院中の心臓病の患者にすぐかえ可能と診断されるともう死は私事でありえなくなる。

「医学の進歩のために心臓を提供してほしい」とか、

「もう助かる見込みはないから、せめて他人の生命をたすけるために、最後の社会奉仕をしてはどうか」とかすめられる。もちろん、本人の意識がなくなったところで家族にもちかけられる話だから、本人の知らないことだ。

しかし、家族としては私事の臨終をもてなくなってしまう。

もう助かる見込みがないという「脳死」がはたして「生きのいい心臓」と共存しうるものか、あるいは拒絶反応をとりのぞく方法がまだみつかっていないのに移植をするのは人体実験でないか、というような医学的な問題は、あえて問わないことにしよう。

だが、個人の死を私事でなく「科学の進歩」とか「社会奉仕」とかにむすびつける思想には賛成できない。

人は何ものかのために生きねばならぬという思想を、私は信用しない。個人の死の自由をみとめない人生論は何らかの意味で「殺人論」になる。

もちろん、めいめいの人間は何らかのために生きている。しかし、自分が何のために生きているかをきめられるのは自分以上かない。

社会保障の根拠は生きているから生き

る権利があるということの確認だと小田実氏がいったが、まったくその通りだ。はたらかざる者食うべからずという思想は安全でない。支配者が人民を殺そうと思えば、人民をはたらない状況におきさえすればいいからだ。

自分こそは支配者だと思っていると、自分ののはたらく場所をとりあげられたとき、自分の殺されるのを是とせねばならぬ。ソ連の粛清がそうだった。オールド・ボルシェヴィキはみずからを、勝利し、支配階級となったプロレタリアートの一人だと思ったから、自己がはたらく場所を失ったとき、自分の理不尽な死を是認しなければならなくなった。

生きる権利さえあたえられていたら、はたらかざる者もはたらく場をみつければチャンスはある。

「心臓移植」にたくさんのファンがあつて自分も移植のため、「脳死」にいたつたら心臓を提供しようとして。その人たちの善意と進歩への信頼をとがめる気はない。しかし、若い人たちがそういう気になったのには、もっと別の理由がある。

それは、死を生の一部として感じる機会を多くのわかい人たちが失ってしまったことだ。彼らにとって死は人間の生の一部ではなしにすでに生をおえてしまった死体なのだ。

彼らにとって死の問題は、いかに死体を処理すべきかに集中する。屍臭をどう

するかとか、葬儀屋をどこからつれてくるかということに気にする。

死んでいく過程にある本人の生からの視点がはずされる。

この見方は、死を私事とするかんがえからはずれる。死を死体の処理からかんがえるので、心臓を寄付しようということになるのだ。それが葬式公社にとどまっているあいだはいいが、やがて臨終公社になり、移植公社になっていく危険がある。

死は個人にとって生きる自由の一部としてどこまでも私事でなくてはならぬ。死を死体としてしかかんがえられなくなったのには、それなりの理由がある。

いまのわかい世代には、若年者が死んでいくところをみる機会がない。結核で青年が死ぬところをみなくなった。年々二十万をこす青年が結核で死ぬ時代は、もうとくにすんでしまった。

幼い弟や妹が赤痢だの、ジフテリアだので死ぬ姿も知らない。

このところ戦後に生まれた人間と、戦前をよく知っている人間との死にたいする感覚のちがいが発する。

わかい生命に、そこから強制される死が、本人にとってどんなに悲劇的なたかいであるかをみているか、みていないかである。

そのたたいが何と個性的であったとか。名誉ある戦病死として公的に死ねばならぬ戦病兵において、その死は公

にたいする私の最後の抵抗としてたたか
われた。

かぎられたわずかの面会時間に、家族
はやせ細った病人の手をつよく握りしめ
ていた。多くの家族は、重体の通知をう
けとってきたときは、もう間にあわなか
った。その間、死の近接を感じた重症者
は、家族の名を呼んだ。

部隊をつぎとぎと転属させられて故郷
からあまりにも遠く引きはなされた病人
は、家族の見舞を断念して、小鳥を飼っ
ていた。自分で餌がやれなくなるほど弱
ると鳥を逃がした。

戦後の世代は、そういう死を知らな
い。彼らの知っている死は老人の死だ。
老人が長命するようになったことと、げ
んざい老人が安住の地をもたぬことと
が、老人の死をいかにも当然なことよ
うに思わせる。

「あのやっかいな死にぞこないに、も
うこれで仕送りをしなくてもよくなっ
た」

というようなことをきかされたら、死
んでいく人間に共感をもてなくなっ
ても、やむをえない。

わかい世代の知っている死は、公的な
死しかない。原爆のあとの焼野原になっ
たところに、物体のようにころがってい
る死体は、戦争の残虐という公的なもの
の表現だ。

アウスシュウィッツの犠牲者の山とつ
まれた死体のマスは、死んでいくひとり

ひとりの人間の痛々しさや悲しみを圧倒
してしまふ。

友人が交通事故で死ぬこともないでは
ない。だが、その死は瞬間で、死ぬまで
生きる時間がない。事故ときいてかけつ
けてみれば、もう死体となっている。そ
の友人が死にむかってどう生きたかを知
るよしもない。

死が、知的生産力のある若年者によっ
て死なれない、あるいは生きられないこ
ととが、死を正面からかんがえさせない。
そのことが、死を死の商人たちだけに
りあつかわせることになる。

死を私事としてまもることをしないで
いると、いかに死ぬべきかという私の問
題が、いかに殺すべきかという公の問題
にすりかえられる。

明治、大正の日本人民はお人よしだっ
たから、支配者たちのいかに殺すべきか
という政策をいかに生くべきかという教
訓としてうけとった。自分で自分の生き
方をきめるのを罪悪と思うように飼いな
らされてきた。

戦後、憲法は支配者たちに、人民の生
命を戦力として消費することだけはしな
いと約束させた。人民は死ぬときはタタ
ミのうえで死ぬることになった。ところ
が、大学だとか、大病院だとかの権力の
中心にちかいところにいる人間が、こん
どは科学と進歩の名において、人民の自
分らしい生き方のための部分に干渉して
くる。

医者が脳死と診断したら、その人間の
心臓はきりとられて他人に移植される候
補者になる。近親が科学と進歩に敬意を
表したら、本人がどう思っているかと無
関係に、生きていた心臓がぬきとられる。
それは鵜飼のような高い地位と見識の
ある医者が「高瀬舟」にでてくる流刑人
の弟に、おまえのような貧乏人で、その
うえ重病にかかった人間は早く楽に死ん
だほうがいいと思うのとよく似ている。

公平な医学的な立場のようにみえるけ
れども、本人とは無縁な人間が、個人の
生き方に介入するのだ。

安楽死にしても、心臓移植にしても、
それが、死んでいく本人、心臓をやるう
という本人の自由意志でなければならぬ。
自分には不用になった臓器を他人の用
に供することに反対するつもりはない。
そうしなかったらするがいい。五体そろ
って焼かれたという美学に固執したけ
れば固執していい。

医療技術の進歩が、医療を巨大化し、
そのなかでの医者对患者の人間関係を希
薄にしていく。医者は医者のペースで、
医療という名の研究や経営をすすめてい
く。

だが、しかつめらしい顔をした先生た
ちが委員会をつくって、臓器移植法など
という法律ができてしまうと、青年が急
死したら心臓を提供するのは、当然だと
いう空気がおこりそうだ。

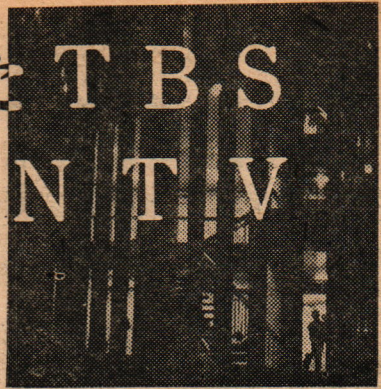
そこに組みこまれた患者の人間として
の意志は医者によって理解されない。患
者が死を観念して、どんなに自分らしく
死にたいと思っても、医者は患者のひと
りひとりの人間を理解する余裕はない。

かつて国家が人民に公共の死を強制し
たように、げんざいは医療制度が治療の
名において個人に公共の死を強制する。
死のプライバシーを守ろうとする最大
の抵抗は自殺だ。つぎに自殺についてか
んがえてみることにしたい。

（以下次号）

針ねずみと化したTBS 鳥かごの中のNTV

石渡 信

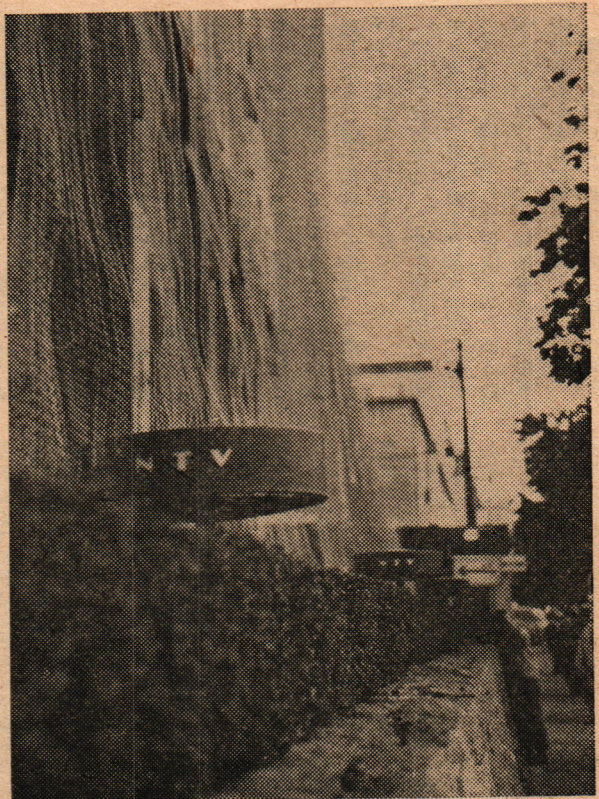


市民 このあいだTBSの前を歩いて驚いた。頑丈な鉄のバリケードを作ってガンガン工事を行っている。なんだねえりや。

放送労働者 まったくこっちが気恥ずかしくなってしまうようなものだが、もちろん七〇年安保のゲバ対策さ。自動式のシャッターを張りめぐらし、それができないところは巨大な鉄格子。仕事にさしかえる程の経費節減運動をこっちは迫っていて、それで浮くのは年間七千八百万円。ところが、シャッターの総工費はなんと一億円だ。やはりシャッター付きのNHK放送センターとか、早くからコンクリートの「城壁」をめぐらしたフジとか、どこも似たりよったりだが、身も心も権力に許した放送会社としては、物理的企業防衛体制も必要になろうというもんだ。ヤマシきの現われだよ。

市民 そういえば一〇・二一のとき、NHKが学生に侵入された。建物ばかりでなく、中でも非常時の訓練かなにかやっているのかね。

労働者 やってるやってる。だいたいどの民放でも、管理職ばかりやたら多いのが目につく。これは、管理体制の強化のためもあるが、スト対策要員がきわめて多いんだな。たとえばTBSなら、社員千五百のうち管理職はざっと四百。三日や四日のストをやったって、悠々と放送が出るわけだ。ところが、このスト対策要員が、最近「ゲバ対策要員」み



たいになってきた。一〇・二一のときなんかTBSでは、この管理職たちがついに白ヘルで武装して、局舎内をパトロールして歩くというありさまだ。

市民 ヘ、まさに自主防衛だね。

労働者 数は多いしネ、堂々たるもんだよ。

市民 ツヨいのかね。(笑)

労働者 (苦笑)まア、ゴルフで鍛えてある程度だろうが、いざとなったら機動隊を呼ぶだろうネ。しかし、自衛戦力としても相当なものだな。TBSじゃ、ついでにせんだつての話だが、専属劇団員の明石一さんという人が、「劇団を廃止するに当って正社員にする」という約束を突

然会社から破棄されて、死装束で局舎内坐り込みの無期限ハンストに入った。この明石さんの闘争を支援するんで、九月九日の夕方マスコミ反戦を中心にした労働者五十人ばかりが、正面玄関前で抗議集会を開いたわけだ。ところが実に、それに倍する百人もの管理職部隊が、ワッショイワッショイと、掛け声もろともマスコミ反戦のヘルメット部隊を、表通りに押し出しちまった。(笑)

評論家 その明石闘争といえば、たしか労組は現在裁判闘争に……。

労働者 闘争なんてもんじゃないよ。組合員の目の届かない法廷に囲い込んだんといっけほしいね。

市民 組合は、明石さんの首切り問題を裁判闘争に持ち込む前に、何にもしなかったのかね。

労働者 最初、組合は、明石さんのハンストを「山ネコストだ、戦術に問題がある」なんて言って、冷たい態度だったな。だが僕には、明石さんが、会社の一方的な首切り宣告に抗議して、一労働者が闘えるギリギリの方法、つまり、おのれの肉体を権力の前にさらすという方法をとった気持がよくわかる気がする。要するに組合はハンストに批判的だったけれど、ハンスト現場には、だんだん組合員たちが大勢集まってきた。一般組合員の中から、明石さんのハンストに強く突

き動かされる部分が出てきたんだ。明石さんの生命がけの闘いで、ここまで闘争が盛り上がりから、ようやく、組合は時限ストをやリ、希望者を募集して、リレー・ハンストをやった。明石さんの首切りは、いわば合理化の典型なのだから、組合としては、もっと全力をあげて徹底的に闘ってほしかったと、僕は思うね。

市民 明石さんのハンストの現場に集まってきた、ショックを受けた一般組合員たち自身はどうした。

労働者 「明石さんは今まさに、資本の手によって殺されようとしている。一方この自分は日常、その資本を維持する

ために働いている。それは明石さんを殺す行為の共犯者ではないか——」と感じる人がふえてきた。とにかくTBSで、こういうふうな下部から闘う意欲が盛り上がりってきたことは、例の成田事件—取材中農家の主婦とプラカードを車に積んだのが問題化した、あれをきっかけにした「TBS闘争」くらい絶えてなかったことで、日ごろ沈滞に悩む労組としても、盛り返しチャンスでもあった。

評論家 なるほど、その久々の盛り上がりというのは、あなたがいつも言っている、番組はもはや会社のもので自分のものではないという状況とか、管理体制ばかりやたら強化されるとか、そういうことのウラミツラミといった……。

労働者 それもたしかにあるね。ふだんは抑圧されながら、やはり日常的には一種の幻想に閉じ込められているわけだろう。放送を出していくことには、やはり何がしかの社会的責任があるとか、ハレンチ番組を逆手にとって、まだ自分なりに何かやれるとか……多かれ少なかれ、誰の胸のうちにもあることだが。

評論家 ところが、明石さんの肉体を賭けたハンストによって、その幻想にふと亀裂を生じ、資本とおのれのかかわりの深淵をかいま見た、というわけだな。

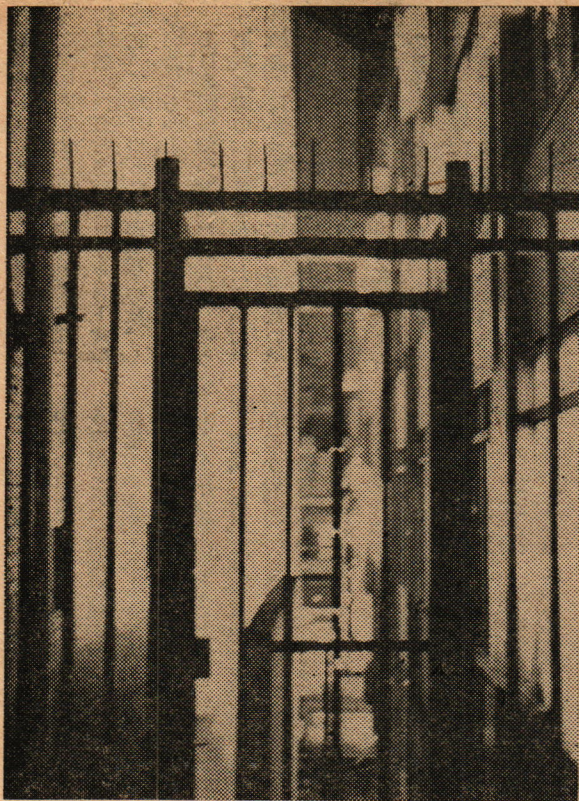
労働者 組合員全体からすれば、一、二割ってところだろうがね。とにかく、そうした明石さんへの加害者意識に基づく盛り上がりだから、まあ必然的に、無期限

ストをやる以外、明石さんと連帯する道はない、という声があがったんだな。ところが、その形勢を見て、組合がまた慌て出した。統一と団結を破壊するとか、地道に粘り強く闘おうとか、ハネ上がりは許さないととか、さんさん例の逃げ口上の末に、「これはトロツキストの策謀だ」とくる。

市民 そのあげく、闘争は裁判に閉い込まれたというわけだな。

労働者 組合なんか相手にしないで、下部の盛り上がりだった部分を職場共同組織していこう、という努力も内部にあったようだが、明石さんにドクターストップがかかり、病院へ送り込まれて彼が目の前から消え去ると、職場の熱意もありありとしぼんでいったようだ。

評論家 トロツキスト攻撃といえば、民放労連は今年一月の大会で、きわめて強硬なトロツキスト排除の特別闘争方針を決めたし、「その後も民放労連は、第二十五回定期大会（一九六八年八月）以来、右の分裂攻撃とあわせて「左」（カッcock）の分裂策動との闘いの重要性を指摘し、「三派」「革マル」「反戦青年委員会」「マスコミ反戦」などの団体は、統一の破壊者であり、共同闘争を排除すべきであることを明らかにしてきた」などという「討論資料」を組合員に配っている。とうとうベ平連まで、反共トロツキスト集団にされてしまったが……。



市民 お前たちの中に魔女がいる、と
いって狩り出させる。中世的恫喝だな。

評論家 民放労連がトロツキスト攻撃
を表立ってやり出したのが去年の秋。し
かし実際はもっと前からマークしてた
な。TBS闘争がつぶれた背景に、そ
ういう民放労連の意向はなかったのかね。

労働者 なかったとは言切れない。

ちようどあの闘争が一番盛り上がった
た、あれは去年四月二十四日だったか、
徹夜ストの中でやった「我らにとって今
放送の自由とは何か」という、社外参
加者も加えた徹夜ティーチ・イン。それが

途中、執行部によって突如打ち切られた
のは、社外参加者の中に危険分子、つまり
トロツキストがいるという判断なんだ。

それ以来さ、闘争が尻すばみになってゆ
き、指導部と大衆の間にシコリができて
笛吹けどさっぱり踊らなくなったのは。

市民 ティーチ・インの論議そのもの
が、何か危険なおいででもしたというの
かね。

労働者 どうかな。まあ言われてみれ
ばこういうことだ。つまり、TBS側か
らの発言で目立ったのは、「成田事件に

関して加えられた政府自民党の圧力と、
それに屈した会社当局の圧力はけしから
ん。しかしながらわれわれの側が公正中

立の取材のルールを破って弾圧を招いた
ことは基本的に反省すべきだ。報道の自
由とは、決められたルールを守ってこそ
ありうる」といった立場が多いんだな。

一方これに対して社外席からは、「公正
中立とはそもそも何か、枠内の自由とい
う発想こそ、戦前戦後のマスコミを、常

に権力の走狗たらしめてきたものではな
いか」という、報道者のおかれた場その
ものを問う形で発言が出た。

市民 それが組合にとって危険だとい
うのかい。

労働者 結局組合は、ドタン場の十波

スト回避というやつで、決定的に組合員
の不信感を買ひながらホコをおさめ、以
後闘争は、処分の軽減要求という手続き
問題に矮小化されてしまった。

市民 放送の自由とは何か、放送労働
者とは何かという根本問題を、ついに組
合は担えなかったわけだな。

労働者 一方組合員のほうも、多少な
りともその問題提起にかかわろうとした
やつは「オレは挫折した」とかなんとか

言って引きこもってしまったんだが、し
かしその中から、闘争敗北の意味を問
返そうというグループが、自然発生的に
生き残ることになった。

市民 それでそのグループは、何かや
ることができたのかい。

労働者 「三里塚の夏」という映画、
千葉県警発行の黄色い取材腕章をつけた
商業ジャーナリストが、すべて成田の農

民に拒否されたあと、ただ一つ、農民側
に加担することによって撮影し続けた、
小川プロの……。それを代議員会決定で
上映に持ちこんだ一件とか、それから日

放労（NHK）長崎分会問題をめぐる組
合内部の論争……。

前者はまさに成田での、取材するもの
とされるものとのかわりを問い返す、
ということだったし、後者は状況の中
で、企業的日常の中で、放送労働者とは
何なのかを、根源的にとらえ返す問題提
起となるはずのものだった。

市民 日放労長崎分会というと、例の
……。

評論家 エンブラ佐世保入港のとき、
ペンとカメラを投げ捨てて、分会として
現地デモに参加した。「デモか取材か」

という鋭い問題提起だったわけだな。そ
んなことから不当配転問題と、それに対
する撤回闘争が起き、機動隊が入り、処

分が行なわれ、ついにはNHK当局と日
放労中央、それに総評まで乗り出して、
ガンジガラメに闘争を圧殺した。だがあ

の闘争は、まだ執拗に尾を引いている。
市民 取材するものとされるものの関

係でいえば、去年の八月だったか、読売
記者暴行事件というのがあった。まさに
公正・中立のあかしであるところの黄色

い監視庁発行腕章を「取材のルール」通
りに巻いた読売社会部の谷川某記者が、
東大の封鎖中の図書館に入って行って、

学生にナグられて直径三センチのタンコ
ブができたとか、できなかったとかいう
事件。あのおとき新聞労連は「谷川記者の
報道は真実だった。それをなぐる」とは、
報道の自由の侵害だ。暴力学生を取り締

れ」という声明を出したそうだが、どう
も新聞労連にせよ、民放労連にせよ、何
かあると「報道の自由を守れ」などと言
出すようだ。そのへんがフに落ちないん

だな、誰に向かって要求しているのか。
評論家 読売記者事件についていえば
谷川記者の書いた記事のどこが事実関係

に合致して、どこが違っていたというよ
うなことは、もはや問題ではないな。警

察の黄色い腕章を巻かなければ取材でき
ないということ自体、学生に対して、オ
レはオマエの敵だということに等しい。

だから、成田の農民がマスコミの取材を
拒否するのも当然だし、だいたい金嬉老
事件のときにゃ、NHKの腕章巻いたオ

マワリが取材陣にまぎれて逮捕したじゃ
ないか。しかも一緒に金嬉老を押さ
えつけた取材記者がいたとはね。それ

が取材のルールかい。
労働者 谷川記者とはまた逆のケース
もある。これは今年一月、東大で機動隊

を導入したとき、NETの味岡君という
報道部員が、テレビニュースの放送の中
で電話レポートをやって「学生の投石に

対して機動隊も牛乳ビンを投げました」
と言ったわけだな。ところが監視庁から
NETに「その機動隊員は何機の中隊

の何という隊員か」といってきた。それ
がもとで味岡君は五月、報道部から運動
部へ配転を命じられた。
市民 で、組合は？
労働者 当然、不当配転反対闘争に立

ち上った。ところがそのときのNET労働組内の反応も、成田のときのTBSと似たりよったりなんだ。「味岡君は東大記者クラブに入っただけで、不慣れであった。それというのもNETの取材体制が弱体だからであり、不慣れな記者にレポートをやらせたのは局の責任。よって不当配転であり、爾後こうした事態が起きないよう、取材体制の強化を要求する」と……。

評論家 どうもわかつちやいない。取材体制を強化していただければ、今後かような誤ちは犯しませぬ、ということですむ問題か……。

労働者 TBS成田闘争の敗北の歴史をまたもや繰り返すのか、ということでNET、TBS、NTVなどの有志が集まって「放送労働者共闘会議」というのを作り、NET労働組に働きかけたり、労組員にピラをまいたり、「味岡不当配転の本質は何か」という टीーチ・インを開いたりした。ところがこれも突如として組合が、「共闘会議は当労組とは無関係」と言い出した。

市民 組合はどうしてこうも、自発的な運動をおさえようとするんだろう。組合官僚主義の枠からはみだすものは、頭から否定するんだな。

労働者 それで味岡配転問題も結局、裁判闘争ではないが、仲裁裁定に組合は持ちこんだ。ところがあっさりと「申立人は発令通り運動部にて勤務すべし……」

……

評論家 東大裁判を見てわからぬ裁判所というものは、現象を体制秩序に照らして裁くところだ。そもそも事の本質は、などといったも始まるものではない。せいぜい情状酌量……ということころ、つまりお情けだな。

労働者 もっとヘンな配転闘争もある。この六月、加恵雅子という新進の女流シナリオライターが、フジテレビ「土曜劇場」に「あした天気になあれ」という七回連続ドラマを書くことになった。あでもない、こうでもない、と、さんざんディレクターに注文をつけられ、やっと第一回分が完成したところで、いきなりそのディレクターから、一方的にキャンセルを申し渡された。そこで彼女は、自分の表現という労働を踏みにじられたとして、単身、フジテレビの会社を相手に損害賠償要求闘争に入り、あわせて、ディレクターとは何か、資本の奴隷にすぎないのか、と問いを発している。

ところで、ヘンな闘争といったのは、このキャンセル事件に関連して、局側は彼女を最初に推薦した別の二人のディレクターを、いらざることをしてくれただけで、最近千葉と名古屋の営業の出入りに配転しちまったんだ。そこでだよ、組合はなんとこう言っているわけだ。「視聴率競争のきびしい折から、有能なディレクターを二人も配転するのはケシからん。」

市民 (吹き出す) ますますわかつちやいない。経営者も労働者諸君も、いずれ劣らずハレンチだよ。

評論家 とにかくあれだな、不当弾圧反対とか、放送の反動化反対とか、決まり文句を並べるよりも、まず放送労働者とは何か、その労働者の組織とは何か、まずおのれの在りようを問うことが大事だな。それにしても何かい、多少は希望が持てる状況なのかね。

労働者 そりゃ厳しいよ。無気力、頹廢、出るクイは会社と組合と、両方寄ってたかって打たれるからな。六・一五とか一〇・一〇に組合員の中から参加するような気配が見えるともうたいへん、ウの目タカが目だ。NTVでは十月九日に「マスコミ反戦などによる一〇・一〇集会に参加しないよう呼びかけます。……また、警察から逮捕を含む刑事弾圧を受けるような最悪の事態になったとしても、原則として、保障しないという方針でのぞむことに決めました」と、書かれた組合ニュースが配られる始末。びっくりしたな、もう。まあしかし、さっきも言った、放送に携わっていることへの幻想を、模索しながらようやく突き抜けて、いろんな行為によって問いを発しているグループがあちこちにできていることは事実だ。それが日常性の中にドップリつかっている連中を、どこまで触発できるか、だろう。

市民 その意味では、ハレンチ・テレビ

ピなんてオレの知ったことかと、フテ腐れている連中のほうがまだしも期待できるかもしれない。資本と労働者とは共有するハレンチ・テレビの共同幻想を、どこまでブツ壊せるかだ。その点、ハレンチ状況が深まれば深まるほど、かえって希望は持てるよな。

今週のピラ・なんばあ・わん

——製作♥福岡ベ平連

通りすがりのあなたへ

死んだ兵士の残したものは
こわれた銃とゆがんだ地球
他には何も残せなかった
平和ひとつ残せなかった

谷川俊太郎

あなたは、昨年六月二日九大構内にファントムが墜落したとき「板付基地は半年の間に移転する」と佐藤首相が言ったのを覚えていますか。

あなたは、年々増強される自衛隊に沖縄の毒ガスに、国会の現状に、ふえて行く公害に、進んでゆく合理化に、不安を感じませんか。あなたは、いつの日か、子供らに孫たちに「お父さん、お母さんは、一九六九年秋、何をしたの？」と聞かれたとき、何と答えるつもりですか。

良識をかきまわせ



10・10集会のとき、僕の袍の中味を無理やりに点検した若い機動隊員は、ドラマの台本が出てきたのを見て、ニヤリと笑った。点検は直ぐ終わった。しかし、僕は終日、不愉快だった。反戦デモに参加して行動すること、テレビ番組の制作に加わるときは思想とが、現象としてはまるで一貫していないという苛ら立ちが、いつものように僕を襲ったのだ。僕はブツブツと口の中で唱えてみる。「B52に爆弾を積んで、ベトナムに飛んで行く途中で、突然、戦争に反対せよ、なんていわれても知るもんか」と。すると幾分ながら、自分が慰められる。わずかながら、これからの自分の番組制作主体としての座標が見えてきたような気がしてくるからだ。

この言葉は、悪名高いNTVの番組「裏番組をぶっとばせ」の担当ディレ

クターの言葉である。テレビにたずさわる人間ならば、一様に実感を共有できる名台詞だと僕は思う。まさしく、この言葉の中の苦渋を噛みしめ、そこから出発しなければ、テレビの世界にも全く展望がないと僕は思う。視聴率という怪物の制圧下に否応なく叩きこまれ、なおかつ、スポンサーや局のよくもあるものだと感心するほどの多量の禁止条項の下に置かれている僕たちの状況が集約されてその言葉の中にあるからだ。

まさしく彼は、視聴率を獲るという至上命令、視聴率という圧倒的な正義の貫徹のために、あらかじめそれを宣言して、堂々と空へ舞いあがったのだ。彼は成功した。少なくとも裏番組はぶっとび、局の上層部はヤンヤと喜んで乾杯をしたのだ。局がしばしば視聴率に關しているように番組が大衆の心をつかみ、大衆

は喜んだのだ。しかし、彼は美事に裏切られる。つまり「良識」と称する世論が、番組内容の批判を始めたのだ。そして、彼が致命的に傷ついたのは、局の上層部までが、担当者に注意する。少しやり過ぎではないか、といい始めたことだった。そこで彼は、飛行機にのりはすれ、爆弾の量にこだわったり、落したふりをして落さなかったり、落したくせに、より多く落した奴を白い目でみる有象無象の同僚たちの中途半端な加減に痛烈な皮肉を吐いてしまったのだ。少なくとも僕はそう感じた。

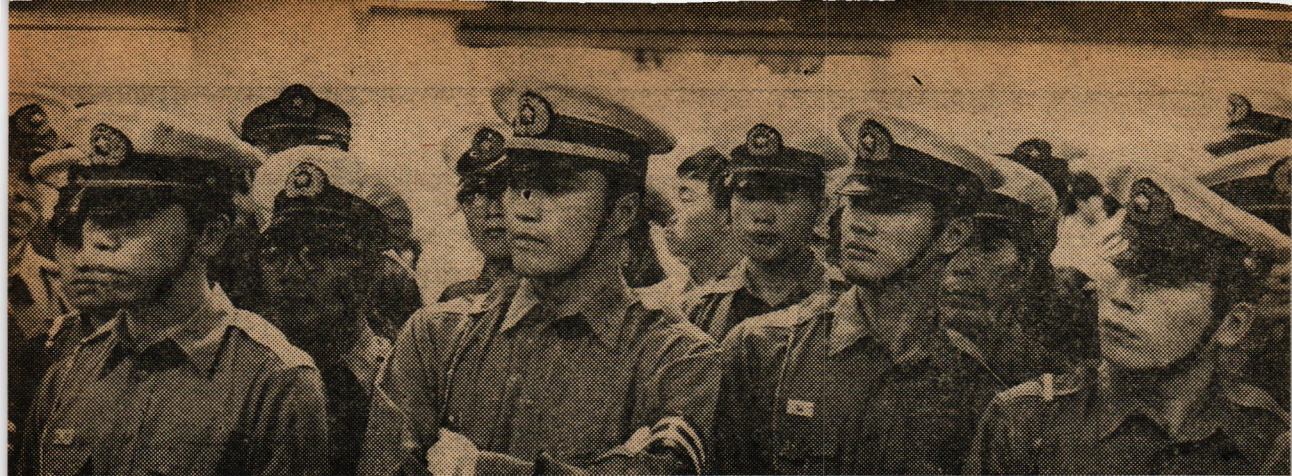
最近、テレビ番組は、俗悪化し、腐敗堕落したといわれているが、僕は、一人のテレビ局の中で働く労働者として、決して絶望していない。裏番組をぶっとばせ、が僕に無限の啓示を与えてくれる。片足を体制内にどっぴりとつけて、もう一本の足で、いい格好をつくらうのはやめようと思う。ヒロイックに視聴率存在を嘆き、体制や組織の不合理に憤懣をぶつけ、そのくせ、ちよつとずつの妥協を積み重ねてみたところで結局、何物も創出できないのではないかという本質的な問いに思い当る。ワースト番組のトップに選ばれたとはいえ、裏番組をぶっとばせ、は、視聴率という金科玉条を利用して、美事に茶の間に解放区を創出したのだ。何故なら、この番組の反響がもたらした結果は、少なくとも、テレ

ビ番組の制作者たちに、もちろん僕もふくめて、鮮烈に自分たちの座標の決定をせまってきたいるからだ。放送を国民の手に、といい、番組を良質なものと、とかく僕たちはいうが、はたして、それは真の勇氣に支えられて実行されているのだろうか？ 多くの理由を並べて、もはや、戦術段階でしかものを考えられなくなってしまっているのではなからうか？ 視聴率が高いがゆえに、局内では、表立った非難もうけないままに続いているこの番組は、続く限り、そうした本質的な問題を提起してゆくのだ。

大切なことは、労働組合の機関誌がやったように、綺麗ごとを並べて「悪質」を衝くことでは決していない筈だ。裏番組……をひとつの象徴的な突出した番組として評価して、厳しく、放送労働者の置かれている状況の総点検を始めるべきなのではないか。

僕は思う。全ての番組を、裏番組をぶっとばせ、に向かって統合しよう。そして、ともすれば「良識」という言葉を押したてて、弾圧介入の口実にして、る体制の愚鈍さに向かつて「大衆の支持」というまぎれもないデータをつき返し、その返事を訊こうと。そのことこそ「反戦」テーマをオブラートに包みすぎて、結局、なにもかも伝え得ないまま体裁を整えてしまうテレビ・ドラマよりは、数倍も価値を持つと信ずるからだ。

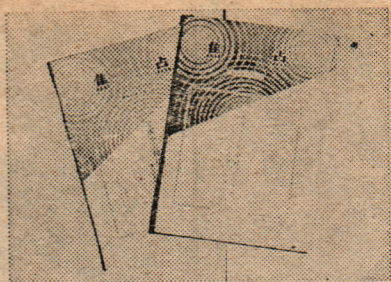
(NTV演出部・安藤謙・投稿)



おいでみなさん きいとくれ
と きいてもらう権利が われわれにはないのか
おいでみなさん きいとくれ
と ききにいく権利が われわれにはないのか
街頭でうたう権利もないのか
立ちどまる権利もないのか
立ちばなしする権利もないのか
ひとをまつ権利もないのか
なにがおこっているか のぞく権利もないのか
いつも あるかされていなくてはならないのか
ベルトコンベアーのように
おしっこにいく権利もないのか
機械の部品のように
やすむ権利もないのか
夜も電灯でてられタマゴをうみつづけさせら
れる
ニワトリのように
それぞれのハコにしきられて
青空をもつ権利がないのか
広場をもつ権利がないのか



『焦点』



「焦点」という刊行物がある。B5判、上質紙使用、本文十数頁。表紙に「警察庁」または「警察庁警備局」とあるのみで、奥付も定価も第三種郵便物認可もないノッペラボーなパンフレットだ。さては部内配布のマル秘文書かと思うと、表紙に麗々しく「本誌に掲載された記事は自由にお使いください」とうたっているの、むしろ積極的な宣伝文書なのだろう。よって、以下おおせの通り記事を自由に使用しつつ、紹介宣伝の労をとろうと存ずる。

「学園から職場へ広がる暴力」――暴力の排除法と秩序の維持」というのが、『焦点』本年三月十日号の表題である。一冊が一冊のレポートで、内容は、かの一九九一年東大安田講堂とカルチエ・ラタン闘争の前後の状況解説。文中の章ごとの見出しをみれば、おおよそ見当のつくしるものだ。

一、「集団暴力行動」がまん延する学園。
二、学園から職場へ広がる暴力。

三、「戦闘的集団へ」脱皮する高校生グループ。

すなわち、全国的な大学闘争の現況、反戦青年委員会・民青の動向・高校生組織の進捗を、ひたすら暴力の、浸透・波及・

として「焦点」をあて、ルルと説いておるのであります。（なお、巻末に代々木系・反代々木系十五派の一覧表があり、それぞれの系列・機関紙名・指導理念などが要領よくまとめられて、これはちよいと便利なものだ。）

「つぎに、「変ぼうする市民グループ」その行動と背景」と題するのが、同七月十八日号。これは主に、かの六・一五全国統一行動の解説であって、各章の見出しは、次の通り。

一、変ぼうする「静かなデモ」
二、雪崩れ込む過激集団。
三、ベ平連を激しく攻撃する共産党。
四、ふくれあがる市民グループ。

すなわち、ベ平連の多彩な活動ぶりを、「過激政治集団」の抜け穴として「焦点」をあて、ゲバ抜きデモといつてもじつは「暴力的」なんだとヤツキになつて説いているのであります。

以上二冊は、さすがに論旨一貫して、まるで一冊にみえる。うかうか読むと、いまや変革のイデオロギーが学生前衛から、職場の中に浸透・波及し、さらに、高校生組織づくりが功を奏し、いまや、市民層への密着・浸透の、トキである、かたじけなくも警察庁

がお墨付きをくだされたかのような錯覚がおこる。

だが、まことにザンネンながら、それにしても論拠となるべきデータの立てかたが、恣意的にすぎる欠陥があるのだ。

たとえば、かの六月十五日、全国二八都道府県七十余か所に約四万四千人を動員して集会とデモを行った。なんと遠慮深い、実数をはるかに廻った数字だろうと思うが、それはさておき、このデモが「ゲバ抜き」といふこともゲバ的だった証拠の一つとして、吉川ベ平連事務局長ら約二百人が逮捕されたことを挙げている。まるで神様がパクっていったかのような言い草だが、隠すより現わるはなしで、機動隊がデモの隊列に襲いかかっていたは一人二人とひっこぬいていった、あの問答無用の暴力を相手に押しつけているのだから世話はないのだ。

本誌「週刊アンボ」0号も、写真入りで引用の光栄に浴して、逮捕されたときの熱秘の仕方やアンボ医学などを取り上げている。ことが、情況証拠に挙げられている。いやはや、催涙ガスのしみる眼を洗うのも熱秘という合法的な市民社会のルールを守ること、暴力的な要因だそう。

あの圧倒的なデモの成功に対

する、彼らの非常な狼狽と困惑ぶりが見えすいて、そのへんがこの「焦点」の笑点であります。ただでさえ交通が渋滞・混雑している都心で、道路一杯に広がるフランス・デモ、ジグザグ・デモが随所に行なわれたという実情、と言うマコトシヤかな顔つきをみよ。

とはいえ、この顔つきの裏の血迷い方は、笑いごとではないね。交通戦争という死者続出の大暴力の元凶（産業資本）をまかり通らせながら、デモという市民の当然の権利を「暴力的なよくないこと」と言いこめる、あわよくばそれを世の風潮としたい、というのがこのレポートの目的なのだ。

そんな愚にもつかぬことのために、こんな上質紙のパンフレットをつくるのは、税金のむだ使いというものが、せつ々しくだからこの「焦点」の結びとす。この紹介文の結びとす。

「このような風潮がはびこるならば、市民社会のルールは足もとから崩れることになり、ひいてはそれが積み重ねられることによって、過激集団（機動隊）の暴力行動をも（ますます）容易ならしめることとなろう」。

（小沢 信男）



座標軸は

馬拉カ海峽に

三角形の中心はどこか

一見無関係に見えるものが、実は裏で深くつながっているものだ。十月十六日の、朝、毎、読三紙の夕刊を眺めた人は、その一面の、内容と扱いが、申合わせたように酷似していることに気がついたであろう。トップ

は、未曾有の規模（後日の主催者調べでは一千万人を越えた）の盛上がりを示した米国の反戦統一行動であり、続いて、日経連総会における桜田代表理事の憲法改正の必要を強調した演説と、全国刑事裁判官合同会議における、学生裁判に厳格な訴訟指揮をとるようとの、石田最高裁長官の訓示がそれぞれ四段ないし五段抜きであった（石田訓示は朝日のみ二面二段）。

そのなかで、オヤッという感じを起こさせたのが桜田演説だった。「ベトナム」「学生」だけであったならば、起こらな

ったかも知れない、三紙酷似の印象が、唐突な感じの改憲発言によって、連想の魔術を呼んだようであった。

「心ある国民は、政府の国事遂行に勇断を期待するだけでなく、憲法や選挙法の改正を必要と考えている。この際、わずかの国内的混乱ごときを逃避して国家百年の大計を誤るようなことはステーツマンのとるべき態度ではない」との桜田発言は、しかし考えてみれば、五月の経団連総会での植村会長の発言に通ずるものであった。財界の底流にあったものが、時に社会の表面に浮上して、唐突な感じを与えただけなのである。

五月の植村発言というのは、「安保体制を堅持するとともに自主防衛力を漸増し、極東の平和維持に寄与する義務がある……」という趣旨で、これまでの経済中心主義から政治重視に傾斜した、いわば経団連から、政経団連への転進宣言とも読めた発言であった。

そこで思いあわされるのが、さる一月だったか、シンガポールの新聞が「日本の駆逐艦四隻が今秋、馬拉カ海峽でマレーシア、オーストラリア艦隊と合同演習をする」と報じたことである。実際には、合同演習はなかったが、八月から十月末にか

け、駆逐艦四隻が、インドネシア、マレーシア、インド、パキスタン、シンガポール、タイ、フィリピン、国府などの諸国を歴訪した。練習艦隊のこの「親善訪問」を、東南アジア諸国民は、「日本帝国海軍の連合艦隊きたる」という疑惑の眼で迎えたのであった。日本植民政策の再来に対する彼らの警戒心を、根拠のないものとして一笑に付すことができようか？

わが国の一次エネルギーの供給源の約六〇％は石油である。年間原油消費量約一億五千キロリットル（米ソについて世界第三位）のうち、九九％を海外に依存しており、そしてその九〇％がマラッカ海峽を通るタンカーで輸送されているのである。まさに日本の「生命線」であって、ここを閉ざされれば、かまびすしい日本のモータリゼーションもお手あげである。タンカーの保護を自衛艦で、という発想が財界に出るのは、財界にすれば自然なかも知れなかった。その意図を、いまや、内に外に著実にそして露骨に示し始めたのである。

戦後版「錦のみ旗」

植村演説の同じ月に、経団連の中に「ベトナム経済共同研究委員会」ができた。米国のリリ

エンソール開発資源公社社長に「ベトナム戦後復興開発計画のバスに乗りよう」というものである。ポスト・ベトナムを待たずとも、すでにスマトラやインドネシアの石油開発などに手をそめている日本であったが、ベトナム特需が去ったあとと、市場対策にはかならなかった。

「アジアの先進国として、同じアジアの開発途上国への援助をするのは日本の使命」という、あの、戦後版の「錦のみ旗」をかつぐのである。

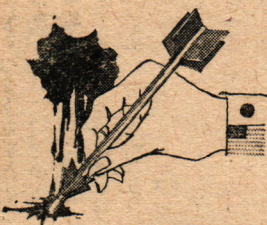
だが沖縄返還交渉の大詰が近づくと、米側は、日本の安保タダ乗り（フリー・ライド）論を露骨にちらつかせだしてきた。ドル防衛への協力、そして自主防衛力増強は、これに対応するものであった。沖縄返還、安保堅持、米国のベトナム政策への協力、東南アジア進出——これが、ワンセットの箱づめになった。政経団連のかばんの中身なのである。別の言葉でいえば、警察国家的強圧によって内政をしずめた上での、外交優先である。「この際、わずかの国内的混乱ごときを逃避して……」というのもそれである。

佐藤首相は国内の反対を振切つてあえて戦火の南ベトナムを訪れ、グエン・バン・チュウ大統領と握手した。沖縄からのB52

のベトナム出撃は、いぜん続いている。このような背景のなかで、佐藤——ニクソン会談は開かれる。

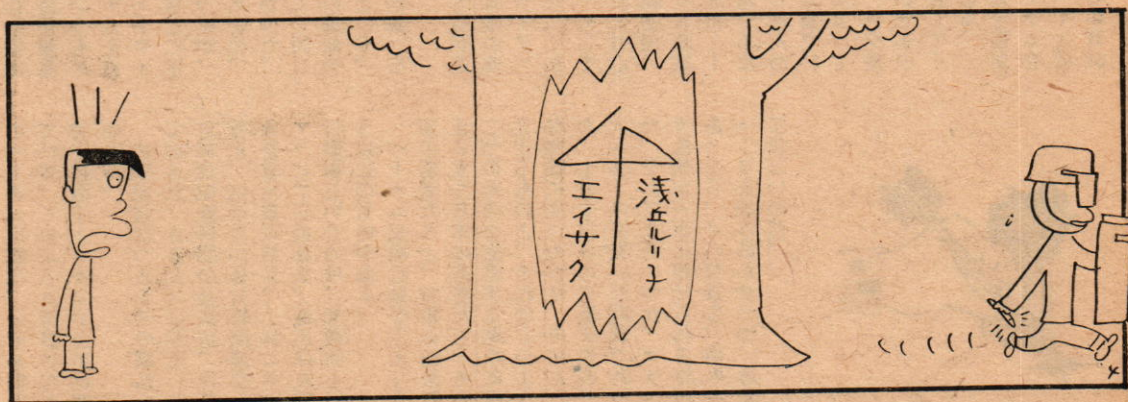
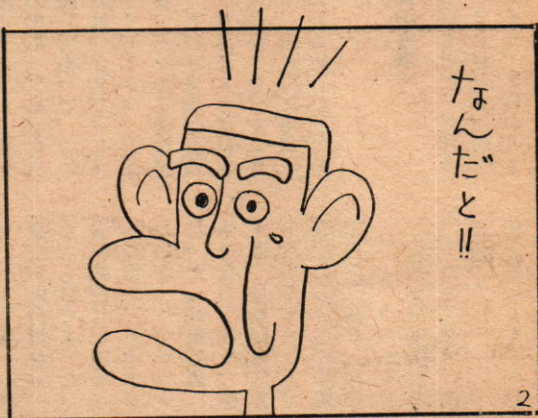
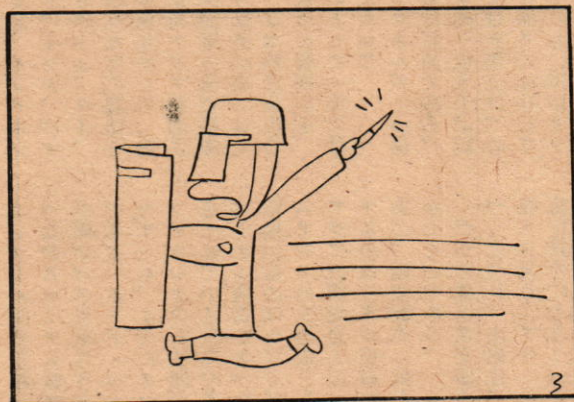
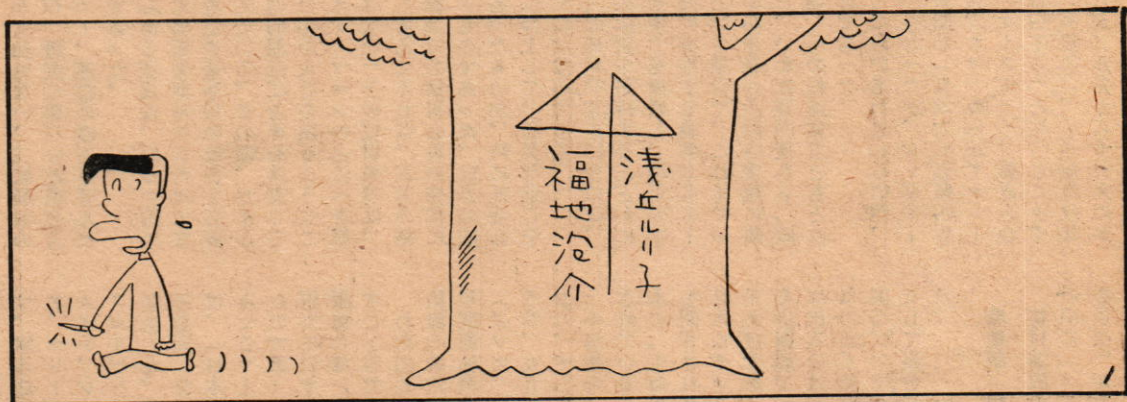
桜田発言はつまりその露払いであった。さる九月に発足した吉田茂記念財団の会長が、佐藤首相、副会長が植村経団連会長、永野富士製鉄社長、小林（中）アラビヤ石油社長、堀田住友銀行頭取というのは、象徴的という以上のものがある。

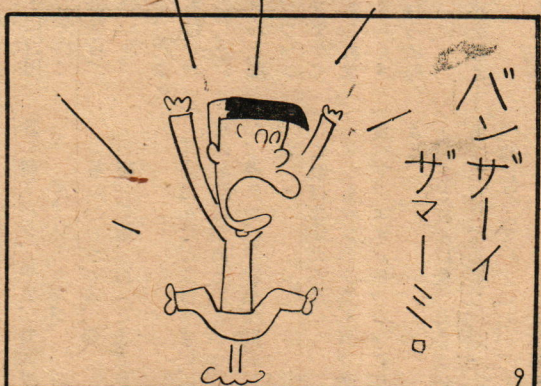
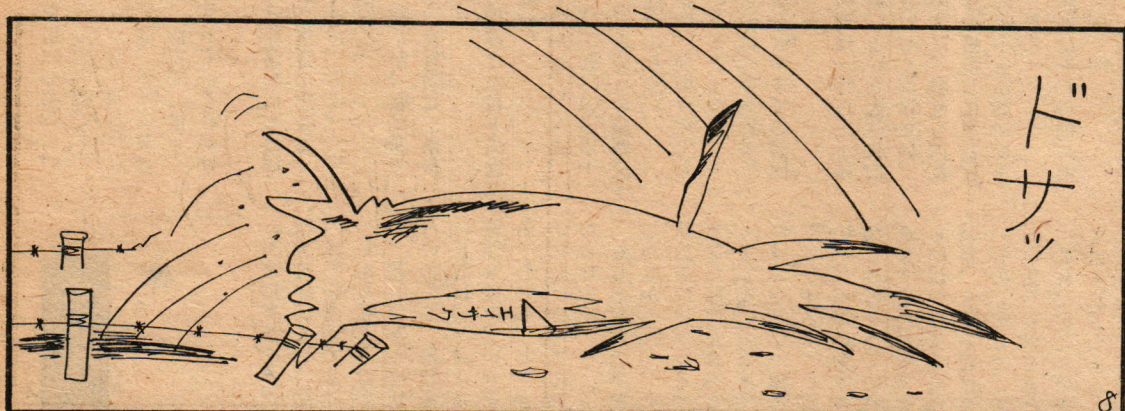
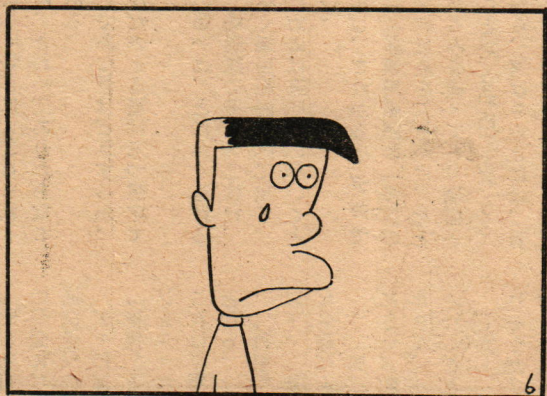
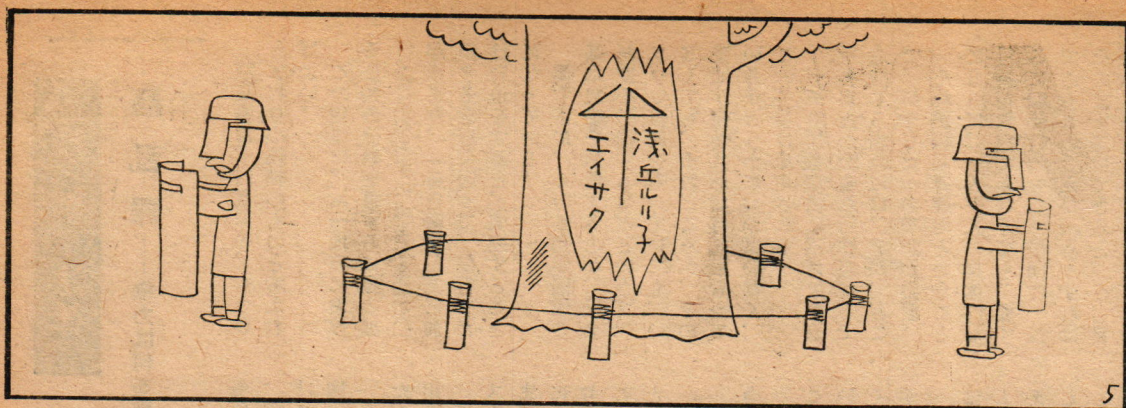
ベトナム反戦行動を支える米国の若者たちと、首相の訪米阻止に立つ日本の若者たち。その二つのものの交差する地点に成立するものと、それはどのような関係に立つのか？ そのことが、十月十六日の三紙夕刊の三大ニュースを貫いた問題であった。そしてまたいつか、マラッカ海峽が一面に報ぜられる時があったら、その背景を、他のニュースと読みあわせつつ、考えてほしいのだ。



ANPO BANZAI

今泡地福





騒乱罪——権力は何を用意しているか——

騒乱罪は、内乱罪の、もうひとまわり小規模のものと考えればよい。

この犯罪は、「一地方における公共の静謐を害するに足る暴行・脅迫を為すに適当な多数人数」が集まり、「各自騒擾行為に加担する意思に因って」暴行または脅迫をすると、成立することになっている。

要するに、その集団が国家の基本組織を顛覆するとか、社会制度を破壊するなどというブッソウな目的をもっていても、いなくても、それどころか、その集団が何か共通な目的をもっているかどうかにおかまいなく、この条項は適用される。

デモ参加者逮捕に不可欠の暴行傷害とか公務執行妨害などで逮捕する場合には、誰が、どこで、何をしたかの現認が必要。

それが騒乱罪適用ということになれば、一人一人の具体的な行為が認定できなくても、要するに騒乱行為をした集団の一員であることさえはっきりすればそのまま逮捕できるという、警察にとって、しごく都合のよい

条項である。

市民一般を「敵」と想定しなければならぬ国、つまり警察国家にふさわしいものである。

さてそこで、あなたの参加したデモなり、集会に騒乱罪が適用されたとする。

あなたが「許可された」コースを、交通係の誘導で、目的地までデモをした場合でも、そこに「騒乱状態」があれば、いやおうなしに騒ぎにまきこまれることは、きわめてありがちなことである。

そこであなたはどうするか。あなたのとる道は三つ想定できる。

その第一は、とにかく逃げる。こと。機動隊の壁をスリ抜け、いち早く適用範囲の外に出る。そのためには逃げ足の早いことが第一。

しかし、これからのデモでは、騒乱罪適用範囲の「多数の人」に着色液をふりかけ、たとえば、かこみを破っても、逮捕されるのが、きわめてありうる。だから、逃げるときには、着衣はためらわず捨てること。ど

ここに着替えを用意したらよいが、そんな用意万端は誰にもできるわけがないから、具体性の高いものとしては、デモに参加するときには、捨てても惜しくない上着をはおっていく心がけがよからう。

第二は、騒乱罪適用にもめげず、デモおよび集会の志をあくまでつらぬくことである。

当然逮捕される。ところで、刑だが、騒乱罪で逮捕されると、被疑者は三階級に分類される。

「首魁」、指揮または卒先助勢、「附和随行者」。

刑は軽いものからいくと、「附和随行者」は二五〇〇円以下の罰金になる。ふつうの道路交通法違反の罰金より安い。

デモ指揮者は、刑のうえでも「指揮」ということになり、アジをやったものは「率先助勢」。これは半年から七年までの禁固となる。

「首魁」の刑は一年以上十年以下。「首魁」という大時代的な名称にふさわしく刑は重い。

さて第三の道は、騒乱を内乱にさせ、犯罪を帳消しにするばかりか、逆に相手を法廷にひきいれることである。

しかし、問題はそれ以前にありそうだ。

(弁護士A)

体 力——がっちり食おう——

集会に参加する、デモをする討論をするというのは、かなりの体力を消耗する。

しかし私たちはいつも貧しい。貧しいから現状に満足できないのだし、現状を変える行動に出れば、バイトができず、出費がかさみ、いっそう貧しくなる。しかし、しっかり生きるためには、がっちり食べなければならぬ。

もしあなたのポケットに百円しかなかったら、そしてそれで体力をつけようとするのなら、あなたは何を食べたらいいか。まず安いのは米である。行きつけの中華ソバ屋にでもはいって「ライス」とどなかばいい。

ソバ屋のおネエちゃん顔なじみになっていけば、ウインクをするだけでフクジンツケぐらいはつけてくれるかもしれないが、ライスだけではテレクさいもの。そこで、おもむろに卵と牛乳ぐらいをとればいい。

これだけとれば満腹感を与えてはくれるだろう。

しかし毎度毎度、ライスと卵

と牛乳だけというわけにはいかない。

そこで次のような例を見てほしい。

献 立

A 朝 ご飯、メダマ焼き、油

あげ、味噌汁

昼 パン、牛乳、りんご、

夜 ご飯、めざし、油いた

め野菜

B 朝 パン、牛乳、野菜サラ

ダ、ソーセイジ

昼 かけうどん、卵

夜 ご飯、肉(こまぎれ)

「貧乏人ほど血はうすい、血液にも階級がある」ということが、過日の医学総会で問題になった。

これは事実だろう。

メシもタンパク質もガッチリ食べて、エネルギーに生きよう。

京都

京都ベ平連の
定例デモ（第一
月曜日）のコー
スになっている
市役所前―河
原町―祇園石段下―円山公
園は、京都で最も頻度の高い
コースです。ときには、昨年八
月十三日の国際反戦会議後の三
千人によるデモ、今年の十月十

福岡

ここ天神は人
口八〇万都市の
中心街、ジェッ
ト機なみの騒音
公害、右折禁止
の標識もなんの
その、右翼、自称中道派、既成
左翼、ニュー・レフト、今売り
出しのフォーク連、カンパ、ピ
ラマシ、花売り、etc. 正統、シ
ョッピングの渦巻くところ。
多くのデモは、この天神に始
まり、天神をめぐる、また天神へ
と向う。毎月一〇日、二〇日、
三〇日の午後六時、市役所前か
らベトナム反戦一〇の日デモは
しらずと呉服町まで三キロの
道程、すでに四歳と一カ月の老
舗を誇っている。
最近脚光をあびているのが
警固（けこ）公園、芝生に寝

日の一万人デモのように、円山
野外音楽堂で集会をしたあと、
このコースを逆行行くこともあ
ります。また、目新しいところ
では、今年の6・15に、六月行
動委が開発した、御池通―鳥丸
通―四条通―河原通、の循環コ
ースなどもあります。10・10で
は、デモ隊が円山音楽堂からあ
ふれ出るように、石段をかけ降
りて行きました。このとき、全

共闘、反戦青年委に続いたベ平
連の隊列は、手薄な警備陣を粉
砕してジグザグ・デモを敢行し
ました。これは、折しもジュラ
ルミンの盾越しに京都名物のオ
カキの「健善」や、「一力」、
お茶漬の「大原女茶寮」などを
横目でにらんで進んでいた先発
部隊を大いにくやしがらせたも
のでした。当日の参加者はあま
りにも多く、会場に入れなかつ

た成功恐怖症患者鶴見俊輔氏は
この大盛況に「ああ、これでも
うベ平連はおわりです！」とい
った―かどうか。（インター
とシユプレヒコールにかき消さ
れて聞きとれませんでした。）
四条河原町の高島屋にある、
「万博まであと××日」の日数
に逆比例してデモの回数も参加
者の数も増え、それにつれてコ
ブの数も増加中……。

デモが終ったあとの腹ごしら
えは必要ですが、祇園あたりで
めくらめっぽうに店に入ると、
メニュー（お品書き）の金額に
「キドタイのおニイさんにド
突かれたよりも大きなショッ
ク」をうけることになりかねま
せんぞ。何をするにも正確な状
況判断と展望をもって突入せな
あきまへんえ。

●新日本案内・デモで日本をまわろう・新日本案内・デモで日本をまわろう・新日本案内・デモで日本をまわろう・新日本案内

ころんだままで集会に参加でき
るのがミソ。フォーク戦線の三
年寝太郎連中も、もっぱら愛用
しているが、これからの大敵は
権力よりも冬將軍、あたたかい
「ひろば」の開拓に頭を悩ませて
いる。

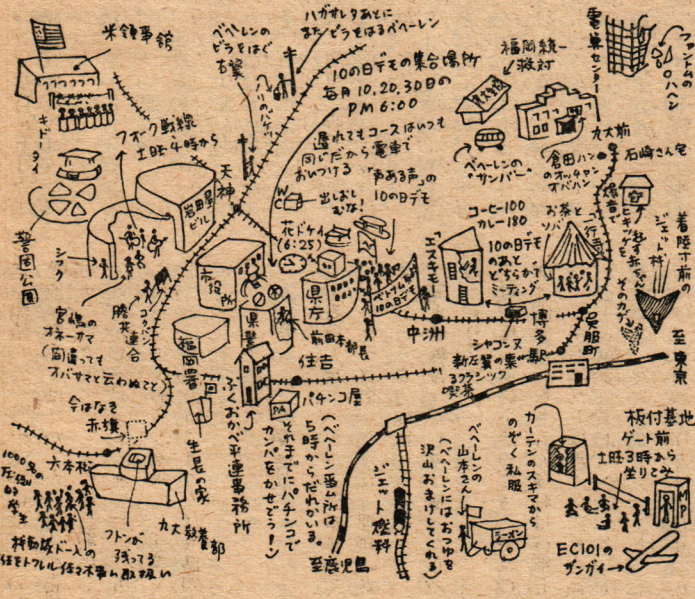
さらに体力増強を兼用するむ
きは、板付へのコースがある。
なにせここから九大ファントム
墜落現場まではオンリー・ツー
マイル。毎週土曜、基地撤去ま
でとことん坐りつづける「板付
基地直接行動隊」に敬意を表し
つつ、デモの帰りは、板付の空
を守る会、やま・けんた氏特製
のラーメンをどうぞ！

（秘）逮捕の名所―呉服町交差
点、天神交差点、自民党県連付
近、領事館前、板付ゲート前、
フランス・デモのやりやすい場
所―赤坂門より西公園

■ジックスリ板付へのデモをす
るとき、誰かが引込み線の上を
走ると、必ず、その日のジェッ
ト燃料輸送が中止される。もち
ろん無届けデモ。しばしば線路
上で機動隊員と追っかけっこを
繰り返る。

デモコースはもう一つ開拓さ
れ、アメリカの領事館への道が
ひらかれた。かたわらの大濠公
園の、ボートのアベック、かれ
らを横眼でにらみながらの総括
集会。デモを当てこんだ移動販
売店、米帝コーラは、もっぱら
私服が愛飲しております。

福岡市の反安絵図



福岡市の反安絵図

ひろし君と淳子さんのこと

街のアンボ論 その1

ひろし君は、幼稚園に通っている。

ひろし君には、ときおり困ることがある。ひろし君の家から幼稚園までは、たった五、六百メートルしかない。しかし

その途中を、赤旗をもった小父さんたちが、通せんぼしてしまうからだ。

ひろし君の家は、ハウスと呼ばれる米軍家族居住区のなかにある。そこには約二百五十組の米軍将校・下士官の家族がまとまって暮している。周囲には金網が張りめぐらしてあって、ふつうの日本人は入れない。

ひろし君たちがそこに住んでいるのはおとうさんが、ハウスの管理人のような仕事をしているからだ。ほかに日本人ではボーイマンと、家具をあっせんしたりする小父さんの家族が、ハウスのなかで暮している。日本人従業員住宅といわれるこの三家族おんだけは、畳の部屋になっている。

ひろし君が通せんぼされるのは、全駐労の小父さんたちが、ストライキをするときだ。日本人はこの日、米軍のところで、働らいてはいけない。だからゲートを通せんぼする。ひろし君のおとうさんは特別だ。ストではいれなくなっている。どうしても困る仕事をしている。だから

米軍はわざわざ、ハウスのなかに特別に日本人向けの家をつくって、住まわせている。ストのときも、ハウスのなかにいるのだ。

ひろし君はまだ低年組で、いつもはおかあさんが、幼稚園まで送ってくれる。だけどストのときは、おかあさんは大人だから、いったん外に出たら、なかにはいれてもらえない。じつはひろし君は子供だから、出ることもはいることもできる。だけど、おかあさんが出るわけにはいかないのだから、やはり通せんぼをされたと同じようなことになる。

ストになりそうだとわかったとき、ひろし君のおかあさんは、ケンちゃんのおばさんと相談をした。朝、時間を決めておいて、ケンちゃんとそのおばさんが、ゲートの向うに立つ。ひろし君は、おかあさんといっしょに、ゲートの内側まで行く。そこでおかあさんがいう。

「ほら、あそこにケンちゃんのおばさんがいるでしょ。あそこへ行くのよ」

そういわれてひろし君は、赤旗をもった小父さんたちの間をくぐりぬける。そしてケンちゃんのおばさんに手を引かれて、幼稚園へ行く。帰りはその反対だ。ケンちゃんのおばさんが、ゲートの内側

を指さす。

「あそこにママがいるのよ。ほら、行きなさい」

ゲートの内側では、おかあさんが手を振って待っている。ストの間じゅう、ひろし君はこうして、幼稚園に通う。

ひろし君のおかあさんには、もっと困ることがある。ハウスのなかに、マーケットもあるが、そこは米軍家族専用であって、「犬と日本人はいるべからず」になっている。だからふだんは、ハウスの外で買物をしている。ストとなると、それができない。ストのときは、買い溜めをしておかなければならない。ストが長びけば、食べる物がなくなってしまう。そんなときには、買いたいものを書いた紙片れをひろし君が持って出て、ケンちゃんのおばさんがそれを買ひ、パンや卵や野菜やら、ひろし君がそれを持って、赤旗の小父さんたちの間を通り抜けることになるだろう。

ひろし君たち親子は、ふつうの日本人がはいってはいけない場所で暮しているという点で、日本人とはなれている。そしてハウスのなかでは、買い物すら許されないという点で、「仲間はずれ」されている。「国境」両側にまたがって暮しているようなものだ。ストで「国境閉鎖」ともなれば、とりあえずそれをつなぐのは、子供のひろし君だけなのだ。

淳子さんは、高校に通っている。一人で下宿を借り、自炊している。親

がいないわけではない。しかし、いっしょに暮せなくなった。十八歳をこえたからだ。

淳子さんがまだ小さいとき、おとうさんが死んだ。その後おかあさんは、米軍の将校と仲良くなり、そして結婚した。淳子さんは長いこと、そのおかあさんといっしょに暮して育てられた。

義父である米軍将校の任地の都合で、シカゴで二年近くを過ごした。そんなことがあって、日本の学校には、二年遅れている。高校生なのに十八歳をこえているのは、そのためだ。結婚によって、おかあさんはアメリカ国籍をもった。だが淳子さんは、そうしなかった。養子手続きをとらなかったから、相かわらず日本人だ。

淳子さんの下宿は、ハウスの金網の外側にある。その金網のすぐ向う側に、おかあさんたち夫妻の住む家がある。目と鼻の先なのに、行き来は簡単ではない。

淳子さんがまだ子供のうちは、扶養家族手当ということで、日本人であってもいっしょに暮すことができていた。しかし十八歳をこえて、自立能力があると思われるようになったら、アメリカ人ではないのだから、外に出なければならなくなつた。いま淳子さんが一人で下宿生活をしているのは、そのためなのだ。

高校三年生である淳子さんは、もう卒業が近い。生活費や学費は親が出してくれており、大学へ行っていいといわれ

ている。しかし淳子さんは考えている。

すでに二年も学齢が遅れており、名の通った大学に合格する自信もない。アメリカ軍人と結婚したおかあさんに、これ以上負担をかけてまで、漫然と大学に行くこともないのではないか。ここで生活的に自立すれば、おかあさんには一個の女としての道を気がねなく歩かせることができる。すでにそんなことも考える年ごろになっている。

そこで最近、大学進学をやめ、就職の道を選ぶことにした。だが日本の会社は三年も年齢が多いと、なかなか採用しただらない。希望する就職先では、ほとんど不採用になる。現在では、「もうどうでもいいわ」と思っている。しかしまだどこにも決まらない。

淳子さんには兄さんがいる。大阪のほうで、もう結婚している。いまでは日本人のなかの、唯一の肉親だ。今後はその兄さんの近くで、暮そうかとも思っている。だがごく最近は、「いっそ結婚しちゃおうかしら」などともいい出している。

ある必要があって、私は近所の家の一室を借りた。そのとき隣室にいたのが、淳子さんだ。また、ひろし君の友だちのケンちゃんとは、私の息子である。ごくふつうの隣近所のつき合いなのだが、米軍施設の近くで暮らしていると、ときおりこんな問題にぶつかっておどろく。あらためてこの日本に、「国境」のあることを知る。そしてひろし君や淳子さんには

なんと色濃く、安保の暗いカゲがさしていることだろうか。

ひろし君と淳子さんの問題と、日米安保条約との間には、幾層ものややこしい個人的事情がある。ひろし君はまだ子供だし、淳子さんにしても、直接に安保放棄を要求しているわけではない。しかしやはり、それぞれの個人的事情の根は、安保につながっていると思う。

一九六〇年の安保のとき、それは私に

あのねのアの字は アンポのア

街のアンポ論 その2

さて、「街のアンポ論」なんていうけれど、ここ姫路の町では、どこを探してもアンポのアの字も見当らなかつた。――工場の食堂でも、駅前のバス待合所でも、市営団地の井戸端でも――。

耳をすますと、がやがや聞えてくは、

「税にとられてしても、さっぱり儲かれへんわ」

「このごろの学生、いったい何をしとるんやろ」

「ニカクおもしろいわ。サンシよりも……」

といった声ばかり。いったいどこへいったらアンポに出合えるのだろう。

とって、政治的な問題であつた。一九七〇年の安保も、そうであるにはちがいない。しかし、ひろし君や淳子さんのことを知って、安保は私にとって、それ以上に人間的な問題となつた。身近かな人びとの、人生に関わる問題になってきた。ほうっておけば、こんな不幸はもっとふえるだろう。

(神奈川県相模原市・大野 力)

そこで、「アンポやあーい」とあちこちさがしあひついたら……

× × ×

まずつかまえたのは、駅地下道のフォークに立ちどまつた二人連れの高校生。「えー。アンポ……。アンポかア。そんなむずかしいこと、知らんわ……」

「そやなあ……アンポいうたら、ほら

いまみんなで唄つて……みたいなものとかうか。栄ちゃんのバラード」

「栄ちゃんの家に

ジェット機が落ちたら

栄ちゃんはそのまま……」

× × ×

と、横から首を出した中年の商人ふうの男。

「ほんまやで。安保、安保いうてる政

治家は、それで何かモウケとるヤツや。もし自分の頭にジェット機がおちてみい。骨身にしみるやろ。

ところがジェット機がおちるのはいつもわしらの頭の上や。

インフレで何ばかせいでもアカンのはわしらだけや。

ケイサツや自衛隊やいうて税金とられっぱなしがわしらや。

いつ戦争がはじまつても、まきこまれて、どうしようものうて困るんがわしらや。

わしはアンポがどんなもんか、何も知らん。

知らんうちはまだええ。

わかつたらさいごや。

そのときは、ジェット機がおちてオダブツや。

いま、何もわからへんからこそ、わしは安保に反対なんや。

後悔せんうちにアンポ反対しとかなアカン。エライことになるでえ」

× × ×

そこで、ぼくの「アンポやあーい」というよび声は、もうとつぜん必要がなくなつてしまつたのである。

そうだったのだ。「街のアンポ論」はさがしまわるまでもなく、そこらあたりから、いっぱい聞こえてきていたのだ。

――つまり、工場の食堂で、駅の

待合所で、団地の井戸端で、がやがやしゃべっていた――

「こんどは、また新聞代の値上げか」

「テレビでみるのと全然ちがうで。組合のデモが解散したかえりみち、機動隊が学生におそいかかるのみてたら、ゾクゾクする位こわかった。ヒドいことしやる」

「なんやノドが痛いおもたら、また赤い煙が出てるわ」

「ことはとうとうサンマが喰べられへんかった」

新宿――安保――ベ平連

街のアンボ論 その3

「やい！ おーい！」

私は、突然、ふみだそうとしていた左足を踏みつけられた。そして前にのめった。

私の左右にびったりとくっついて二、三人のたち。見なくても、その人たちが何であるかがすぐわかった。

「やい、ベ平連！ おめえらァな、西口に行つてりゃいいんだよ。歌舞伎町までのさばってきやァがって……。こんど出てきた日にゃァ、ただじゃおかねえぞおー！」

泥靴の下からやっと足を抜き出して一足踏みだすと、またふみつぶすのだ。

――といった日常の会話のなかに、実は庶民のアンボ論がすっぱりこめられていたのである！

いわゆる天下國家を論ずるおエラ方のむずかしい安保論とは、まったく関係なしで――（庶民にとつては、それが当り前だ！）――もっと具体的に切実に、そしてさり気なく、身近かなものとして――。

それを誰も知らず、誰も気付かないだけで――。

（兵庫県姫路市・向井 孝）

新宿、歌舞伎町の夜の雑踏のなかで、こんなことが起こっていても、誰も気がつく人もいない。素知らぬ顔で通りすぎてゆく。

「ためえの家へ石をおちこんでやろうか。火焰ビンじゃどうだ」

火がついたたばこを鼻先に突き出す。私といっしょに歩いていた青年はどうしたろう。私の巻き添えにしてはならない。

「何か言ってみろよ。オイ。何も言えねえだろう、エー！ おーい！」

その時
「オバサン！」そう言って私の肩に手を

まわして「行こう！」と言う若者がいた。ふたりづれの若者だ。入管法粉碎の西口すわり込みの時に知りあった人たちだった。台湾生まれの少年だ。

なまりのある日本語で「ぼくたちね、向こう側でみていたら、オバサンが行くのが見えんだよ。そうしたら、どうもようすが変だ」と気がついて、かけて来たんだ」と言って息をはずませていた。そして私の手を引っ張ってサッサと行く。ベ平連運動に参加したいといつて、私と話していた青年もいそいでその後をついてきた。

歌舞伎町中央通りでのある夜の出来事である。出来事などといういい方は少し大げさかもしれない。この界限では日常茶飯事のことなのだ。

新宿―歌舞伎町。大和銀行のまわりには背の口から集まってくるフーテン族がいる。秋風が肌に冷たくなったこの頃でもその数は一向に減ってはいない。派手な柄ものの握ひるがりのズボンとお揃いの背広。私は、いつも思う。この子たちはどこからこの流行の服装を仕入れてくるのだらう。ただでは誰もくれないだろうに……などと。

きょう年は駅の東口広場が、かれらのたむろする場所だったが、ことしになってから追われてきたのか、移ってきたのか、歌舞伎町のまん中へんに小さく鎮座します弁天さんのお宮の前庭が、夏中の住む場所になった。

私はかれらとよく話をする。きょう年東口広場で知り合ったフーテン族のなかには、いま学園に戻り学園闘争をしている者、大阪の繊維問屋の家へ帰り反戦市民デモに参加している者、喫茶店のボーイになって働きた者――きょう年のフーテン族のなかには、五人の中にひとりぐらいはそういう若者がいた。

ピンクの水玉模様のマフラーを風になびかせて「オバサン！ てつだってやるよ」と言う、そんな少年もいて大仰な身振りで「ベトナムに平和を！ 平和の船を！」などと叫んで私を困らせることもたびたびだった。

けれども、ことし、いま、歌舞伎町にむらがっているフーテン族は少しちがう。

かれらには何を話しても通じない。どこにも反抗する心も芯もない。

「イイカラヨー、ソナ話ハヨー、タバコ一本クレヨー」

「アンボ。インボ。どっちなんだよ。アンボ、そんなこと知らねえよ」

どうやら言葉だけは通じるが、そのことについては何も知らないらしい。ほんとに知らないのだ。病毒におかされているかれらの頭には何も通じないのだ。いまの世の中から生まれたウジ虫、クズに成りはてた生き物の集団にすぎないのだ。これも新宿という大きな胃袋が呑みこむひとつのものかも知れない。ウタカタのように漂う一見人間であって人間でない

ものが新宿を、現代社会を、あらわすひとつの象徴かも知れない。

けれども、あの夜私をかばってくれた台湾生まれの少年、新宿西口広場を埋めつくした人たち、その人たちもおなじこの新宿の夜の住人であることを私は知っている。

私たちは、安保条約の条文を知っているか、知らないかにかかわらず、いやが応でも、この体制の中にいる。もちろん、この安保体制には、いま社会の仕組みの人間疎外という背骨がある。この非人間的な仕組みは、私もあなたもすべての人間を商品化して、ただじぶんをふとらせるためにだけ存在している。新宿でそんなことが起ころうと、それはみんな、この資本主義の社会の文化と風俗という大きな枠組みをはみ出すことはできないし、人びとはそのなかをおどる人形ではないのかも知れない。

私の白い足袋を泥で塗った五分刈り頭、クリーム色の派手な背広の人たちとフーテン族とのかかわり合いを見たり聞いたりするようになったのは、きょ年の10・21以後のことだった。

ことしの10・21。その翌日、私は西大久保一丁目の旅館街を歩いていたら、うしろから歩いてくる女の人の話に聞き耳をたてて、ゆっくりと歩いていた。私はそのひとりが、どういう女の人か知っていたからだ。かの女のヒモ、いやヒモではないだろう。亭主だろうと思う。かの女

にはその男の子どもがふたりもいるのだから……。

「あたしは機動隊のほうがよっぽど悪いと思うようになってきたよ」

「あたしもさ。権力って、おっかないものらしいよ……」

「あの人もね(亭主を指している)ゆうべ学生の暴徒をやっつけてやるんだといきごんで出かけていったんだけどさ、いつもよりゆううつな顔をして帰ってきた、いつものようにてが話をしないんだよ」

「そう？　ヘー！　あんたんこのあの人かねえ？」　実に感慨深い口調で言う。

「俺だって馬鹿じゃあねえやさあ。このふたつの眼で、ほんとうのそこをよくみて考えてみりゃあよ。何がいか、何が悪いかわらぬことあ、どこがどう間違っているぐらゐのことはわからあね、っていつてさ、考えていたのよ」

「あたしも、よく考えてみようって……」

「店の前でメガネを落として逃げていった学生、どうしたろう。できれば届けてやりたいよ」

「それにしても、ヒドイネ……」
かの女らも、安保条約が何であるかを知らないだろうか。だが……。

10・21は冷たい雨だった。翌日もまた朝から雨が降りつづいてた。けれど、新宿はきのうそこで何があったかも

知らぬげに人びは酔いしれていた。

自由と平和、虚構と偽善の上の自由、みせかけの繁栄と、がんじがらめにされた人間性。一ページめくると、裏があり、またそれをめくると裏がある、どこまでも裏がつづくような街、新宿ではあるけれど、私がその街かどや銭湯でひろった二つ、三つのことばをあげておこう。

あるホステス

「私ね、持っていたコンパクトを機動隊になげつけてやったよ。粉が散ったけど、ぶつかんかった」

「コマ劇場のところで、女の子がつかまつたんだけど、群集が『カエセー！　カエセー！』って言った、機動隊さんかえしてよこしたんだよ。あん時、うれしかったな」

あるレストランのボーイ、私の耳もとで

「きのうはごくろうさん。こん夜のごちそうはボクのサービス」

街頭の似顔描きのひとり

「オバサン、たいへんだったろう。だけどいまも一歩まちがえば海の底だというように沖仲仕もいることを忘れちゃあ困るよ。かあちゃんや子どもを残して、死んだ沖仲仕にくれる金が最高三千元だ。ひとりの命が三千元だ。それにくらべりゃあべ平連なんってお遊びだ！」

胸に突きささるような言葉だ。私は、けっしてこういう人のことを忘れてい

つもりはない。たくさん未組織労働者、不満も言えない社外工、私もそのひとりだからだ。

私は、こうした人たちが持つ疑問に答えるためにも、新宿という街にあらわれた現代社会の真の姿だけは見とどけておかなければならない。新宿は、エネルギーにあふれた街だと言われている。たしかにそうかも知れない。外国人でも、日本に來て新宿をみて、よくそう言ったり考えたりする。

だが、ここには現代の資本主義社会と格闘している人たちの苦悶と放心、反逆と屈服のすがたがあるではないか。そこには詩も恋も、はては酒も女もあるだろうが、それはすべて、悲しみにみちた酒と詩、反逆にうらづけられた恋と女のすがた、それが混然となった世界ではあるまいか。それはエネルギーでもあるし、ときにはニヒルでもある。

いまの社会を安保体制がしめつけているとするなら、これを背後から枠組みしているのは、このような姿の資本主義である。そしてこの安保にも、資本主義にも我慢のならない一群の人びとがいる。ときにはデモでこの壁に突きあたろうとする。また、あい集まってフォーク・ソングでこの何とも言えぬ鬱悶を追いかおうとする若ものもいる。

私たち新宿べ平連は、そのような一群のほんとうの人間の集団だ。

(東京都新宿区・古屋能子)

眼には眼を！

—機動隊を撮そう—



—国家権力による反アンボ、反戦勢力への弾圧はますますエスカレートし、一〇・一〇、一〇・二一では徹底した、予防検束、また都内あらゆる場所での、職質、検問、が、暴力学生、摘発という名目で当り前なこととして行なわれた。今われわれが注意しなければならぬことは、こうした明白に不当な権力、警察による恒常的な国民一人一人への犯罪者扱いを一時的にも許し、それを次第に日常的なことで受けとめてしまうことだろう。

—またこれと並んで反戦、反安保を叫ぶ学生、市民、労働者への機動隊員、私服警官による肉体的テロ行為はますます凶暴になってきている。一〇・二一国際反戦デーでの反戦青年委員会の労働者、北川四郎君（仮名）への暴行、また今年の夏、新宿駅西口広場での市民への暴行と、官許のテロは無原則にひろがっている。しかもいずれの場合も、権力はその匿名性にかくれて自らの犯罪を否認し、またそれが許されているという現状がある。われわれはこのような暴力をけって見のがしてはならないだろう。権力が匿名を主張する時、われわれはその当の下手人の顔を大衆の面前で明らかにしてゆく必要があるだろう。

—例えば、一度でもデモに参加したことがある人ならば、多数の私服によるデモ参加者の撮影が組織的に行なわれていることは知っているに違いない。それは彼らの意識の中では潜在的な犯罪者を記録

し、犯罪後の取調べを容易にするということであろう。だが見る権利を一方的に権力にあずけてしまうこと、市民が権力の恒常的な監視下に置かれるということと、それにファシズムと呼ばずに何とよぶことができるだろう。

—今こそ、われわれの視線をとり返す時だ。眼には眼をカメラにはカメラを！

自らの犯罪をけって認めようとしぬい権力の実態を誰の目にも明らかにしよう。白日のもとにひきずり出してゆくこと。そして逆に権力を市民の恒常的な監視下に置くこと。街頭示威行動と並んで、この運動を今われわれは繰り広げてゆこう。—もしあなたがデモの中で、あるいはデモの外で権力の暴力を目撃したならばすぐにカメラを向けて下さい。そしてこの「週刊アンボ」眼には眼を！の係りへ送って下さい。またその時の状況を詳しく記述して下さい。時・所・どのような状況の中でどのような犯罪が行なわれたか。

—次にカメラの扱い方を簡単に説明します。

カメラ ハーフ・サイズのEEカメラ、アサヒペンタックス、キャノンなどの一眼レフ。どれでもかまいません。ただしハーフ・サイズカメラは軽いし、ポケットの中にも入るのでデモの中では便利です。

フィルム これだけはコダック社製のト



ライXという高感度フィルムが便利で
す。日本のフィルム、例えばSSフィル
ムの七、八倍のムリがきき、夜間の撮影
では絶対に必要です。これは一〇〇フィ
ートでしか売っていない所もありますが
(一〇〇フィートで三〇〇〇円くらい)
36枚撮りで二〇本とれ、フィルム一本の
単価では国産フィルムと変わりません。何
人かで買って分けて使えます。大きな写
真機、写真材料店には必ずあります。
絞り・スピード (以下の数字はトラ
イXを使う時を前提にしています) 日中
・晴天で、F 16、五〇〇分の一、夜間蛍
光灯下ではF 4、三〇分の一を基準に光
りのぐあい調節して下さい。
レンズ カメラを買うと必ずついてく
る標準レンズのほかに広角レンズと望遠
レンズがあります。今さら説明するまで
もなく望遠レンズは遠くのをひきつ
け、広角レンズは近い距離からその場の
雰囲気をとらえるのに適しています。で
すから、望遠レンズはデモの外から、広

角レンズはデモの中から、と使いわけ
ることが出来ます。特に広角レンズを使
えば、焦点距離が大きいので三メートルの
距離に固定しておけばほぼ一メートルの
距離から無限大まで大体ピン트가合うは
ずです。

現像 できればDPE店に頼まずに写
真の知識のある人のところで現像して下
さい。例えば騒乱罪が適用されたような
場合、権力が町のDPE店にまで手を入
れば、権力にとっての証拠写真を収集す
るといふようなことも十分考えられます
から。雨戸を閉めきって押し入れに、入
ればよほどの廃屋でないかぎり日中で
も、現像ができるはずですよ。

注意 警官にカメラを向けるとよくい
いがかりをつけられます。何を撮った？

誰の許しで？ 公務執行中の警察官に肖
像権などはないのですから断固とした感
度をとって下さい。フィルムを出せと言
われてもけつして渡してはいけません。
また万一逮捕された場合(あるフリーの
カメラマンがデモ隊とともに建物に入
った時、写真を撮ったということではな
く、建造物不法侵入で逮捕され、フィル
ムを押収された例があります)、「現像・
焼付承認書」という文書に署名、捺印す
るよう強要されます。これも絶対に拒否
して下さい。一度受け入れるとそれは
「契約関係」ですから、かたてに現像焼
き付けされ、釈放後もたびたびの呼び出
しを受け、その時の状況などの証明を求
められ、結局権力の証拠として使われて

しまいます。

―最後にもう一度この欄から読者に呼び
かけます。権力の一方的な監視をはねの
けよう、デモに入る人も入らない人も
権力が暴力をもって市民を抑圧するのを
目撃したならば、その現場の写真をとっ
て下さい。権力がその匿名性にかくれて
暴力のかぎりを振るう今、われわれは犯
罪者の氏名がわからないまでも、こうい
う顔をした、こういう男という形でその
犯罪者の個人性を大衆的に暴露してゆこ
う。それを権力の暴走を監視する市民の
抵抗線にしてゆこう。二号からはこの欄
にこうした官許の犯罪者の顔と暴行の現
場の写真が並ぶでしょう。眼には眼
を、の係りに写真とその写真をとった
現場の説明を送って下さい。

(T)

この人の半生の中で、もっともドラマチックだったのは、昭和二年の「造船疑獄」の時期だろう。

ことのはじまりは飯野海運俣野社長と船主協会理事一井保造が贈賄容疑で逮捕され、自民党幹事長だった佐藤栄作に多額の金を贈った事実が浮び上がったことである。当時の山下汽船横田社長の「横田メモ」の中に書かれた約三百万円の個人献金、俣野飯野海運社長からのギフトチェック二百万円、そして日本船主協会と日本造船工業会からの各一千万円というものがその内容だ。とくに日本船主協会からの一千万円は、佐藤栄作もこれを認めたが、「公然性のある純然たる党献金でただ届出を忘れただけ」とひらきなおった。

これに対し検察当局は、この時期はずれの献金を利子補給法にからむ「ワイロ性」を帯びた金」として追及した。その追及はげしかった。だが当時、吉田学校の優等生として頭角をあらわしはじめていた彼を逮捕から救ったのは、吉田茂とその内閣である。佐藤と池田（彼もこの事件のもう一人の主役だった）が逮捕されれば、内閣の崩壊は必至だからである。結局、検察当局の追及も、犬養法相の指揮権発動によってチョンになった。佐藤栄作のあのインケンなゴーマンさは、思えばこの時に始まったといってもよい。

その後の彼は、政策マンとしてはほと

んど目立った業績をあげないままに、六〇年代をむかえるのだが、兄貴の岸信介が首相となってからは、さかんに兄の悪業を助けることになる。

六〇年安保を前に、池田、三木、灘尾の三閣僚が安保問題を中にはさんで辞任するという騒ぎがあった。その時、池田はいちはやく安保を支持する側にまわって再入閣するのだが、その池田と再度造船疑獄以来のコンビになったのが佐藤栄作である。

この二人は実に熱心に、六〇年五月六月の大デモに対して自衛隊の治安出動を主張したのである。その事実を明らかにしたのは、当時、科学技術庁長官をやっていた中曽根で、

彼は何を思っただか突然「閣僚日記」をばらしてしまっただの。その佐藤・池田コンビの主張にクギをさしたのが、防衛庁長官の赤城だったというのだから、自民党内はどうなっているのかわからない。

池田の場合は岸のあと、政権をとるための布石として岸にゴマをすったのはわかるが、この時佐藤は「岸一族の危機

だ」という一点で自衛隊出動をだしたといわれる。彼は岸一族のためにあの六〇年の市民行動を武力で叩きつぶしたかったのである。彼の周辺の人びとの話を総合すると、彼はそういう単純な考えだけで行動する男だという。

つまり一言でいえばダメな人なのだ。どういふふうにダメなのかということを見てみよう。

佐藤 栄作



連載・この人の略歴 ①

彼が大蔵大臣をやっていた全時期を通じて、彼に予算編成が出来たためしがないというのも定説だ。曲りなりにも出来たのは田中角栄の腕といわれる。次官でもない田中が彼を助けて予算編成をしたために、田中は太蔵省では評判が悪い。ある時、党の役員会が田中をよび、余計なことをするなと問いただしたら、田中は悲痛な顔をして「佐藤にまかせといていいのですか？」と問いかえしたという。佐藤の無能を一番よく知っていたのは田中だったということになる。

三木武夫もそれを知っている。対米策に佐藤は定見をもっていない。沖縄問題をめぐって、三木が「核めき本土なみ」

案を外相として出した時、佐藤は「とてもない。アメリカがそんなこと許すはずがない」と驚きあわてた。対米コンプレックスのかたまりで、たえず佐藤は相手の土俵の上でしか話の出来ない男だということも定説だ。ともかく佐藤は三選を前にした時、その三木の「核めき本土なみ」論を指摘し「私が三木君を外相にしたのは間違いでした。私はお詫びします」と公けの席でしゃべり、三木を怒らせている。そればかりではなく、今年一月「日本が非核三原則を保持できるのは沖縄に核基地があるからだ」とさえている。その佐藤が僅か三月のちに「核めき本土なみ」をいい出したのだから三木がアイソをつかしたのは無理もない。それはど無定見な男がなぜ首相になれたのか。彼をよく知る人によれば、「党内人事・派閥にかなしての能力によるものだ」という。現在の保守党を動かしているのは金と派閥とポストだというのが、この三原則を佐藤はほど大切にしている人間はいないという。

問題は、このダメな男が、今度コンプレックスのかたまりの対象であるアメリカへ、吉田茂に教えてもらった彼の唯一の外交手段である「アメリカと仲よく」を頭にたたきこみ、「私が日本だ」というような顔をしてでかけることである。そしてそれが「造船疑獄」の時と同じように、彼のゴーマンさをさらに増すためのものになる可能性が大きいことだ。

しんぶん紹介

(1)

福岡ベ平連

石崎昭哲さん



福岡ベ平連事務局長。

といっても、やっと最近この肩書きを押しつけられる。福岡ベ平連発足とほとんど同時、正確には九州大学ファントム墜落以来——たまたま氏の自宅が飛行機の定例コースの直下（九大正門近く）にあることもあって、基地撤去運動に参加。以来一年半、文字通り生活のすべてをかけて福岡ベ平連にあけられ、今では氏のいない福岡ベ平連は考えられない。

「ベ平連通信ふくおか」初代編集長。

ユニークなふくおかの「フー・ク」歌集、の製作もいっさい氏の手よりなる。どんな若者、老人、女性とでもすぐにうちとけて話のききょうず。眼をときどき閉じてニコニコ。話口調はやや緩まん。対権力以外に怒った顔いまだみられず。

ベ平連のもっともベ平連たるエッセンスそのもののような人物、どうしても、かんりょうになりきれず、ビラ貼り、ガリ書き、連絡等々深夜まで。「あんなお年寄りが……、オレたち、みてはいられ

ない」と若者は一緒にやることになる。といっても四十一歳の壮年。しかしベ平連の平均年齢がどんどん下がっているのは全国的現象で、福岡とても例外でないから、お気の毒にもすっかり年寄り扱いされる。氏の自宅には、地元はもちろん大阪から、北海道から、かなりよごれた若者がいれかわり、たちかわり、大変なもの。

ビラ作りが本業に

「今年の二月のベ平連全国懇談会がやはり一番の転機だったと思います。皆さんのカンパで行ったことでかなり責任を感じて……それからこっちはもうなだれ現象です」「運動が子供に反映しますね……子供への反応にいつも教えられます」「ベ平連通信ふくおかの編集、ほんとうに勉強になりました。編集というのと——集まってくる原稿によって自分が試される、ということではないでしょうか」

一日数十回の電話、応対、連絡、それ

に最近はお援策があつて、逮捕者への差し入れ、身元引き受け……睡眠時間もますます少なくなったとか。

やりたいことはゆっくり風呂にはいつて寝ること。シューベルトをきくこと（氏はクラシック音楽通。トレードマーク、いつもゲタバキ（水虫のため）パチンコはプロ級（論文しびつ中）。

さてこの事務局長さん、何の職業で生計をたておられるのかよく判らない。

あんなことではもう三回ぐらい破産か夜逃げしてなきゃならないはずだ、もっぱらパチンコが正業か、などと首をかしげるむきもあるが、ベ平連人間として腹をたべて生きられるわけだし、石崎さん御自身にあらためてただしてみると、近く印刷業を始められる準備中とのこと。オフセット印刷なので、ベ平連、全共闘、反戦青年委、ビラ、ステッカー、一手引き受けますという。ただ、そんなとばかりが得意では、ますます生活の危機が近づくのではないかと、かえってまわりの若者たちは心配している。

最後に奥様の評。

「子供にあまい。整理整頓、きれいな好き。亭主カンパク。暴君。いうこととすることでは大違い。なんでもしよいこんで自分一人で忙しくしている」とどうも点はカライ。

昭和三年十月二六日生まれ。二男一女の父親。山口市生まれ。蛇足——海軍兵学校卒。九大中退。（宮嶋郁子）

ベ平連ニュース

The BEHEIREN News

1部 30円
6ヶ月分
250円
(送料共)

☆紙面充実☆値上げなし☆市民運動とともに☆
申し込み先 東京都新宿区神奈坂6の44石井ビル
Tel. 267-2471 振替 東京 34776 (切手でも可)

市民運動入門

第 1 回



(反パクにおける大テントでの集会)

大きな声を出そう

——市民運動とは大声を

出すこととみたり——

吉 川 勇 一

今夏大阪で開かれたハンパク——『反戦のための万国博』の際のことである。

一日を費してハンパクに集まった各地ベ平連の人びとが一堂に会し「ベ平連全国懇談会」を開催した。その日の夜、ハンパク会場の大テントで全国懇談会の討論の模様を報告する集まりがあった。テントは沢山の人で溢れたが、その中にはまだベ平連運動に加わっていない人びともかなりいた。

大天幕の中の話しあい

「私のところでもベ平連をつくりたいのだが、どうしたらよいか」という質問も出た。その会の終る時、小田実が立って怒鳴った。「これからベ平連をつくら

うという人、ベ平連についてもっと聞きたいという人、このあと会場に残って下さい。吉川君がゆっくりと説明するそうですから」

傍で聞いていた私はびっくりした。ヤレヤレ、また彼のクセが始まった。そんな予定はなかったのだし、もう夜の十時近かった。夕飯はおろか、ろくすっぽば飯もたべてはいなかったのだ。小田氏は予定だの、あらかじめの打合わせなんて気にもしない。ポンポンと思いつきがとび出すし、それは、しかも、引っこみがつかない形でとび出してしまふのだ。

第一回日米市民会議（一九六六年）だってそうだし、昨年の「反戦と変革にかんする国際会議」だってそうだったし、

この「週刊アンボ」だってそうだ。あ

ちこちでシャベリ、書き、遂には記者会見をし、そしてしばらくたって冷静に考えてみて「こりゃエライこっちゃ。とても出来そうにはないわい」と気がついた時はもうあとの祭りで、もうやるよりしょうがなくなっている。これまでのところ、それで何とかなってしまうんだから恐いものである。「シャーナイヤナイカ、マア、ナントカナルヤロ」という彼の口ぐせは、これまでのところ、そのとおりになっているのである。

いや、思わぬグチが出た。そんなことが本題ではなかったのだ。小田氏の突然の発言で三十人ほど集まったそのベ平連についての会合は、続けて開かれること

になった。

みんなベ平連ははじめてで、そしてベ平連の運動をそれぞれの地域や学校で始めようと思っている人たちだった。大天幕の裸電球の下、まるく並べた椅子の前列二列ぐらゐは空いていて、みんな後の列のほうに坐っている。

引っこみ思案をなくそう

さて、どんな話をしたものでしょうか。これらの人たちのこれからベ平連運動を始めたといふ考えている地域や学校や職場の状況はみんなさまざまであるはずで、こうすればベ平連運動が始められる、市民運動はこう始められるべきだ、というそんな処方箋などあるわけがないのだ。

「それぞれの方がどんな気持で運動を始めようとなさるのか、ちょっと事情を話して下さいませんか」私はそう聞いた——沈黙。

そこで私は話をつぎのように始めた。

——反戦のための市民運動を始めようとする人、ベ平連運動を始めようと思う人、そういう人はまず第一にこういう集まりで後の方の椅子に腰を掛けたり、沈黙を守ったりすることをやめなければいけないでしょう。

ベ平連の運動、あるいは反戦のためのいろいろな市民運動は、よく自発性とか自主性ということの問題にします。誰に命令されるでもなく、通達を受けとるでもなく、自分の判断にもとづき自分から進んで行動に出る、という姿勢を重視します。実際こうした積極性なしには運動はまったく進まないでしょう。ここに集まった人びとはこれから反戦の運動を始めようと考えている人たちばかりだと思えますが、とくにどうすればそれがうまくゆくという妙手は別にないのです。あえていえば、自分がやろうと思えば、まず行動を始めること、そして行動の中で考え、仲間たちと討論を重ね、また行動をする、という以外にはないでしょう。そうだとしたら、こういう集まりで後の列の椅子に腰掛け、発言をせず、人のいう話だけを聞いている——それではベ平連方式の正反対なんです。話し方が下手でもなんでも全然構わないのです——

「いわぬは腹ふくるるわざなり」昔の人はそう書いた。だが兼好法師に教わるまでもなく、市民運動とは、政府のやり方について、世の中のあり方について、役所や学校のやり方について、もう我慢できない、もう黙ってはいられない、そう思った市民が、言あげをし、異議をとなえて行動をおこすということなのであって、そうであるなら、腹の中におさめてグッと我慢したり、人の話を聞いておいてあとで一人で考え、あんなやり方なら自分は賛成できないな、やめとこう、などと思うのではなく、いいたいことをドンドンといい、反対なら反対ということが、そもそも出発点なのだろう。

引っこみ思案をなくそうということである。市民運動とは大きな声を出すことと見たり——ということだろうか。

定例デモでの提案

別のところでもちょっと書いたが、ベ平連には役員はおらず、労組や政党のような中央委員会とか執行部といったようなものがない。それならベ平連の具体的な行動プランはどこできまってゆくのか。ある意味では、それは大きな声を出すことによってきまるのである。

たとえばこうだ。ベ平連は毎月定例の反戦デモをもう四年以上も続けている。第一土曜日の午後二時、清水谷公園（地下鉄「赤坂見付」下車）に集まって歩き出す。東京以外でもこうした反戦の定例

デモやフォーク集会をやっているところが多い。このデモのための集まりの時、いつも一時間ほど集会を開く。この集会でのマイクはすべての人に開放されている。そこではいろいろの人が話をする。運動の報告もあるし、自分の意見をいう人もある。カンパの訴えも行動の提案もある。ある行動を始めるべきだと思った人はそこで話をすればよい。

ただし、その行動の提案は、提案するその人が先頭に立ってやるということが一つの約束になっている。つまり、自分はやらないがお前たちはやれ、というような提案では困るということである。だから「自分はこれこれのことをやりたいし、やろうと思っている。いっしょにやる人はいませんか」としゃべるわけである。

その提案に賛成の人がいればあなたのまわりに集まって、あなたの提案を実行に移すに違いない。もし誰も集まらないとしたら、もう一度つぎの機会に「自分はずでに始めた。だれかいっしょにやる人はいませんか」ともつと、大きな声で怒鳴ればよい。しかし、それでも誰も来なければ——その時は仕方がない。その提案は誰の賛成もえられなかったわけであり、一人でもそれをやりとおす覚悟をするか、それとも提案をあきらめて、捲土重来、ねり直した上で再提案を考えるしかないだろう。たとえそうだったとしてもいいではないか。恥ずかしいこと

はない。いや、ちょっとは恥ずかしいだろう。でも恥ずかしい思いを全然しないで運動をやるなんて考えが、今の世の中ではちょっと無理な話なのだろう。歌の文句にもあるではないか。「坐り込みをするのや、デモをするのはカッコが悪い。それはカッコが悪いよと、君は何度もいうけれど、平和のためなら——、構わない、ラララ、ランララララ……」

すべての人が小田実式に「シャーンナイヤナイカ、ナントカナルヤロ」という具合にいくかといえば、そうはいかないとも思うけれど、それならなおさら、小田実以上に大きな声を出すよりシャーンナイヤナイカ。

市民運動入門——その第一回は、引っこみ思案をやめ、恥ずかしがらずに大きな声を出そうということである。遠慮はやめようということである。

とにかく政府のほうはマスコミを使って、毎日のように市民運動は悪いものだと大きな声で騒ぎ立てているのである。だとすればわれわれの声はよほど大きなものでなければならぬわけである。

(つづく)

伝言板 橋の下大学

京都は三条大橋の河原、見知らぬ者どうしが気軽に集まって話し合う「橋の下大学」。安保・ベトナム・沖縄・愛・仕事などを、ゴザに坐って話し合う。(毎月第一・三・五曜日・午後2時)

週刊アンポ

への手紙

◆ 阻止・往復

佐藤の訪米阻止とはどういうことかわからないとその青年がいうので、ぼくはこんなふうに答えた。

もし安保反対勢力がもっと強かったら、訪米阻止ではなく帰国阻止をやるだろう。行きたかったら行かせればよい。佐藤が、でかけていったときと同じ資格で帰国できるかどうかはわからない。残念ながらそんなふうには構えているだけの力はないから、訪米反対の意思表示だけでも行動において示さねばならない。その意思表示にしても、ぼくたちの力がもっと強かったら、火炎ビンなど投げなくてもすむのだ。

そうしたらその青年は言った。どうもすこし話がはっきりしないようだ。行くなどいうのに行ったりは、帰ってくるなどと言っても帰ってくるだろう。

それはそうだとぼくは答えた。訪米阻止と帰国阻止とはどっちみち一つである。こちらの力が強ければ、どっちか一つですむのだが、それですまなかつ

たら両方やらねばならないだろう。(梅本克己)

◆ 死の商人・日本

安保がなければ日本の生存権が脅かされ、国富に被害を蒙むること必定だとして、狂気の宣伝をする政府・自民党その背景の右翼団体。また逆に、安保によって日本国民はかくの如く基地公害を受けていると、安保による被害調査を公表するのみで自己満足する、いわゆる進歩的政党。——しかし、そのいずれの政党にしても、安保のもつ国民の被害者意識をかり立てるだけであって、安保のもつ、アジア全人民に対する恐るべき加害性・攻撃性・反人民的性格に言及するものの少ないのはなぜだろうか。真の日本の独立の回復と、アジア諸国、否全世界平和の決意は、日本の安保を粉碎する戦いによってのみ実現し得ることを訴え、そのために全日本のいたるところに街頭闘争を(人間の渦巻を——小田実氏のことば)展開するために、「週刊アンポ」は紙の弾丸の役割を果たすべきであろう。

(長崎市・岡 正治)

◆ 安保体制の一粒の砂

安保条約は、この十年間に、安保体制にまでかためられた。

一兆五千億円の防衛費の中心にあって、核弾頭までほしがらうになつた自衛隊。憲法などかなぐりすて、自主再軍備の強国になれ、といひだす防衛産業。前途にまちうけているのは、部分的徴兵制とアジアにおけるアメリカ軍の肩がわりである。

安保体制は、ゆるぎない既成事実になつたようにみえる。しかし、物理学者マクスウェルの主張のとおり、どんな堅固な体系にも、大きな砂の山が一粒の砂の動きからくずればはじめるように、シンギュラーポイントというものがあつた。

いまの場合、シンギュラーポイントとは、われわれの「ノン」の声であり、「ノン」の行動である。だれのどんな声や行動が安保体制をくずすシンギュラーポイントになるか、その競争をしよう。それには、声と行動がもっともとふえ、渦をひろげなければならぬ。

この雑誌は、競争のための連絡センターにならなければならぬ。(久野 収)

◆ 佐藤首相への注文

1 私はずねに話し合いを尊重する。佐藤首相の渡米を阻止する必要はない。それより、日本国民の意志を堂々と先方につた

えるように要求すべきである。そのさい、どういうことを言うてくるべきかについては、大いに注文をつけてよい。

2 社会主義国とくに中国の敵視を基本とするあらゆる外交政策には反対である。したがって安保は漸次縮小の方向で改めてゆくべきである。

3 中国、ソ連、アメリカ、日本をふくむ地域的平和協定のごときものをつくる方策を考えてほしい。それが極めて難事業であることは承知しているが、日本が生産力世界第三位の大国になつたということは、そういう難事業をあえて試みようになったというところに意味がある。(桑原武夫)

◆ 知的大衆民主主義の実験として

「週刊アンポ」の創刊にあたり、この雑誌が、もっとも広範な「大衆」の立場に立つて「安全保障」の問題を、文明的かつ未来的な方向で、もっとも誠実に追究する場となることを、心からねがうやみません。単純なお題目のパラフレーズだけでは、たしかに大衆はそのお題目への一時的な「義理だて」はするでしょうが、それ以上に、本当の力となつてもり上つてはこないでしょう。迂遠かも知れ

ませんが、大衆——特に成熟した「おとな」の大衆の一人一人の知的、人間的判断力を信じ、場合によつたら、反対の立場、すなわち安保必要論もふくめてもっとも広範に、誠実に、しかも人間的なひびきをもった言葉によって、多数の人たちに判断の「材料」を提供する必要があるでしょう。それは「外交」といった、もっとも国家的・体制的かつ専門的な問題への、大衆の知的・人間的参加の実験——つまり、大衆が一時的な政治的勢力として利用されるのではなく、一人一人の人間が、その最高度の「自主性」において、私たちの社会の未来に対する判断をくだし、それが集团的対話を形成し、共鳴しあつて大きな社会的「力」となっていく、といった、まったく新しい「知的大衆民主主義」の実験として、非常に大きな未来的意義をもつと思います。

むしろ、こういうやり方は、当面即座に、大きなげしい力を形成しないかも知れません。しかし、安全保障問題が、七〇年の安保改定をこえて、むしろ近い将来における廃棄以後に、日本にとって本当に重大化してくる問題であること、さらに安全保障問題は、何も日本だけでなく、これからの世界——私こ

のみの言葉をつかわせていただければ、二十一世紀へかけての「人類社会」——全体にとって

きわめて重大な問題であり、古い、十九世紀的、あるいはそれ以前からの文明的伝統にもとづくやり方の行きづまりが、日

にあきらかになりながら、それにかわる新しい政策、理念が、まだうみ出されていないため、この問題に関するかぎり、世界は慢性的危機状態にあることを考えれば、一種の「知的大衆運動」としての「週刊アンボ」は

こういった長期かつ文明的な見通しの上になつて、息の長い「原則」をうちたてるべきでしょう。そういった原則にたてば

当面の目標の達成の可否、あるいはこの雑誌自体の消長、短期的な効果といったものだけで、この雑誌の意義ははかられるこ

ともなく、たとえ来年六月をもって、この雑誌が消えるにしても、この雑誌のはじめた運動そ

のものが、より巨大な未来へかけての重要な出発点になり得ると思います。(小松左京)

◆ 佐藤さんカンゲイします

アメリカの平和運動は、佐藤首相のアメリカ訪問に感謝します。私たちは彼を歓迎します。なぜならば、アメリカ人たちは、ベトナムの残忍な侵略戦争

の苦しみあまりにも心をうばわれていて、安保の問題、日本とアメリカの関係をたいてい無視しているのですが、彼が訪問

すること初めてそれらの問題にふさわしい関心を受けとるからです。

いまやアメリカ軍隊はベトナムから撤退することを余儀なくされているので、私たちは、すべてのアメリカの基地を撤去すること、沖縄の即時返還を獲得するための努力を強めるでしょう。

いまやアメリカ人が日本の平和運動と手をくんで、安保のとりこになった日米関係を終らせなければなりません。安保は、日本をアメリカの軍国主義のアジアのとりでにしようとしているのですから。

佐藤首相の訪米は、太平洋を横断するその運動を創始すること役に立つでしょう。

(憂慮するアジア学者委員会、アジア代表マーク・セルデン)

◆ フロリダのフカと安保

安保とは何か。

いうまでもなく安保とは、日米安全保障条約のことである。

昭和二十六年九月八日、サンフランシスコで調印された。

内容について説明しよう。

アメリカには、フロリダとい

う海水浴に適した海岸がある。毎年、多くの海水浴客がここへ集まる。

ところが、この近所の海にはフカが出て、海水浴客の足を食いちぎったり、頭や尻をかじったり、時には丸ごと食べたりする。

アメリカでは、フカを食べる風習がない。その証拠には、アメリカにはカマボコというものはなし、フカのヒレのスープなどという乙な料理もない。だからこれらのフカを漁獲することもないわけである。そこで当然のことながら、フカはどんな

これらのフカを捕獲するため、日本の漁船がフロリダの沖へ出張してやらなければならぬ。そうしないことには、フロリダの海はフカでいっぱいになるからである。

こうして、日本人が、アメリカ人の安全を保障してやっているわけである。つまり日本漁船が定期的にフカ退治をしてやることを条文化したのが、前述の「日米安全保障条約」なのである。

条文は、前文と本文十カ条からなっている。国連の目的になうアメリカの自衛力の養成を期待され(前文)、かつ本条文にかわって将来フロリダ海域に

おける海水浴客の平和と安全を維持する国連の措置またはこれにかわるその他の安全保障措置ができることを予想している(第四条)。つまり、その措置のできるまでの、また自衛力漸増の責任を果たすまでの暫定措置である。

とはいふものの、フカ一匹とれないようでは国連の安全維持措置も将来期待することはできないであろう。もちろん、単にあちこちから遊びにやってきただけの、いわば規律のない寄せ集めの群衆である海水浴客が、自衛力を持つようになると考えられない。

これが、日米安全保障条約の大まかな説明である。つまり、われわれにとってはどうせたいしたことはないのであって、これにつけ加えるべきことは、もう何もなし。

こんなことで、なぜ皆があんなに大騒ぎしているのか、ぼくにはちっともわからないよ。(筒井康隆)

◆ 生きた市民の言葉で

「週刊アンボ」とは、愉快な週刊誌が出たものです。アイデアにまず大喝采を送りたいと思います。

なにしろ政府、自民党側では、ありあまるほどの悪銭を、

それこそ湯水のように使い、漫画家、芸能人までを動員して、安保支持の擬似啓発に狂奔日もないというありさまですから、当然反アンボ側からも、わたしたち国民の世論を打ち出す定期刊行物の、一つや二つはあってもしかるべきことは、自明すぎるほど自明なわけですが、とい

って、それを商業主義ジャーナリズムに望むことは、とうていまずできません。だからこそ、大いにやってくださいと言いたいのです。

残念ながらわたしたちのほうには、まったく悪銭がありませんので、さぞかしご苦労だろうとは重々お察ししますが、ぼくも蔭ながら微力だけは大いにつくすつもりですから、なんとか挫折することなく、大いに頑張ってください。

もっとも、頭の悪い大学教授たちの知的学会でも聞くような論文だけでは、とうていだめだと思えます。同じ内容を、もっともって生きた市民の言葉で述べたようなものに、重点をおいてもらいたいとお願ひします。

ときには愉快な悪ふざけだっていいでしょう。また、資金の問題にしても、一部のカンパなどに甘えかかっているだけではだめだと思えます。それも、もちろん必要だとは考えます

が、やはり、すすんで読者大衆が読んでみたいというような気持ちになるもの、言葉をかえていえば、十分独立採算のとれるものという目標で、やってもらわねばなりません。おそらく死活を決するのは、その点にあると信じます。

別に乱を好むわけではありませんが、おおいに貴誌の発展を期待したいと思います。第一、そうでなくては世の中が面白くありません、心から健闘を祈ります。(中野好夫)

◆「本土ナミ」が恥かしい
栄ちゃんは、「オキナワがある限り、日本の戦後は、おわらない」と言ったそうだが、現在のオキナワを作ったのは、自民党ではなかったのだろうか。彼の頭の中には歴史がないのだろうか。

基地を本土ナミにするという。だが、本土ナミとは、何と無神経な発言だろう。本土ナミという言葉の中に、オキナワを本土と見なししていない考えがあらわされている。オキナワは、まぎれもなく本土なのだから。そもそも、オキナワで、ゼネストが行なわれようとした時、オキナワの民衆はB52の即時撤去を要求した。その時、上京した屋良氏に、「六月撤去の感触」

なるものを与えたのは、栄ちゃんだった。確約を与えず、感觸を与えたのは、栄ちゃんのズルサ。その感觸のなんといいかげんなものだったことか。六月はとうに過ぎ、十一月になってもB52は撤去されず、外務大臣は、七二年におけるB52のベトナム発進がどうのこうのと言っているくらいだ。忘れ、ごまかされるのもホメられたことじゃないが、ゼネストは、あのおかげで中止されたのだった。しかし、あのごまかしが、どれだけ上手だったとしても、自慢になるものじゃない。それで、自分を信じろと言ったって、信じられる筈がない。訪米の前に、B52をオキナワから撤去させたら、その時は、信じてあげてもいい。

だが、考えると総評も「アマリニモ無責任、アマリニモ忘レッポイ」。ゼネスト中止の片棒をかついだのは、総評だった。六月撤去を信じ、その前提でゼネスト中止を説得したのは、総評の幹部ではなかったのだろうか。その総評が、あのことは忘れましたで、誰一人責任もとらず、訪米反対のゼネストをしなすと言ったって、総評の儀式としか思われまい。たたかうかわりに、お祈りするんだらう。
栄ちゃんは、安保が、日本の

繁栄に役立ったと言う。でも、それは、オキナワのために役立っていたと言えるのだろうか。そう、安保は栄ちゃんと、栄ちゃんが保護している人たちに安心感を与えただろう。それはたしかなことだ。だが、安保はオキナワの民衆に不安と苦惱を与えて来たのだ。オキナワの核基地なしに、安保に意味を与えることなんて、できないからだ。安保を破棄して、オキナワの返還に意味が生まれる。栄ちゃんは、外交は、そんなに甘くないと言うだろうけれど、そうなら、日本は大国だなどと言われないことだ。大国の外交というのは、安保を破棄して、オキナワを返還させることのできる外交のことだから。

信じるのが、できません
(なだ いなだ)

◆すべての人間の力を大きく
くひとつにあつめてもら
いたい

小田実氏を中心にして「週刊アンボ」ができるという計画があるときいた。私は実に予測をこえた案が生みだされたものだと考えた。そして、この案をぜひとも実現し、この案が真の力を発揮するものにしなければならぬと思う。それは、安保改

定がせまり、自動延長になるか、それとも再締結になるか、なお判然としない時期だった。しかし、現在すでに佐藤政府はすべての日本人の意志を問うことなく、自動延長、自動継続というかつてない処置にて、国民の大きな攻撃を避けようとしている。

一九六〇年の安保反対闘争は、日本歴史始まって以来の大きな人民のたたかいといわれているとおりの大規模なものだったが、それをはるかにこえる広さと深さをもったたたかいとして、一九七〇年の安保廃棄のたたかいは、たたかわれようとしているからである。

佐藤首相は、十一月十七日国民の意志と願いを泥土のなかに投げ捨て、アメリカに発とうとしている。われわれはぜひともこれを阻止しなければならぬ。それこそが日本人の総意であり、これを強力に押しすすめることこそ、この総意をいっそう強力なものとし、いかなる権力と暴力によっても、うち砕くことのできないものとするこ

とである。
労働者、農民、学生、市民、主婦、中小企業者、知識人は全力をそれぞれの位置においてつくすにちがいない。「週刊アンボ」は、ぜひともこのたたかい

の中で、安保フンサイへ人間の渦巻を！という人間の渦巻を起す妙手を生みだして、文章の力、写真の力、カメラの力、歌の力、絵の力、マンガの力、すべての人間の力を大をきくひとつにあつめてもらいたい。

沖縄はもちろん即刻、日本に完全に日本として解放されなければならない。また、ベトナム戦争のために火を吹いている日本本土の基地はすべて抹殺しなければならぬ。そして、私がいまさらに、そのうえ考えることは、この安保粉砕のたたかいは、沖縄完全解放のたたかいが、沖縄差別、部落差別、在日朝鮮人差別を徹底的になくするという全アジア的な立場にたって行なわなければならないということである。(野間宏・談)

◆別個の主体として

六〇年アンボのあと、それからの十年を考えた。六五年から六八年まで、強く、ひろやかな連合・共同戦線をつくり出す仕事に、私にのり努力をした。しかし反アンボの側の内部問題は解決されないうまま、十一月佐藤訪米の日が近づき、七〇年がくる。

いまは「別個に進んで、共に撃つ」の方式以外にない、と思う。佐藤訪米阻止か、反対か、

抗議か、交渉内容の要求か、など、争ってみたいところではない。活動形態や、日時や、場所は違ってもよい。ともかくむらがりおこる批判の声と拒否の行動が必要だ。そして、他人の悪口をいう時間をおしんで、各人、各グループが八別個Vの名にふさわしい活動主体となるべきだ。

そして、私もまた、ひとりの八別個Vの主体になることができるように、考えたり、書いたり、街頭に出たり、ムキになったりしていききたい。どこまでも二等兵としてがんばりたい。

(日高六郎・談)

◆ 私たちの歴史をささみこむものを

基地の中には遊び場があり、映画館がある。千歳の子供たちにとって、それは他の子供たちがデパートや動物園へ行くのと同じ意味を持たされてしまっているのかもしれない。「愛される自衛隊」そのものののだ。しかし、その愛される——は明確な識別の上に立ってのものであることを、基地の門で、いやという程感じさせられる結果となった。千歳自衛隊19周年記念の日、私たちは隊員むけのピラなどを持ち、基地にむかったのだが、例の貧しげな風貌と

短かすぎるほどの竹竿が警備員の目に止まってしまったのだ。彼らがいうには、「ここは自分たちが管理しているのであり、自衛隊に好意をもっている者でない限り、入ることをことわる」ということで、それは、一般市民に公開という形はとっていながらも、自衛隊増強——国防意識の強化——軍備に対するアレギーの解消を意図したものにほかならない。

私たちは、私たちの人間性を圧迫してくる壁を一つ一つ告発し、弾劾していかなければならない。と同時に、自分の中にあるねむれる部分をもあきき出していかなければならないだろう。

週刊アンポの中に、私たちの歴史をささみ込んでゆきたい。週刊アンポは、従来の雑誌からはずれて無軌道に走って欲しいと思っております。

(札幌市 山田茂美)

◆ サボテンとアンポ

ある大学祭の政党討論会で、自民党の代表はこういった。

「日本は、この壇上の美しい花のようなものです。アンポと自衛隊が無ければ、外敵にむしられてしまいます」

私は答えた。

「自民党は、花をむしりに来る敵を減らすことをしないで、花

払 込 票									
※	口座番号	東京	十	万	千	百	十	番	
					4	2	8	6	
※	加入者名	ア ン ポ 社							
※	金 額	億	千	百	十	万	千	百	十
※	払込人住所氏名								
※	料 金	払 込 円	特 殊 円	受付局日附印					
※	備 考								
(郵 政 省)									
局号 番印									

記載事項を訂正した場合は、その箇所に証印してください。
各票の記載事項にまちがいのないことをお確かめください。

文字は正確、明りように、数字はアラビア数字を使ってお書きください。

払 込 通知 票									
※	口座番号	東京	十	万	千	百	十	番	
					4	2	8	6	
※	加入者名	ア ン ポ 社							
※	金 額	億	千	百	十	万	千	百	十
※	払込人住所氏名								
※	備 考	受付局日附印							
(郵 政 省)									

各票の※印欄は、払込人において記載してください。

に武装しようというものでしょう。それでは、自民党の花園はサボテンとトゲだらけのバラの花だけになってしまうでしょう」

満場爆笑だった。日本の花園を、いつまでも美しく守らなければならぬ。そのことに日本人に異論はない。

政府・自民党は、日本のまわりを取り巻いている勢力との間に、軍事的、政治的緊張を、取り除く努力をせず、むしろ、それを高めるまま放置している。

このことに、私は深い怒りをもつ。具体的にいえば、「中国の脅威がある間は、沖縄に核兵器を持ちこまないと、約束するわけにはゆかない」と、アメリカは主張している。それに対して政府は、「事前協議を弾力的に運用する」といういい方で、アメリカの日本・極東における軍事行動を、自由化すると譲歩した。また、非核三原則は一時的政策だと弁明して、将来、核も

ちこみを許容するポーズをしめた。また、多額の東南アジア軍事援助の肩がわりを約束した。これは「アジアの脅威」をタネとして、アメリカ側に押しまくられた姿である。

そして、政府・自民党が、多年にわたり、対中国敵視政策をとり、国際緊張を取り除く努力

を怠ってきた結論である。なぜ中国政策を捨て、平和・友好の条約を結び、東洋の緊張を減らそうと努力しないのか。そうすれば、アンボも要らぬし、日本の平和は確固たるものになるのではないか。

サボテンのようなトゲで、近隣諸国をチクチクと刺すのは、やめにして、トゲをむしろ政策を取れないものか。トゲだらけのサボテンは、やがて、東洋の花園から追い出されてしまうだろう。公明党は、友好と平和のかけ橋を、世界の国々にかけるために、いま、懸命に戦っている。

(公明党・渡辺一郎)

すみからすみまで

目次のない週刊誌、どこを探してもページ数のない週刊誌は、いかがでしたでしょうか。これで「週刊アンボ」創刊号は、あとわずかに振替用紙を残すのみです。最後のページのすみまで、どうかご利用ください。「週刊アンボ」は、これから始まるのです。「週刊アンボ」は、全ページをあなたに提供します。原稿を送ってください。

「週刊アンボ」とは

安保条約に反対している私たちの広場です。私たちみんなでアイデアを出しあってつくりましょう。

すべての活動は、私たちみんなの購読料とカンパによって運営されます。

ぜひとも、予約購読をお申込み下さい。

「週刊アンボ」は11月17日、佐藤首相の訪米の今日、創刊され、資金のつづくかぎり、反安保の行動をするすべての人びとの共通の場として発行されてゆきます。

ご送金はこの用紙でどうぞ。

アンボ社

東京都新宿区神楽坂6-44 石井ビル
電話 03 (267) 2471 (代)
振替 東京 4 2 8 6 番

通信欄

ご送金の内訳をお書き下さい。

「週刊アンボ」を第 号より第 号まで毎号 部を予約購読申込みます。
(予約購読料 1部につき送料とも5号分で500円。10号分で1000円)
送り先(楷書ではっきりお書き下さい)

住所

氏名

「週刊アンボ」への御意見、御注文など。

「週刊アンボ」予約購読料

「週刊アンボ」への資金カンパ

送金総計

円

円

円

この欄は、加入者あての通信にお使いください。

戦場の女

作詩 岩谷 時子
作曲 いずみたく

Folk RocK (R&B)

う ち の - あ の ひ と に - あ わ な い か -
き の う - は た け か ら - い っ た き り -
や み に と お く - き こ え る
あ の た ま お と - な ん だ ろ う -

うちの あの人には逢わないか
昨日畑から 征ったきり
闇にとおく きこえる
あの弾丸おと なんだろう

うちの あの人を知らないか
心やさしい 男だよ
胸にともす 火も消え
あの叫びは 誰だろう

うちの あの人には帰るのか
涙かれるまで 祈るだけ
毎日ここに いたのに
あの泣き声 どこだろう

うちの あの人には死んだのか
人をあの方は 殺せない
家も焼かれ ひもじさに
この子抱いて 出てゆく

うちの あの人に逢わないか
昨日畑から 征ったきり
闇にとおく きこえる
あの弾丸おと なんだろう

1970年11月17日発行の週刊アンポ
にかこまれた佐藤首相

へ起て
飢えたるものよ…
アラ!
インターちがい?

どうせ 日本人なんか
いないわよ
思いきり笑ってよ
いいじゃないの
沖繩なんて

ネエ!
週刊アンポが
でたわよ

週刊アンポ

創刊号 (昭和44年11月17日発行) 編集・発行人 小田実
発行所 (株)週刊アンポ社 東京都新宿区神楽坂6-44
電話03-267-2471(代) 振替東京4286

雑誌コード5063